

川柳塔



No. 881

平成十二年度六賞発表

十月号



本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版

教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8

TEL 06-6658-8741(代) FAX 06-6652-2928

川柳とは何か

—川柳の作り方と面白い方—

麻生路郎の幻の名著 価二〇〇〇円

川柳句集

椿 守

八木千代著 橘高薫風序文

価二五〇〇円・B6判一八〇頁

定本

西尾 棗句集

川柳塔社刊 橘高薫風序文

価三〇〇〇円・B6判二四八頁

なにわ川柳 この一句

橘高薫風著 藤沢恒夫序文

価一〇〇〇円・B6判一九四頁

川柳句集

和 正本水客とその仲間

価一〇〇〇円・B6判二五〇頁

◇お申込みは川柳塔社事務所へ

ありがとう

橘高 薫風

最後の巻頭言を何から書き始めたらよいか、二、三日手が付けられずじまい。半世紀近い川柳生活のさまざまな感慨が、一度に打ち寄せてくる。

先ずは三人の恩人にお礼を言わねばならぬ。一番は命の恩人である大阪大学医学部教授武田義章博士である。瀕死の私をこの世に引き戻し、以後三人の子を育てることが出来た。第二の恩人は麻生路郎先生で、句集『旅人』に接して私は川柳にのめり込んで行く。第三のお人は藤沢恒夫先生。まだ初心者域を出ぬうちに電波新聞の柳壇選者を幹旋して下さり、ジャーナリズムの選者への道を与えて、田辺聖子先生や木津川計先生との交誼を得るきっかけや、小野十三郎、秋田実両先生という大阪の一流文化人の人柄に接することも出来た。

川柳では路郎先生だけでなく、病院で

の初心の作句時代からすれば四十年に近い庇護を受けた西尾葉、中島生々庵両先生の恩もある。師だけでなく、多くの先輩、仲間、後進の柳人諸氏のご支援も大きな力であった。仲間には先輩格の岸本吟一、岩井三窓、中尾藻介の諸氏、同期には寺尾俊平、時実新子が居た。共に高ぶらず卑下せず、それぞれのペースで研鑽した。私はふあうすとの大山竹二氏の句にあこがれた。物故者、生存者にかかわらず心からの御礼を申し上げたい。

新聞雑誌、大会などでどれだけ多くの句の選をしたであろうか。佳句を得て満足のゆく選の出来たときの充実感、選者冥利に尽きる。それだけで柳人としての見返りは充分に得た思いがしたのだから、その他に何の報酬も望むことはない。ただただ川柳生活への感謝あるのみで、没句への心残りも今にして深い。

川柳塔社だけでなく柳界の各位に心からの御礼を申し上げる。

西暦二千年という節目の年に川柳生活のけじめを付けられる仕合せをしみじみ感じている。これからは川柳塔を見守る位置で余生を過したい。

昨年十一月に、畏友寺尾俊平が先立ってしまった。二人は伯夷・叔斉に倣って首陽山で蕨を採るような生活を約していたのだが、私が川柳塔にかまけているうちに定金冬二氏と一緒に幽明境を異にしてしまふ。その時、川柳塔の主幹を降りたら世捨て人になろうと決心をした。しかしながらそれは許されず川柳塔社の体面上とて、名譽主幹の名を頂くことになる。私は今、体力の限界を切実に感じている。体力の衰えは氣力を萎えさせる。この肩書きをどう受け止めるとよいのか。馬車馬のように走り続けて来た半生に悔いはなく、ありがたいの一語に尽きる。我が儘を長らく見守ってくれた家族にも感謝を言わねばならない。今は四方八方にお礼を申したい気持ちの他は何もない。余生をたのしく送れるよう健康に留意して、気が向けば、やあやあと地方の皆さんに会いに行きたい。新しい世紀を迎え、新生川柳塔の発展をひたすらに願う。皆さん、川柳塔をいつまでもご支援下さい。ご健勝を祈ります。

半世紀の幕を下ろして安らかに

薫風

座右の句

脱ぎ捨てた父の軍手がまだ掴み

(耕花)

私の句

一本の藁ほどですが赤い羽根

角野仁清

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ありがとう

小鳥たちの緑

川柳塔(同人吟)

この句 この人

自選集

川柳の群像 林 荒介

誹風柳多留二四篇研究 22

水煙抄

大空のこころ (117)

平成十二年度 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞

茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞

秀句鑑賞「同人吟」

水煙抄

橘高薫風 (1)

遠山可住 (2)

橘高薫風選 (4)

橘高薫風 (48)

東野大八 (49)

河内天笑選 (54)

橘高薫風 (56)

橘高薫風 (60)

橘高薫風 (87)

中村ゆきを (88)

清水潮華 (101)

小鳥たちの緑

遠山可住

米作りの病気の中で一番厄介なものにイモチ病というのがある。薬のなかった昔は、この病気に泣かされた百姓の歴史がある。今ではいい農薬で防除出来るようになった。この農薬撒布の中に、ヘリコプターによる村中一斉の航空防除という効率の高い方法がある。現在では地上からリモコンで操作するオモチャのような可愛いヘリコプターだが、当初は操縦士による大型ヘリコプターだった。蛸の足のような谷あいの田や棚田など、もれ落ちのないように事前調査をする。一番気をつけねばならないのは電線や架線などの障害物で、これを見落とすと重大事故になる。撒布当日になると、この調査をもとに案内役がヘリコプターに同乗して撒布区域を操縦士と確認飛行する。長い説明になったが、この案内役が私の仕事の一つだった。外がよく見えるように、ドアは取りはずされていて足元三〇センチの外は空中である。ベルトで腰を固定しているだけだから、狭い谷間での旋回など生きた心地がしない。右へ左へ、上へ下へ、蝶

愛染帖

茴香の花

「正」

一路集「強い」

「慌てる」

初歩教室「石」

田辺灸六様を悼む

石垣花子さんを偲んで

九月本社句会

各地柳壇（佳句地十選／早川盛夫）

■閑人閑話 私の映画ノート

柳界展望

十月各地句会案内

■編集後記

波多野五楽庵選 …… (98)

西出楓楽選 …… (102)

住谷石舟選 …… (104)

相馬銀波選 …… (104)

原 さよ子選 …… (105)

吐田 公一 …… (106)

小野 克枝 …… (108)

白根 ふみ …… (109)

田中正坊 …… (114)

田中正坊 …… (129)

楓楽・希久子 …… (136)

座右の句

歩には歩の進む道あり王手飛車

私の句

躓いた小石は老いの道しるべ

鈴木 トヨ子

(公一)

鈴 木 トヨ子

鈴 木 トヨ子

鈴 木 トヨ子

鈴 木 トヨ子

鈴 木 トヨ子

鈴 木 トヨ子

の舞いと言っても言いすぎではない。よほど運を天にまかせないと、とても案内どころではないのである。高所恐怖症の私だが、何故かこのヘリコプターだけは妙に気が合って、操縦士にほめてもらったものである。

案内が終って基地へ還る時、ホツと足下の緑を眺める余裕が生れる。その時だ、おや？なんてきれいなんだ！こんなきれいな山の緑を私は今まで見たことがない。基地へ降り立っていま見て来た谷あいや丹念に眺め返してみても、もうあの美しい緑はそこにはない。それが何かがわかるまでどれほどの時間が経ったか憶えていないが、アッ、そうだ、あの緑は小鳥たちが見ている緑だと気がついた。私たちはいつも木の下に立って緑を見上げ、山麓の小径から山々の緑を見上げていた。だが、小鳥たちは木々の上を飛び回って空から緑を見下ろしている。そう、下から眺めるのと上から眺めるのとの違いなんだ。私たちの見ている木々の緑は葉の裏側の緑であり、小鳥たちの見ている緑は葉の表側の緑なんだ。葉の表と裏で緑の濃さや輝きが違ふことは誰でも知っている。小鳥たちはいつも葉の表側の輝く緑を見ていたんだ。だからあんなにくるくると輝く目をしているのにちがいない。ヘリコプターは足の下に広がる素敵な小鳥たちの緑を私に教えてくれた。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

堺市 桑原道夫

砂浜の瓶は神ほど汚れたり
岬巡りのもつともつまらない岬
鼻唄や鼻の頭に虻飛ばせ
金箔は銀箔を侮りつつ恐れ
機関車の音立てていくかたつむり
炎天の暗さ自転車屋の暗さ

守口市 結城君子

山椒の実舌にひろがる暑さかな
アッテンボローの鳥の世界も力づく
終焉の花火華やかに消える
白内障忘れて観てる草競馬
まいまいにこんなに好かれても困る
ここだけの話だけれど影法師

イタリア紀行

和歌山市 木本朱夏

火の国に火の山眠る夾竹桃
うつぶせたままの時間がポンペイに

ポンペイの売春宿の赤い壁
聖人の眠るアッシジ小鳥来る
ピノキオの鼻の長さにある夏日
死に絶えて空の蒼さが残るなり

青森県

西谷大吾

まんどろにいのちが燃える北の夏
一粒の米を夢見る休耕田
出稼ぎの唄を忘れた北の駅
散骨は不要こんがり焼きつくせ
流されて石は大河の夢を見る
蟻のように一途に渡る丸木橋

竹原市

三宅不朽

よく視るとヒロインの鼻おもしろい
便利さの中で便利が軋み合い
八月の土 八月の甲子園
透明な鉄とみし立山ぞ

民宿のごとし母亡き妻の里

声も句も年金暮しに似てきたり

米子市

政岡 日枝子

上向いて睡す自分を責めながら

ますます淡くおぼろおぼろの余命表

眼を少しあけてよ喜びが見える

各停でガタンと止まるのが怖い

ひとすじなわでいかぬ点滴だましっこ

あわてる事はない晴舞台のみ残す

豊中市

安藤 寿美子

サンナントカばかりでごつちやになるイタリア

Eメール私は電話で聞きまっさ

鏡の中のこの婆さんは誰やねん

私からチャンスはいつも逃げてゆく

七回忌六年間の礼を言う

お迎え火何をうろうろしてなはる

和歌山市

福本 英子

便箋を前に思いがあり余る

八月はサダコの像と折鶴と

御巢鷹山のジャンボよ今年はコンコルド

裁かれていますのは多分親だろう

ピアスでもしよつか耳が淋しがる

法師蟬今年も亡夫と来てくれる

大阪市

川端 一步

湯につかり今日の出合いを指で折る

上質のユーモアデザートにどうぞ

大根の葉っぱをくれた店が消え

滝の前立って心のキズ洗う

嘘のないくらしで金が貯らない

行き先が決まれば選ぶ文庫本

唐津市

山門 幸夫

遠い日の思い出辿る終の旅

冥土へは杖が頼りの独り旅

左手が空いたらどんなに寂しかろ

月下美人チャンギーの月連れて咲き

夜来香シャン高原にふっと佇ち

虹の浜抜がる玄海七色に

富山市

舟渡 杏花

余白まだ小さな絵なら埋まりそう

身の丈に合わせ太鼓を詠える

朽ち果てる前に一度は吠えますか

目刺し焼く君とささいな根比べ

易断へ本気で座る気の弱り

三日保つだろうか父の空威張り

河内長野市

加島 由一

君にあげる故郷の星三千個

続けよか止めよか男五十七

生きてるときつといいことあるからね

同僚の愚痴をにこにこ聴いている

長男の意地母さんは俺がみる

梅雨あける金庫の金を虫干しに

豊中市 吉田 あずき

蟬の声僧の経より血が通う

墓詣り父母との距離が埋まり出す

蓮池の刻デジタルであるものか

ハイテクの網の中から逃けた月

世界地図知らない間に出来た国

長寿笑む聞こえなくても聞こえても

和歌山市 西山 幸

縛を解くと影が勝手に動きだす

疎ましい現実へ買う穴子鮓

速球緩球みんな裏目に出てしまう

悪戯電話おんなひとりとわかるのか

辻褄が合うように絵を裏返す

ふらついて心も瘦せてきたようだ

松原市 小池 しげお

檜 櫓の背丈は知っている

入道雲とうに覚悟はできている

金婚の妻の味から逃げられぬ

くり返しくり返し来るさお竹屋

鈴虫とおんなじものを食べて夏

その場所で吸っているのに睨まれる

和歌山市 牛尾 緑良

ヒロシマの後に大きく書く命

蟬時雨 少年の日もこのように

白桃の脆さ愛しさ息づかい

少年Aその他もろもろいて若さ

頑固とはむかし涙の父を見た

正論が正論のまま風化する

神戸市 小林 一夫

寿司桶のまばらにへりて通夜の卓

柩かつぎて歩めば遠き蟬しぐれ

かぶと虫がさごそ動き孟蘭盆会

ポキポキと指を鳴らせし凡夫かな

たよりなき人生耳垢とりながら

熱の子へ妻のつくりし冷菓かな

竹原市 小島 蘭幸

おふくろの欲を笑って聞いておく

銀婚式までには溜めておくように

懐かしいうしろ姿がある坂よ

墓参り犬がよろこぶ坂がある

五十二歳まだ献血は出来ますか

昭和二桁もう懐かしい響きする

高槻市 江原 秀夫

主人主婦どちらもあるじでまろく住む

柔らかい言葉じわじわ胃にささる

人脈の尻尾で河童よく泳ぐ

筆先が宇宙を書いている気力

結婚で一生の運使い切る

この嘘が最後の嘘か辞任の弁

米子市 白根ふみ

風しきり荒介さんの生身魂
蜩の背なかに施餓鬼しのびよる
天涯にまで滲むカナカナの祈り
流さねば流灯むねをはなれない
立秋に風も光も穂を探す
さるすべりそれぞれ雲の峰さがす

鳥取県 さえきやえ

しゃあら舟亡母を静かに送り出す
句読点打ってひとつの橋わたる
畑に井戸父の遺産に手を合わす
沖繩かばちや沖繩らしい顔である
雨の音生きるはずみがまたもどる
夕焼けに深いえにしが消えてゆく

岸和田市 高須賀金太

先頭は嫌いだ後ろから行こう
東京では大阪弁で通したぞ
ええ格好してもミュールはつつかけや
逢い引きは死語にこれみよがしのキス
十年が今では五年ひと昔
落日や鳶は哀しい色になる

相生市 中塚礎石

金もないもてない顔で縄のれん
年金へ有料だったボランティア
近ごろは妻も理屈が多すぎる

開店へ一分前のもどかしさ
幸せがこぼれぬように手を合わせ
厚化粧嘘が渦巻く中で生き

京都市 高島啓子

犬の鼻匂いを刻み込んでいる
目を閉じて下さいという歯医者さん
夜紙を切ると大きな音がする
本店を御堂筋から丸の内
東京の土産に駿河屋をくれる
本店に客あしらいで負けている

愛知県 早川盛夫

仲間から独りになると普通の子
本物のイルカに触れた夏休み
休まれて見れば間に合うアルバイト
ヒマワリのどっち向こうと要らぬ世話
貧しいが誕生日には花を買う
まんじゅうを三つも食べた仏さま

奈良市 天正千梢

危ないなあしかつてくれる人がない
武器持たず戦場に行くこころして
窒息の原因みせ場多すぎる
春をのむ花を浮かべた盃に
乾杯へはしやぎすぎてる紙コップ
霊を呼ぶいたこ指輪を二本さし

京都市 都倉求芽

夜も明けず薄暮のままの永田町

介護度は4か5か重体の政府

点ひとつ打つと別の字になる僕もなる

涙の筋見つけられたり文庫本

せつかな男を嗤う花の種

若者の夢は杜子春ほどもなく

茨木市 藤井正雄

喫茶店窓まで青いソーダ水

好きな娘を真ん中にしてハイポーズ

コップ酒自慢話の一人称

偉そうに日米間を書く日記

歩こう会風のさざなみ花菖蒲

茄子の馬作って見せる孫の守り

東大阪市 指宿千枝子

カレンダーの絵涼しげに炎暑なり

気がつけば白昼雲に乗っていた

お隣で呼んでるオーイ奥さんが

通リゃんせ左の耳へ通リゃんせ

台所は揚げず焼かずの膳になり

お借りしたお金のことも書く日記

八尾市 宮崎シマ子

九官鳥は口止めの金受取らぬ

曾孫という奇怪な者が側に居る

折角のお客へ只今断水中

洗濯機の水が汚れて生きている

コトと音がしても目覚める嫌な性

へこんでる夫に酒をふきかける

鳥取県 乾 喜与志

ピカドンの如くに露兵攻めて来た

赤紙はシペリヤ行きになつてたか

若い日の野崎参りの唄がでる

輪袈裟して立ち尽くされる地藏尊

母連れた冥土に釈迦はいなさるや

補聴器をかけたら蟬の音が在る

西宮市 山本義子

ふるさとの海がだんだん深くなり

亡母さんの分長生きをするつもり

鵜飼舟少しありますわだかまり

嘘つくと女にも出るのだ仏

年金の森でどつかと腰をすえ

ガラスの靴まだ履く夢を持っている

和歌山市 山口三千子

職退いて頭の切り替えまだ出来ず

常識の尺度夫とかみ合わず

過ぎ去った日々かがやいている日記

切磋琢磨少し小石に陽が当る

暑中見舞暦は秋になっている

子は異国永代供養考える

黒石市 相馬 一花

平凡を非凡に見せているポトル
長すぎる足を若者もて余す

混浴が好きでたまらぬバスタオル
パチンコに勝って軍歌で店を出る
麗人を釣り上げている花ことは

弘前市 高橋 岳水

還暦の心もとなき記憶力

小走りの癖がとれない靴の底
西瓜食うナース白衣を気づかつて
飛び入りのハネトの中の異邦人
灯点るとネプタ精気をとるもどす

弘前市 櫻庭 順風

仏壇と心を交わす正信偈
恐山荒む心がまた荒む

わくわくと心の旅路するベッド
蓮の花咲く間の池はぴんと張る
岩木山にいつも心が洗われる

弘前市 富士 慕情

ごはん粒老母の手紙が温かい
名人の風は客間に掲げてある
はめられたものではないとしかられる
手を打てば一目散に鯉の口
出張のポチが一番待っていた

弘前市 小寺 花峯

正論を抱いた時から石になる
天も地も逆さになつてゐる銚子
酒煙草善し悪しつかぬヤジロベエ

中流の伴せ守る靴を履く
肝臓が忘れてしまった酒の味

弘前市 一戸 ツネ

じよつ張りを見せて聞かせて大太鼓

笛太鼓痺れて遊ぶ羅漢さま
それぞれの星もざわめく火の扇
忘れてた心が帰るねぶたの灯
ねぶた囃子 夜想曲にと身を溶かす

弘前市 高瀬 霜石

二人三脚 風尻尾があるごとく
実は癌だったと言える三年後

昨日とはいささか違う今日の僕
叩かれる時は黙って叩かれる
勝ちたいと思うゆつくり靴を履く

弘前市 宮崎 ヒサ子

風鈴の涼やかな音に洗われる
孫からの手紙暫く楽しめる
幼き日語り花火の中にいる
携帯から川のせせらぎ洩れてくる
悩むほどの事もなかった隠し事

東京都 播本充子

惚けた者勝ちだと妻に脅される
ボクがあやすとホラ赤ちゃんが笑う
カッブルで行く献血も楽しいな
善人という名のルーズにも困り
ワッショイワッショイ得するのは誰だ

東京都 後藤早智

帰国子と猫とルンルン夏越える
夏ばてを一気に晴らす富士の霧
山荘で自慢のカレー振る舞われ
苦瓜のタイスूप良し子の料理
蟹気楼目指し砂漠の一人旅

大宮市 八田敏

マンションに故郷なつかし燕の巢
雷が鳴るとしとやか孫娘
お向かいのお目出度にまた老い悟り
国のため死ぬ十七歳の俺だった
わが死後の準備寂しい墓作り

町田市 竹内紫鍔

ストーカーめいて霊園屋の電話
技術史を疏水下りの舟が説く
検知器がタバコで鳴って安堵させ
金へんの漢字に躍る技師の指
リニアカー試走 山なみ串刺しに

横浜市 菱田満秋

から元氣出して見舞いを安堵させ
ほけてきたのを言われると腹が立ち
戦争を知らず愛国心もない
味の素男の料理ひきたてる
株なんか持たず株価が面白い

横浜市 清水潮華

贅沢が少しは出来る金の運
日記には書けぬマグマがふくれ出す
エアコンで勿体なくも風邪を引く
冷奴同居へネギを借りに行く
幸せの真只中がいる車内

横浜市 山下省子

コーヒーのニガミ残してさあ巷
そよ風とワルツを踊るあめんぼう
おしゃれだった母のお古がびったんこ
専業の妻三日目にもう嫌っ
胃袋が十七歳のおばあちゃん

横浜市 小野句多留

遠景の花のひとつに妻もいれ
職を辞し割り勘になる温い酒
ゆずられた席で一駅乗り過ぐす
錠剤を飲んで気合の朝を出す
耐える事美德と話す母の皺

川崎市 和泉 あかり

朝からの暑さ木の葉も動かない
わた菓子を提げて浴衣のスニーカー
銭湯に行くためだけの下駄を買う
鬱の字は見ても書いても暑くるし
ご不幸の噂が厨まで続く

富山市 酒井 輝

空き椅子が並ぶだあれも居ない箱
斎場に戻りいい子になった顔
信用を積み立てて来て金が無い
この歳に豆の国籍など問わぬ
貧しさで量る平和な世が欲しい

富山市 島 ひかる

修験者の立ちたる峰も観光地
突風の中で聞こえた亡父の声
暗闇の中で仏の手に触れる
整えた息で辛さを耐える坂
暗黙のうちに決った席に居る

富山県 増田 紗弓

冷暖房しっかり病室らしい壁
転んでもカメラへポーズしてみせる
ウリ食べる同じ育ちを笑う姉
漬け方を聞いてやる人やらぬ人
正比例しない報酬かもしれぬ

可児市 板山 まみ子

機内食だけが楽しみ十時間
ルンルンの出鼻をくじく熊の糞
この花のためにはるばる海を越え
熊除けの声も疲れたリユックサック
六十もショートパンツで過す夏

富士宮市 渥美 弧秀

諍いを流す夫婦へ茜富士
好物は回転ずしのさばこはだ
病床の友を励ます 富士あざみ
また友の鬼籍氷雨の降り止まず
八十五までよく生きたネと言われ

静岡県 蘭田 獏 沓

渋ちんの仇名財産守り抜く
部屋ごとに変わる瀬音よ山の宿
葱坊主ずらり並んだど迫力
ジャンボ機が花火の向う何処へ行く
盆僧も道中笠にサングラス

京都市 山海 友 照

庭の樹もわたしも秋の中にいる
淋しくて女の部屋にある残暑
日が暮れて亡夫の部屋で花を分け
なやみごと夕日に話しかけてみる
十月の星はわたしを叱咤する

亀岡市 井上森生

猛暑続き水遣り一番先は石

沖縄のころを伝えるめんそーれ

百日紅祈りつづけている証拠

丹波路になんと笑いの羅漢さま（清源寺）

MVP孫が笑いを撒きちらす

大阪市 西出楓楽

ねむられず一人相撲を楽しまん

戦争を思えば不況何のその

ことは尻透かせば敵意見え隠れ

ときたまに早く死にたいなど思う

爪に火を点すと風が消しにくる

大阪市 川原章久

戦の無い平和に迷う色が出る

医者注意飲まずに生きろに生き還る

音の無い手話が伝える温い風

風のように無燈火でくるひつたり

錆落しに頭をこする縄のれん

大阪市 安達はじめ

産むと言う弱さと強さ持つ女

主導権妻が握って放さない

陰口を叩く男がゴマをする

神妙に茶髪の親も参観日

帰っても窓際近く座る癖

自己防衛新聞種にならぬよう

相談へ良いことそんなざらにない

手紙書く返信の来る日を数え

暑いしんどいなどと言えない原爆忌

紅葉菊 日本の秋忘れまい

大阪市 岡本久峰

夏本番ここを先途と薄衣

肺活量耳をつんざく蟬しぐれ

夏の夢ああ堂々の進軍歌

パソコンに挑む傘寿の勇み足

奈良西瓜提げて初盆博多着

大阪市 小糸昭子

しゃべったら思わぬガスが抜けて行く

意外にも自信つけさす誉め上手

うろうろと我が家忘れた伝書鳩

買えもせぬモデルハウスを見て歩く

輪の中で踊るポーズは道化かな

大阪市 津村志華子

お人好し無欲で金に縁がない

天神さま暑くて脳がとけてます

今日もまたひとりの夕餉ひや奴

保険満期のち余ってどうしよう

うたた寝へ亡母がトントン背を叩く

大阪市 田中節子

大阪市 北勝美

溢れるもの何もなく枯れ無人駅
命重しカンカン照りの献血車
見舞には来ないでと聞き心病む
紫のストレス抱いて晩夏ゆく
小さな秋ときに大きな秋包む

大阪市 井上白峰

激動の世に熟年の無為徒食
残念の一語に尽きる尻尾切り
重い義理吃水線を超えて積む
懲りもせず火中の栗をまた拾う
老いの策右へ倣えの列にいる

大阪市 板東倫子

ぎんさんがきんさん何処と聞くそうな
うす味に慣れて人間とろくなる
籠の鳥老いの三食昼寝つき
今日だけは語り部たらん原爆忌
盆踊り厚底靴にミニ浴衣

大阪市 河井庸佑

緩めすぎ締めすぎ悩む子の躰
左遷の地よい友を得てうまい酒
変換の誤字まで機械見てくれず
跳人出てねぶた祭は盛り上がる
後の月声掛かるのを待つ仲間

政治家の勉強している保身術
万灯供養境内むせる人の波
遺品整理俺のか単衣にしつけ糸
ありがとうありがとう目につく古日記
介護設備そのままひきつぐ我々寿

大阪市 鈴木トヨ子

亡き息子手垢の日記抱きしめる
惚れこんだ仕事貫く妻が居る
花の下そろそろと押す車椅子
介護法ますます不安老いひとり
主義よりも顔を見てます扇さん

大阪市 津守柳伸

セクハラとイジメに隙は見せられぬ
堪忍袋つづくりながら生き延びる
国籍はあなたまかせの土瓶むし
無精卵産んだインコも無表情
台風をなだめすかして風の盆

大阪市 寺井東雲

気がつけば芯棒折れて自己破産
海の日あり山の日がない怒ってる
小鮒でも引く勢いは鯛に勝つ
我が娘ちらほらニキビ咲き始め
神の国一億みんな背負ってた

大阪市 松尾 柳右子

イチローのひげ剃りたいと思つてゐる
見馴れたらひげもまんざら悪くない
三日月に乙女の頃をなつかしむ
月夜だね今夜の用心解いて寝る
二人づれ月さまあとをつけて来る

大阪市 杉澤 汀

立前と本音を知つた子の不信
動かしたつもりが動いてゐるこちら
忘れたいことは忘れず独り酌む
ガングロの携帯電話何国語
放たれた鶴にも寂しい川仕舞

大阪市 大塚 節子

先見えた人に世間は程がよい
可愛らしいお子さんから勧誘し
電気ガス 鍵 大丈夫ひとり言
一合炊いて仏さんと朝昼晩
娘孫酔うては唄う父でした

大阪市 神夏磯 典子

今頃に咲いて罪です寒牡丹
兄嫁の出迎え嬉し墓詣り
何くそ何くそ言うて昏れる
肘鉄砲自分の甘さ知らされる
二〇〇〇年世間もうちも大変だ

大阪市 玉置 英子

ヒトゲノム期待と共にある不安
ラジオ体操に負けまいと蟬合唱
レモンの木揚羽に卵預けられ
補聴器は夜中も虫をきき続け
夕立のあとの涼しい晩ごはん

大阪市 清水 絹子

入金へ一瞥冷めた警備の目
ローン済み墓石にきざむおのが文字
百円也 石に寄進の今むかし
欠席へ丸したあとも妻に聞き
期待した割には高い店じまい

大阪市 鶴田 遠野

預かつた孫で川の字廻り
原爆に負けない亡父があつけなく
異常なし痛飲させる診断書
菩薩かとうしろ姿の老母思ひ
味気ない僕の人生嚙じる妻

池田市 岡本 吉太郎

ジャンケンで何でも決めた幼き日
老夫婦互いに縮んだ言い合つて
しくじつても平気平気と現代っ子
騙しても平気な顔の女です
チャンスとは風のように来て去って行く

池田市 栗田 久子

父の死で父を身近に感じる子

浴衣着てミュールを下駄に履きかえる

気配りの果てに目こぼししてしまう

道祖神崇めるごとくまんじゅしゃげ

すすきの穂すれすれにゆく赤とんぼ

和泉市 岡井 やすお

勲章はいただく方がみな白髪

運動会親の前では一人抜き

ハイキング十キロ過ぎて列が伸び

だんじりが見たい岸和田どこですか

孫たちのケーキも供え月見かな

泉佐野市 山本 蛙城

サラ金とタバコ注意はチラと見せ

倒産へ裸の王めこいつもか

祈るしかないのか八月の早

マスメディア捜せ少年の美談

関空の沈下いままらどうします

茨木市 堀 良江

話すことあって花火の老夫婦

線香花火思い出抱いてひとり焚く

緑陰に風の作った小さな闇

在りし日の父すわらせて籐の椅子

小鰻三尾 猫へ素焼きにして分ける

岸和田市 原 さよ子

煮込まれたうどん術後の胃に溶ける

さよならがまた玄関で喋り出す

喋るだけ喋り勝手な長電話

血圧のくすり仲よく飲む夫婦

手帳には秋の予定があふれてる

岸和田市 長谷川 呂万

無重力で浮けば腰痛治るだろう

世紀末あつてはならないこと続く

行き届く嫁に姑も腕まくり

南十字遂に仰いだメルボルン

プロポーズ君の手料理忘れない

岸和田市 田口 穰一

四島の返還やはり蟹気楼

また頼む分かりましたで万事済み

だんじりの太鼓に仕事手につかず

門構えほどでなかった祭寄付

気は急ぐが足が動かぬ八十路坂

岸和田市 岩佐 ダン吉

十七歳あつたかい記事はしくなる

握る手に通う何かを信じたい

反対はひとりだ一陣の風に

隙のなさ少し疲れた影法師

いじめ記事もう隅っこにされている

堺市 山本 半 銭

御陵さんの堀に昭和が沈んでる

田舎道 麦藁帽は亡父に似る

孟蘭盆会有縁無縁に百味五菓

精一杯欲張って振る抽選機

ちくわ好きの猫と仲良く暮してる

堺市 柿花 紀美女

嫁ぐ荷へ倅せいっぱい望む母

リストラでどきどきしてる脆い壁

炎天下 何の用事か母の影

世相に添い静かに余生生きている

誕生日わたしのためのバラを買う

堺市 志田 千代

リングジュースりんごは噛るものであり

好きだから守ったものがありました

依怙鼎脰やっぱりされてみたいもの

病院のにおいがしてるお年寄り

喪服着て日頃疎遠のご挨拶

堺市 黒田 真砂

入院で思いがけない夏休み

精一杯夏謳歌する白むくげ

風鈴に団扇昔へ逆もどり

点滴の雫七彩広がる夢

美食駄目旅行も駄目で青い空

吹田市 山本 希久子

母を背にもうこれ以上走れない

流されるときは流れてゆくいのち

ある予感夏の枕の浅き夢

荷くずれを直し六十路を折り返す

三行で足りるころよ一筆箋

吹田市 石原 靖巳

骨のある落書きだから消しにくい

迎え火に喜喜と飲ん兵衛やって来た

蟬取りの孫の仕草が俺に似る

くどくどと言うまい夏はところてん

鶺鴒舟わが一生を鶺鴒と重ね

吹田市 瀬戸 まさよ

革新の狼煙の一つ千葉すずは

強靱ね夾竹桃にさるすべり

白桃の箱入娘触れられず

父母の歳一倍半も生きている

朝食におにぎりの日はよく動く

吹田市 野下 之男

浮ついたこの世を嘆く蟬時雨

朝顔はベランダ越しに見送りし

初恋が悲しみと生く原爆忌

マグマでも思いの丈をはかしたい

満ち足りた夢に仔犬は丸くなる

催促は出来ないけれど惜しい金
書くことで胸のもやもやはらして
心配が自立する子にまといつく
ネオン街離れて小さい我が家の灯
人生もここまで来れば慌てない

吹田市 大谷 篤子

シーサイドそんな名前で建つホテル
当然のように安定剤を飲む
リベンジはあの世からする敗けいくさ
ブービーで我慢するしかない暮し
クーラーが直って早い秋となる

高石市 浅野 房子

指さして遠足がゆく木守柿
お茶でものに隠れたばかりごと
湯豆腐もコースにいれて紅葉狩り
町内の語り部となる噂好き
願い事仏へ祈る神無月

高槻市 傍島 克治

校長も人間されど教育者
悩むことあるから生きる絶壁で
老いた身でいっぱい欲が出る元氣
虫すだくワイングラスに過去がある
自分史の終章はまだ書けぬ

高槻市 井上 照子

へつらいも処世のひとつ深い椅子
本命を狙った餡が溶け出した
敵の塩有り難がつている純情
クーラーの部屋で黙祷終戦日
終戦日 大根の葉っぱ刻むなり

豊中市 井上 直次

大あくび前からうつり横うつす
五十年我が町探るウォッチング
扇風機独り占めする甲子園
身の整理二束三文佗しすぎ
金婚の祝い役人来る報せ

豊中市 岸田 知香子

戦争展とわに消すまじ平和の灯
鶴彬の直筆に逢う戦争展
軍服の写真いまでも持っている
電池切れ時計ゴロゴロ小引出し
イタリアから出した絵葉書届かない

豊中市 田中正坊

単身赴任父とおんなじ登り坂
肉じゃがが煮崩れてゆく佳い便り
鬼の影ちらはらとする下り坂
ブランター咲いているのは君と僕
ひらがなの母の便りと田舎漬

富田林市 中井 アキ

富田林市 片岡智恵子

甦る脳では無いがよい本だ
ほかならぬ私たのしむ孫連れ
母のため病気をしないようにする
交通事故自己破産する通知くる
携帯電話持たぬ夫と揉めている

富田林市 藤田泰子

一束の線香花火と秋になる
炸裂音抱いておりますゴム風船
奥様がいらっしやるから魅力的
生理的現象で見る裏ビデオ
「精霊舟」口ずさみつつ君想う

羽曳野市 吉川寿美

神の掌に預けてしまいたい心
仮面脱いで無口に還ったデスマスク
人生論の切口深い傷をもつ
わたくしのペンが妥協をしてくれぬ
鳳仙花弾け戻れぬ刻にいる

羽曳野市 三好専平

逃げるより忘れる方が早くなり
恋なんてつまらないからよしなさい
馬鹿もと石垣りに叱られる
内申書上手な嘘でぬりかため
ロボットのペットに顔を嘗められる

羽曳野市 福田満州

蟬叫ぶ籠のうぐいす黙り込み
皆冷房つけて気温を余計上げ
冗談にむきになりける初な方
のうぜんかずらの朱に励まされ励まされ
職退いて小まめに動く人と知り

羽曳野市 徳山みつこ

一雨が欲しい私もひまわりも
薬屋根が新参者を見定める
太陽が急に崩れた八合目
苦勞した人だろとても柔らかい
陽よ雨よ大地の恵み満ちて秋

東大阪市 北村賢子

熱帯夜明けりやワンサカ蟬しぐれ
満たされぬくらしに花は欠かさない
クレヨンをお口にぬったのと孫が
故郷の風閉ざした胸の戸を叩く
帰宅時間いまは私が聞かれてる

東大阪市 谷口義

何事もなかったように葱刻む
本店で生まれた猫を貰うてくる
先代の苦勞本店だけが知り
大切なことは男に言いません
いつまでも女で最後までおんな

東大阪市 安永 春
稲光り恐ろしい力見せつける

海底の神秘龍宮館めぐり

仕掛人記憶ないとは言わせない

運命の連鎖反応泥かぶる

ハンモックゆれて赤ちゃん夢の中

枚方市 前 たもつ

テレビの前で黙禱します八月忌

酷暑続き気づかう友は入院中

畦道の枝豆初秋の風に揺れ

大きな声して勝負がつかしました

この峠越えれば故郷見えてくる

枚方市 寺川 弘一

僕が生まれる前の光をくれる星

我が子より可愛くなった猫と寝る

小さな幸を転がして見る万華鏡

わたくしの二十歳を証明する写真

育児書をきちんと守り育てられ

枚方市 海老池 洋

神からのメモかも知れぬDNA

仏像の鼻にも歴史 飛鳥仏

好きなだけ降って夕立虹になる

けし粒もしかといのちを抱いている

お日様と一緒に起きて寝るいのち

藤井寺市 鴨谷 瑠美子
夏風邪の熱に身体芯が抜け

睡蓮とこっそり揺れた日を憶い

接点は秋に思う愛ひとつ

他人前で他人行儀になる恋よ

はぐれ鳥わたしにおいて籠はある

藤井寺市 高田 美代子

贅沢を言えないものに機内食

追い風を待っているのも歳のせい

味方からヤジられる日の不幸せ

沖へ出る波音だけを聞いている

涼風が吹いて気力がほん少し

藤井寺市 楠 昭子

何もかも隠さず言える母の胸

きびしさを黙って語る父の背な

叱られることも愛だと受け止める

好きという前に大きく深呼吸吸

下心外れて茶漬け食べている

藤井寺市 中島 志洋

再会の二人短い秋夜長

騙されている善人の目がきれい

翔んでいる女に敵が多過ぎる

見回して反対の手をそっと上げ

偽もんが本物よりもらしく見せ

箕面市 出口 セツ子

現在に燃え永久を信じてない花火

舌先で夢を転がすネオン街

ポケットから出す七色の嘘と夢

世も親も選べずマグマ抱く子達

いつか死ぬものだが見たい子の未来

箕面市 岩津 ようじ

人間の僕ウサギ小屋建てました

外出は駄目よじいちゃん干上がるよ

恐ろしや孫が大学生になる

卒業写真ほぼ半分は死んでいる

一合を食べ残してゐる老夫婦

箕面市 唐住 実

松の木をいれて日本の海にする

山寺の僧侶も消えて夏の午後

路線価の二桁下る熱い街

山頂で出合つた摂氏二十二度

宿の下駄二人が履いて出てしまひ

箕面市 椎江 清芳

長旅へ今出発の呱呱の声

襲名をすると羽織も重くなる

葬式セットそんなギフトはないかいな

北風に踏み出す靴にある野心

島一つ買って王者になつた夢

守口市 井上 桂作

お酒より人恋う人の町酒場

日一日孫は次第に重くなり

嫁が来て妻にふんどし止めさされ

学歴と背丈だけでも高い人

知らなんだ法はそれでは済まされず

寝屋川市 酒井 勇太朗

ボランティア自分自身が癒されて

鮮やかにサミット終えてメンソーレ

このところすべてのパワー妻が上

初盆で仏壇墓石輝いて

初孫に嫌々されてそれもよし

寝屋川市 堀江 光子

捨てるもの捨てて涼しい部屋となり

初恋を語る大人の童話かも

席につくや否やケイタイ甲高し

遠花火 一別来の酒の席

花火消えて今年の祭終りけり

寝屋川市 江口 度

忍従の痛みがわかる象の足

肩の荷は自分で下ろすものと知る

炎天の蟻よ前世の罪は何

ちらほらと黒髪まじる同窓会

新聞が一番いじめつこと思う

寝屋川市 高田博泉

幸せな顔をつくって里帰り
看護婦の小言まじめに聞く夫
年金をもらう年まで先ず生きる
暴言は妻以外には吐いてない
太陽に逆らう帽子かぶせられ

寝屋川市 森 茜

かもめーる局長さんが売ってはる
ムーディーなレストランよりうちの粥
涼やかな横顔ちらちらと盗む
八階に住んで子犬と遊びたい
大鉢へ植えたてまつる胡蝶蘭

寝屋川市 山本三郎

ロボットの猫も介護の仲間入り
夏休み田舎が欲しい都会っ子
地球汚染に地下のマグマも怒りだす
里帰り朝の空気を深呼吸
井戸を掘る募金に声を囁らしてる

寝屋川市 柴田英壬子

オレゴンより届いたブルーベリーです
スーパーにきょうのころの糧がある
猛暑なのに予定びっしりカレンダー
白川のもう叔母は亡き大文字
キラキラ星の歌を覚えたボランテア

寝屋川市 岸野あやめ

潮満ち干して人力の微々たるを
美容院靴の手入れを褒められて
渾身の力で夏を乗り越える
まだ生きてますかと社会保険局
誕生日はれより先をどのようにに

寝屋川市 平松かすみ

ご先祖に感謝の日なり誕生日
あなたには通らぬ妻の合理主義
残念なことのひとつにすねかじり
二人乗りバアちゃんパワーの見せどころ
姉上も孫としている口げんか

寝屋川市 籠島恵子

ズル休みわたしを少し休ませる
無視すればよかった媚びに見えたかも
ある時は殺意抱いてる蟬しぐれ
悪女にはなれそうもないただのワル
盆帰省 老母がうるさく言ってくる

八尾市 村上ミツ子

背くことなんか知らないかすみ草
誕生日姑から花束が届く
二枚目じゃないがこの顔ばくのです
大好きな人にお金は貸せません
ばくの体の一部になっている病氣

八尾市 吉村 一風

用のないいつもの顔とモーニング
少し吞めて口も達者な喜寿が寄り
塗り下駄のリズム見惚れる盆踊り
破顔一笑好きなビールがでんとくる
また何か探す声する老いふたり

八尾市 高杉 千歩

りんどうを供えて母に頼みごと
他愛ない孫の話で老いの午後
見えるところ磨いただけの住み心地
横文字の名刺が珈琲まですくする
本将棋小学五年と渡り合う

八尾市 高橋 夕花

幼子のごと泣きじやくる弟の計(弟の計 5句)
死にたもうなかれと祈る日々だった
時どきは楯にしていた亡弟よ
達筆の形見の書なり合掌す
蓮の花の中に消えてしまった長身

八尾市 長谷川 春蘭

ふうわりと万の夢生むシャボン玉
軽い嘘見抜かれている大ジョッキ
油虫夫への不満向けて打つ
割箸が素直に割れていい店だ
あの時の話 母さんならしよう

八尾市 内海 幸生

枯れ芒 死んだふりをしてるだけ
覚悟した樹から紅葉はじまりぬ
満天の星を拒んだサン格拉斯
締め切りを知ってる真白なページ
猛暑また住所録に朱線ひく

大阪府 米澤 俣子

居眠ったふりして聞いた妻の愚痴
周波数 時々合わし夫婦です
促成野菜思わす少女長い脚
満点でないから好きでおれるひと
熟練の腕ロボットに持つてかれ

大阪府 榎山 隆盛

路郎忌の想い『旅人』読み返す
札束があれば地獄を抜けられる
拝まれた金拝んでも返さない
滝の美は落差で決まるものでない
校長の計報小さく地方版

神戸市 山口 美穂

完全燃焼悔いなく蟬は生終える
ここだけの話がこだまで帰って来
仏様へ昼寝のあいさつするお盆
ダイエットの実行明日から明日から
ミニトマトの色づき鳥も待っている

神戸市 中村 ゆきをを

阿弥陀仏わしも分からんこの頃は

秋祭り神馬を乗せて離島まで

九十の母が倅の肩を揉み

別れなよ神主腹を見て祈り

元弟子を嫁はんにしてベレー帽

芦屋市 黒田 能子

やつとやつと二人の会えた長い橋

財産も日記も残さない老後

頃合いを見て咳ひとつしておこ

まさかまさかと現実を受けとめる

二階建てバリアフリーはまだである

尼崎市 田辺 鹿太

一度だけ腹の底から笑いたい

たこ焼のたこなら食べる蛸嫌い

死に場所は畳の上と決めている

晩酌は一合妻の処方せん

老漁夫がポツンと佇っている港

尼崎市 春城 武庫坊

万歩計蝶や蜻蛉に語りかけ

盆の墓地 悲惨昭和の碑が並ぶ

朝顔を見ると笑顔が湧いてくる

あと四月世紀を送る蟬が鳴く

何匹が今日で果てるか蟬時雨

尼崎市 長浜 澄子

金平糖汚れを知らぬ夢がある

生きるとや人それぞれにある器

リフォームが利けばいいのに終の章

全力投球した夕映えが美しい

あの頃が墨絵に変わる盆灯

尼崎市 的場 十四郎

それからは妻に任せて座が弾む

たくましく肩書つけて子が帰る

肩の荷を下ろしてからの医者通い

近頃のはたる甘辛しらず飛ぶ

子も育ち妻はゆとりの薄化粧

伊丹市 山崎 君子

猫病氣早じまいですクスリやさん

猛暑には勝てぬ立秋通り過ぎ

ヘルパーさん優しさくれる亡母の顔

寿命とは何かと電話涙なり(木村貴代子様へ)

精いっぱい生きて秋観るいとこ会

川西市 松本 ただし

老春が煙となった玉手箱

我輩はヒトじゃが猫に弱くなり

カンカン照り熱い番茶を喉が選る

入れ知恵と分っているがおしやまさん

二十世紀男結びが出来ぬまま

宝塚市 嵯峨根 保子

玄関に子供の下駄がある猛暑
お供えは送り火までに減っていき
冷めんを簡単などと言うなかれ
きざんでは忘れ きざんで又わすれ
期待したこの世だ蟬よ啼きたまえ

西宮市 奥田 みつ子

黒板に字を書くしぐさ夢さなか
注文の多い病人 外は晴れ
新月が十五夜となり転院す
入院を樂しむゆとり風は秋
武庫の流れ何も知らずに静かなり

西宮市 井上 松煙

不便だが鶯の鳴く侘び住まい
日記には読書と書いて居眠りし
コスモスのフォークダンスに風青し
飛行機を呑んで吐きだす雲の峰
歳なりに時代についてゆく構え

西宮市 西口 いわゑ

ふるさとは耳にやさしい山の音
皆既月食夫婦はあかず月をみる
虚と実のはざままでベンと遊んでる
五年日記わが葛藤の日の多し
二人三脚ゆっくりささえ合いながら

西宮市 亀岡 哲子

梅雨さ中晴れて西瓜に種多し
こおろぎ橋渡りまほろば母の里
長電話空いた片手で拭く机
電車には電車の都合発車する
わが歳と同じ校舎に風薫る

西宮市 牧 渕 富喜子

結果論するり出て来たところ天
サミットの島は本音を待っている
友病んでわが憂いなぞ塵の如
掃除機が止んでシャワーの音になる
炎天に夾竹桃は問いかける

西宮市 秋元 てる

スタミナが切れ意地悪も億劫に
淋しくて方言詩集出して来る
胸に置いたふしぶし太い亡母の掌よ
買う気などないがチラシを見る日課
麻雀で思わぬ姿見せる旧友

西宮市 長谷川 淳

照りつけてまだ照り足らぬ大暑かな
父母の逝かれし歳に吾もなり
冗談もマジにとられる無口者
蒲焼にされに生れたのも因果
真っ直ぐに帰った夜は妻が留守

西宮市 緒方 美津子

老いて尚 朝寝食る果報者

秋風に両手で湯呑み持つてみる

勧誘はもしもの時の事ばかり

日記帳にぶつけた頃がなつかしい

ブリクラで孫と肩組む好々爺

西宮市 刈田 泰司

夏祭り浴衣姿の美人アナ

どの色も暑いと思う日の画帖

南部風鈴 耳の底まで清々と

大阪で飲むならここや法善寺

混浴へ腰をかがめて男来る

西宮市 門谷 たず子

情け足らずか今年は咲かぬさるすべり

うたた寝を起こす火振りの呼び太鼓

六地藏に亡母の安否を問う煙

頼りすぎの辞書にいつでも嗤われる

生々流転 日めくりの数読むばかり

姫路市 古川 奮水

折衝へバッジの胸で口開く

廃屋へ夏草のなかシヨベル来る

追伸になって本意が読みとれる

団欒の舌にあんみつ甘くなる

湯上がりの幸せ計る体重計

兵庫県 大谷 幸次郎

ノースリーブしつこく蛇がつきまとう

百円の利子にしつこく税がつく

元気とは言ってベッドの上のこと

買物へブレイキ役もついてくる

ブレイキのかけ方がない軽い舌

奈良市 米田 恭昌

底抜けの妻の陽気に救われる

遠花火妻にすまないことと思う

ガングロも浴衣を着ればしなつくる

ラッキーマンやけっぱちに舞う風船

錆びはじめた老父の出番を待つ祭

香芝市 大内 朝子

樂天的に生きるおつりの人生だ

親孝行いまなら少しできたらに

大型のロボットできた世紀末

雷鳴は天の腹痛かも知れぬ

女手を生きて凜凜しい力こぶ

大和郡山市 坊農 柳弘

シンドニーできつときつとの女子マラソン

屈辱を握り潰した四面楚歌

天高く体調戻る大吟醸

法隆寺ゆつくり柿が熟れてくる

道楽の域は外さぬ菊いじり

和歌山市 桜井千秀

信念を変えて尾を振るから無様

絡みつく皮下脂肪さてどうしよう

酸欠の部屋へお洒落な花瓶買っ

かつての罪は問わず夫を今看取る

端正な顔もリストラ容赦ない

和歌山市 古久保和子

病人の足で通える喫茶店

ボーナスと言う遠いこだまがテレビから

アイラブユーなんて言えない飯茶碗

やけっぱちも有って楽しい踊り連

かき氷の山から捜す登山口

和歌山市 松原寿子

醒めた瞳に遇って自分を振り返る

激流のようなさだめと告げられる

シックレットラブわたしの胸に棲んでいる

突風を躲した所作にある魅力

炎天へ振り子も狂いそうになる

和歌山市 榎原公子

おお異変姑がへそくり放り出す

ご都合主義枷をつけたり外したり

角のない言葉を調味料にする

ニラ玉の皿こんもりと穏健派

風はタンゴイメージチェンジしたくなる

和歌山市 田中みね

お盆の三日 孫よ来ないで多忙なり

迎え団子まずはようこそ仏様

莫山より上手と思う私の書

過信した口もやっぱり軽かった

達筆より相手に判る字を書いて

和歌山市 青枝鉄治

大臣の魅力に負けて売った党

記憶にはないが金庫に黒い金

ロボットへ後を託して去る職場

尻尾振る気は更にはない二度の職

褒めるネタ探すに困る披露宴

和歌山市 楠見章子

味のある方言ひざの子に聞かす

自販機の中からあくび洩れてくる

幽霊が戦車に乗って逢いにくる

花みんな私の方を向く花屋

暑すぎて畳で泳ぐトドになる

和歌山市 川上大輪

千羽目の鶴が悲しい顔をする

船を漕ぐ私に羅針盤がない

情けなやペットボトルのお茶を買う

風が笑ったきつと何かを知っている

サヨナラを言ってしまったえば楽なのに

和歌山市 福井桂香

愛されて桃はまあるい影をもつ
傷ついたときには欲しい羽根枕
ヒトゲノム神の領域まで覗く
太陽の化身ひまわり真つ盛り
失敗談さらつと出来るようになり

海口市 谷口義男

適当に相槌打って聞く話
不幸中の幸いだよと慰める
活造りこれが本当の脳死体
採算を度外視せねば出来ぬ農
競り勝った椅子も孤独を知る思い

海口市 三宅保州

今晚が山と言つてるのが聞こえ(入院 5 句)
心臓病になつても口は達者です
名医でも一目置いている婦長
病院前の次は寺町通りです
お礼言う暇がなかった救急車

和歌山県 中後清史

夢を追いつづけ流れるさざれ石
食い違う主張へ歯車が軋む
天命に逆行をする医の進歩
補陀落で渡海の船を待っている
日が沈む水平線へ亡母浮かぶ

鳥取市 徳田ひろこ

作文の下手なまんまで秋になる
花も葉も落ちてから紫式部
ハミングで炊くお赤飯スィッチばん
浮き輪ながれて突然の大掻きに
忘れものの取りに戻る橋がない

鳥取市 武田帆雀

洩らさずに受ける栄光の盃
タイトルは「自由奔放」盆の菊
先週も今週もよく眠る獅子
新聞碁密かに並べ強くなり
一汗を流して朝と昼の飯

鳥取市 前田一枝

イヤリング内緒話をみんな聞く
若い日を着たくエプロン白にする
台所立てばやつぱり主婦の顔
新薬で殺せぬ虫が腹に居る
渡す人ない花束も買つて見る

鳥取市 福田登美

くだけ散る清水の夏を手に掬う
留守番へラムネの土産祭りの夜
盆帰省小さな安堵見せにくる
休日の学校チャイムあたたかい
再会の握手二幕は風になる

鳥取市 岸 本 宏 章

美人画に見とれて妻を見失い
小銭入れ汗の値打ちを知っている
ねずみ捕る猫はだれにも媚売らぬ
白菊のなんと寂しい花だろう
迎え火の向こうの父はまだ四十

鳥取市 岸 本 孝 子

クラーをつけて原筈いやという
おごるとはこんなことかと雪印
酷使した脳が白旗あげている
長生きをしていいですか新世紀
落ちこんだ影がしつこくつきまとう

鳥取市 杉 本 孝 男

折り紙が好きでリハビリよく進む
それぞれに果せぬ夢を追う凡夫
還らない過去を包んだあかね雲
花道を過ぎると秋の陽が落ちる
白黒の糸で事足る侘び住い

鳥取市 上 田 宣 子

一本の傘が血の氣を失って
浮き袋はなすと足は地に届く
はだかになって笑える場所のパスポート
しがらみの鬼をはだかにする祭
大粒の汗ありがたいありがたい

鳥取市 近 藤 佳 子

憎も愛も教えてくれた長い日々
抜擢も左遷も裏の力とか
ローン払う銀行という名のお店
泳ぎ下手正直だけで生きた父
愛も憎も昔のことよ青葉風

倉吉市 野 口 節 子

弁当を分け合う仲の牽制球
心臓に穴開きそうな恋心
春の海ゆるりと人を受け入れる
せっかちと住んで命を削られる
血液の流れも一級河川並み

倉吉市 山 本 玲 子

よれよれのジーンズ穿けるのも若さ
盆踊り年に一度の下駄を履く
山彦が風に流され戻らない
人面魚貴公子らしい顔をして
こだわりをみんな吐いたら秋日和

倉吉市 松 本 よ し え

化け方を忘れて狐情けない
情けない時でもピエロ演技する
子供らに貰う電動三輪車
丘に来てギター忘れたきりぎりす
グイエットいいえ叶わぬ恋のせい

倉吉市 山中康子

霧吹いて一息入れる午後のうつ
姉妹まちがえられるご愛嬌

老いの身に染みも延えんしがみつ
涼風を呼ぶささ舟のほとりから
日が暮れる昨日のドラマくりかえす

米子市 中井ゆき

草もみじ分けてお地蔵なでにゆく
友想うみんな違った花で咲く
好きだった木犀植えて母の樹に
野草まで黄花サボテンサンデイゴ
どつしりと泰山木に父がいる

米子市 木村富美子

掛声をかけんと立てん年ですわ
待った甲斐カサブランカが三年目
網を張る蜘蛛よお前も生きたいか
時として広い心を見失う
酒に酔い忘れてみたい事ばかり

米子市 林瑞枝

落暉して武者を匿うのは障子
野の花に埋もれ地蔵の眸はやさし
滴らすレモン家族の聞き役に
軒下で燕が巣立ってゆく生家
福を呼ぶ何時かは花の咲く日誌

米子市 門脇晶子

退職者無駄に動かぬ人になり
白い花には白い覚悟が出来ている
見忘れた顔に愛想笑いする
夕ぐれに歩幅みじかい数え唄
音たてて暑さとばすか大ジョツキ

米子市 野坂なみ

人と川つながり合って生きてゆく
嫌われて蛇鮮やかに脱皮する
鮮やかな区切り火葬場の煙
憧れの山へ登って帰らない
赤い色ときに仏も憧れる

米子市 澤田千春

わたくしの森で生きものの仲がよい
平凡な石も祈れば仏様
葉脈を荒れた呼吸がかけめぐる
五線紙に今日も私の蝶が舞う
通る度目線でゆれる夕顔よ

米子市 青戸田鶴

念ずれば神に届くと思いたい
亡姉をまた思い出させるシャネルの香
落し蓋に私は押しえられている
真剣にもしもの話切り出そう
盆近い私のまわりの仏たち

米子市 本吉宗光

觀光地ならば沖繩平和なり
報道の自由事件も波及する
献金が無けりや政治家辞めている
金の無い俺の命は無事らしい
孤独老無聊を消しに孫娘

鳥取県 谷口次男

トイレでも容赦はしない電話鳴る
楽しくて手までが散歩する会話
ネクタイを怒ったように結ぶ癖
曇天よ泣くなお前も必要だ
汗をかくことを知らない子に育ち

鳥取県 原みさを

二十世紀の真ん中辺の黒いしみ
二〇〇〇年ひとりで食べる幕の内
敗戦忌寡黙なままの父だった
削られて石が仏になってゆく
介護法ひとり歩きを強いられる

鳥取県 奥谷彩子

ナイヤガラ悩みをみんな捨てて来た
秋風にしほむ風船夏の恋
チクロ虫風も想いも深くなり
愛もかさかさコンビニのにぎりめし
折れ釘もしっかりと効く父の釘

鳥取県 乾隆風

また明日来ると請求書をくれる
旱など知らぬ殿さまお姫さま
汽車賃を残し幕の内をたのむ
二次会のしぐさに厠から抜ける
老いばれの糧に仏飯をいただく

鳥取県 埴寛子

どの欲も寝かせてくれぬ歳とれぬ
買物もパソコンでする居間の中
波しずめ打球見すえる刻が好き
誇り高い正調ホケキヨ簾ごし
ひまわりに鶯やはり絵にならぬ

鳥取県 土橋睦子

女偏畳んで生きる坂ばかり
母に似た声がしている盆の月
涙もろい女に触れぬようにする
風鈴がびくともしない熱帯夜
淡い恋菊人形の中に棲む

鳥取県 土橋はるお

人が見残す星を数える孫という
お似合いの夫婦に今朝も吹く微風
一役終えた案山子とビール飲んで
早寝して大きな夢が見れまいか
まだ死なぬそのうち借りは返せるよ

鳥取県 上田 俊路

水泳教室七十歳も幼児並み

美術館出れば六道湖夕映える (島根美術館行)

権現まつり復活させる神の国

台風の子報に月は青い貌

しがらみを切れば活路がみえてくる

鳥取県 国森 武子

星仰ぐ遠くて心しやんとする

小心で無宿の味をまだ知らず

螢草紫に咲き螢待つ

戒名を唱えぬ日なく夫憶う

生垣のくちなしの香に立ちどまり

鳥取県 橋本 多哥由

昨日今日明日を見つめて生きている

妻の愚痴あつというまにお付きあい

肩寄せて明日へ生きている夫婦箸

無理をして若い女医には叱られる

花好きで薔うちから水をやり

鳥取県 林 露杖

出揃った稲穂に炎暑ありがたし

生垣の刈込み済んで缶ビール

灌水の庭木に遊ぶ揚羽蝶

病名は数多寝起きに障りなし

孫去んでポカンと穴が空いたよう

鳥取県 羽津川 公乃

自家米の最後の仏飯高く盛る

食欲のあるそれだけを羨まれ

愚姉賢妹 父母に恨みは無いけれど

初の盆 義母義姉義弟兄までも

月見草追いやる道の広いこと

鳥取県 新家 完司

方丈も大黒も留守上がり込む

蟬の声頭から浴び結跏趺坐

蟬は己か己は蟬か無我の境

居眠りは無我の極みと覺えたり

別れまであと幾度の八月か

鳥取県 西原 艶子

端裂から贈るお手玉縫うている

矢面に立てる母性を子にもらい

友情の情報網が張つてある

倅せへ佳き大安の日を探す

大屋根を守る出納長で母

鳥取県 石尾 かつ乃

失敗も後後ほどに効く薬

一日の感謝お寺の鐘を背に

娘も孫も集いストレス消えました

採算に合う自家米を食べている

屋根裏も住めば都となる個室

鳥取県 田村 きみ子

欲ばって見ようか虹が消えるまで

彼岸花会って別れている絆

洗濯もの畳む明日も平凡だ

風立ちぬ秋のブラウス買おうおしやれ

秋風に向日葵ほっとする予感

松江市 佐野木 みえ

風の盆一度行きたい母誘い

一杯のバーボン神戸の夜を染める

古代蓮二千年経て蘇る

ざくろ酒を勧められたり天神祭

真夏日にバラが咲いたよ褒めてあげ

松江市 安食 友子

ユーモアを解して欲しい片思い

赤毛のアン流行る脱色どう見ても

酸素濃縮器じつと寝息を窺いぬ

偕老が代わり番こに舟を漕ぐ

反発心に誠を説いている母性

松江市 川本 畔

寸劇に窓はときどき固唾のむ

布団を被り針を眠らせようとする

閉じた傘連綿なみだ流すなり

眠りから覚めても船の位置きかず

くるくる素敵ぼくをとりこにする日傘

出雲市 竹治 ちかし

お互いの思いは違う思いやり

手抜きかも知れぬが無農薬野菜

凡に生き生命線が長くなる

自己主張していたペンの字が擦れ

パソコンに遊び外れた子が集う

出雲市 吉岡 きみえ

おはじきもひとり遊びはつまらない

夏の風邪わたしほんとにおばかさん

民謡の声が出ません先生さま

玉ねぎ一こじやが芋一こ夕支度

暦には過去は追うなと書いてある

出雲市 久谷 まこと

足の裏叩いて気合い入れている

頼もしい肩幅一步寄りかかる

誘い水鞍替えをする蛙の子

指切りをしたけど今朝は他人を待つ

早送りした万歩計持っている

出雲市 富田 蘭水

立秋や汗をふきふき暦よむ

逢いたさに黄信号まで突きとばす

性悪の説が気になるこの頃は

舶来の靴がブライド変えてくる

そと炎暑中はお見合いしずつと

出雲市 小白金 房子

八月の暦哀しい雲が湧く
赤トンボ迎えてくれる父の墓
星まつり銀河一筆太く書く
泡立草ふえて田圃が泣いている
上棟へ背負うひ孫の俵餅（八月十日）

出雲市 園山 多賀子

オイオイと呼ばれ空耳だったのか
華やかな思い出ばかり万華鏡
花言葉少し疑い深くなる
女偏鬱陶しくて紅を引く
無防備に安定剤を飲んで寝る

出雲市 岸 桂子

本当の味方峰打ちしてくれる
日めくりをめくり忘れる日の早さ
振り向けばどの坂道も母が居る
寝たきりの母に聞きたい事ばかり
無駄足もあつた轍を振り返る

出雲市 小玉 満江

入道雲いくさに負けた日も同じ
蟬の声有情無情となきやまず
汗出して鍋焼き食べる暑氣払い
父さんの十七歳を孫に話す
日本海赤い夕陽が今沈む

島根県 松本文子

カナカナが鳴く夫の忌を忘れずに
わたしの欲無くなりそうでぞつとする
生きること云々忘れた方が勝ち
明日のこと天気予報と同様に
がんじがらめの恋です夕日見えています

島根県 伊藤 寿美

窓の椅子人の哀しみ見てしまふ
勲五等今日も山女を釣ってくる
老妻の希望でバリアフリーにする厨
何れ又逢おうと弔辞しめくくる
泡盛り位で本音は言わぬプーチンさん

島根県 森 茂美

友達が増えて楽しいペンの数
ハングル文字波にさ迷う日本海
可愛げな鳥も弱肉強食者
歯科医師の動悸伝わる治療台
噴霧器にぼそつと落ちた蚊のいのち

島根県 榊原 秀子

一番先 私を確認する名簿
新聞が疲れのせいで読みづらい
私へ降りかかりそう大花火
星まつり願いをそつとつるす笹
もろこしの葉ずれに秋の風をきく

島根県 堀江正朗

雷さん僕には光なぞくれぬ
人は人僕は僕なり満足す
風呂上がり丸い団扇のまるい風
妻多忙 用ない僕は鼻掃除
夢の道今日もあしたも同じ道

島根県 堀江芳子

耐えてきたお蔭さまです陽の当り
土用うし鰻嫌いが買いいに行く
暑いから熱いお茶飲む爽やかさ
立秋を手繰りよせれば母の忌や
菜を洗う水溢れてるありがたさ

倉敷市 井上富子

じっくりとデーターを読む聴診器
出世魚 保身術には長けている
クラシカル美男に惚れていた昔
入試制度が深く絡んでいるいじめ
儉約な鍋で育った子沢山

倉敷市 小野克枝

逢えばまた白い心につく灯り
何も無かったように太陽顔を出す
満腹になると約束してしまふ
子や孫は知らぬであらう汗の玉
逆光を頼みに走る力瘤

岡山県 小林妻 子

炎六も無断で逝って許せない
間に合わぬ孝行ですが経をあげ
朝顔が見送る山の父のあさ
幸せと言うてもらえぬ米のめし
望郷へ傾く足を叱咤する

岡山県 矢内 寿恵子

筋通す古い女の古い詩
過ぎていく月日を偲ぶ夏の雲
沙羅双樹京にはじまる物語
疑心暗鬼の中に介護税引かれ
これからの命は神の意のままに

岡山県 荻野 鯨虎狼

失言で済まされそうに無い女
痛いほど肩たたかれて久し振り
三面鏡母から妻へ顔を変え
ライバルの無い人生を持て余し
本当の日本が残る赤字線

岡山県 富坂 志重

一歩だけ引けば笑顔ですむものを
石段で呼吸ととのえ神参り
労りの言葉身にしむ老いとなり
何度でも言うから雑音にされる
持ち合せの頭脳を責めるカタカナ語

岡山県 山本玉恵

片ちびて小走り好きなちさな母
灯を消してひとつの夢を追う
切り札の出す場所のないまま冬に
父と子を残して見切り発車とは
心の底に花の住所をうけとめて

岡山県 大石あすなろ

ど忘れの数も夫婦で五分と五分
塩の道辿れば亡母のドラマあり
的を射た助言あっさりかわされる
愛と言う鎖がまさか切れるとは
あげさげの上手の人の舌に乗る

広島県 森田文

炎天やりズムを保つのに苦労
世の中に手続き多い別れかな
一片の朽ちた木も無し二重橋
緑陰に青葉の笛をうたいおり
人間の鎖ができる嘉手納基地

竹原市 岩本笑子

盆踊り意外な人と後や先
釣り舟のゆるりとわたしの方へ
さっそうと高速艇はふり向かぬ
波を重ねて瀬戸内海は夕暮れる
アキレスは妻だと夫のひとり言

竹原市 時広一路

港の灯話し上手で聞き上手
神ほとけ八方美人かも知れぬ
停車駅欲しいよ孫の縄電車
ソフトクリームが歩く私は歩けない
帰れない森だと水は知っている

竹原市 古谷節夫

百年のスパンで明治が消えそうで
立秋へ第九奏でる虫の声
弱者には我慢がまんという政治
蠟燭の明かりの中に居る安堵
完投のベース崩さぬ兄の腰

竹原市 森井菁居

脚力を競うと年齢の差がわかる
直談判しての結果に悔いはない
人生のクイズを今日も解いている
脚色は要らぬにんげんドキュメント
妖怪を淋しがらせて里が荒れ

広島県 藤解静風

祈りから始まる八月の暦
金太郎の腹当てと見たキャミソール
十七歳だけが狂ったのだろうか
この道を来てこの道のほか知らず
介護保険ゴムで縛った蟹にする

宇部市 平田実男

全自動脳も体も退化する

子等よりも札が頼りになったウツ

桜散るように逝けたらなと思う

親の敷くレールを走る頼りなさ

留守電へ妻は他人の声で入れ

美祢市 安平次弘道

値踏みなどしない彼氏のプレゼント

処世訓男は少し無理をする

夢のような話がしたい水中花

針の穴だけが真実知っていた

臆病な父に許せぬ過去があり

香川県 神保坊太郎

すり傷ですむドングリのせめぎ合い

音痴だが乾杯音頭なら出来る

晴天霹靂 猪に笥掘られたり

金かねの世に人情が干涸びる

足痛の女房の顎が指図する

香川県 山地マツエ

でたらめな言訳聞いているタバコ

蛭追う昔の私にふと出逢う

寝たきりへ窓あけはなす遠花火

手作りのジャムが煮つまる電話口

御主人を組上にのせる午後のお茶

香川県 成重放任

甘い水失せて蛭も消えてゆき

水やりもこの乾燥におつつけず

菩提寺ではほ笑む亡父母の見えかくれ

妻の持つ舵孫達にあやつられ

信号機渋滞続けど知らぬ顔

香川県 川崎ひかり

定位置に家族の茶わん伏せて待つ

南北の握手うれしいチマチョゴリ

日記帳とどこどこに縞模様

蛭すむ里は人間住んでない

二者択一 運命決めた答かも

松山市 宮尾みのり

辛抱と意地が支えてくれた過去

命賭けた人と茶漬けを食べてます

足向けて寝られませんかそれつきり

沈黙という静けさでほぞを噛む

スランプのどん底知っている謙虚

松山市 丹下美津子

サヨウナラはほ笑み返す師のお顔

妻の味付け旨いと婿は姑にほめ

お紋りが縁で拾った海の恋

長男の祝辞嬉しい祝い膳

喜寿の父母囲んで子らの祝い膳

愛媛県 中居善信

ボロボロの刀大事に持っている
波乗りをしてる何時かはずっこける
銭勘定ばかりをしてる男だよ
退職をしても訪ねて来てくれる
泥船へ男の腹は決めている

高知県 赤川菊野

ミレニアム弾んでいます七十路坂
年なんて一度も思った事がない
夢の中白頭山が呼んでいる
千枚田へソ出しルックで立つ案山子
あんな男夫だったら塗りつぶす

唐津市 仁部四郎

盗作のような杜説も時にある
ワープロで折れやすくなる記者のペン
広告の記事でないから謝罪せず
読書欄各紙バラバラそれはそう
ボキヤブラリースポーツ記事で貯め直す

唐津市 山門タミ

熱帯夜何でも来いと開けて寝る
経上げる声に負けじと蟬しぐれ
我老いて亡母のきつさが身にしみる
梅干が今年は特にスッパイね
もう十七歳の許可などイヒヒのヒ

唐津市 市丸晴翠

最後には独りで越える雲の峰
新聞代払い憤怒の記事を読む
青春は指から漏れる白い砂
不揃いの足並でいい三世代
分数が理解できない学生服

唐津市 宗水笑

神様の特秘か寿命一覧表
残暑見舞 達者と分かる筆で来る
城のある街で寿命が延びそうだ
腕白の日焼けに潮の香が残る
帰省子の茶髪違和なし夏祭り

唐津市 山口高明

欠点を見せずお互い熱くなり
アベックが乗ったボートは沖へ漕ぐ
半年も住んで顔見ぬ両隣
親も子も人を笑わす事が好き
別宅のパパはヒヒンと馬になり

唐津市 久保正剣

駄洒落など聞いたことない無影灯
タムの栓抜いて河童の皿洗う
立ち入れば人それぞれの敗戦記
待ち呆け噴水背伸びばかりする
休診の札に権威という驕り

砂川市 大橋 政良

幻想の屋台かっぱと酒を酌む
真つ直ぐに歩き喜寿まで来た一途
指定席虹を掴んで来た男
貰い下げになったわたしの影法師

十和田市 阿部 進

恋心逢えなくなって知りました
渡る世は義理が重たい男の世界
甲子園我が青春が目ざします
大好きを嘘と知らずに信じてた

十和田市 小笠原 敏人

甲子園有珠山からの始球式
ボランティア始めと終りに顔を出し
入門書開いて午睡夏の椅子
雨上がり私も車も徐行する

弘前市 岡本 花匠

川の旅海は間近に共白髪
酒注ぐウニ活きいきと民宿膳
地酒酌む笑い羅漢の露天風呂
ことづての恋みのらせぬ月のかさ

弘前市 蒔苗 果林

夏の垢皮膚のお疲れわかるかに
はらわたが暑さに厚くなったらし
薄い髪暑さにこざりしゃしゃり起つ
暑さみな胸からネプタ連れて消え

弘前市 今 愁女

泥沼に薔薇より好きな蓮の花
蜆汁たんとエキスの朝の膳
毎年の祭りわくわく着る浴衣
キャミソールの次はキンタロの腹当てか

弘前市 中山 雅城

ボランティア神がいい点付けている
フラメンコ踊る激しい靴の跡
コンコルド離陸の勇姿堪らない
サマージャンボくじの夢からまださめぬ

横浜市 菊地 政勝

年金で楽しむ贅に知恵しほり
銀行で貧乏ゆすりする男
文明の墓場を見せた墜落機
印相で変えようがない社の不況

京都府 稲葉 冬葉

他愛なく甘えて本音出て仕舞い
幸せは掛け捨てでよし介護保険
携帯電話隣の席もドラエモン
久々の旅に一病考えず

大阪市 清水 利武

明日もまた暑いで夕日燃えている
ビールから涼をもらって生きのびる
地藏盆 赤蜻蛉に迎えられ
夏の恋実り秋の挙式待つ

大阪市 渡部 さと美

太陽はゴキブリなんて御存じない
子と寄って飲めると人に羨まれ
話し下手聞き下手ろくに聞いてない
子や孫が来ると腰痛おとなしい

大阪市 川久保 睦子

盂蘭盆や線香花火孫の声
炎天に日傘てくてく医者通い
蟬しぐれ読経の声の高くなり
蟬しぐれ止めてハブラシ一つきり

大阪市 中田 あい子

聞き耳を立てる話にからむ金
球場で拾った恋が町で消え
うっかりにど忘れがふえ七十路坂
リストラの波は船場の老舗まで

大阪市 辻川 慶子

ほんとうに光っているのは涙です
お寺さんも携帯電話持つてはる
住職の話上手な沙羅の寺
盆休み空気静かな御堂筋

大阪市 町田 達子

凌霄花 橙赤色に陽が燦燦
花暗がりにはクーニャンがひよつと居て
ゆったりと盆供の尼の足袋の白
塔婆名しつかりと読み盆供養

池田市 藤井 計光

ご機嫌の良い日甘さが溶けてくる
好きやねん鼻リングの彼連れてくる
念願のフェラガモ靴でルンルンだ
謝罪とは名ばかり心飛んでいる

和泉市 西岡 洛醉

年輪を重ね文机雑多なり
迂闊にも騙されました造花です
愚痴っぽくなった我が身に老い進む
十七歳夢も希望も切れました

貝塚市 池田 寿美子

イースター島のモアイも狂うこの暑さ
家を出る先ずは財布と鍵を持つ
愛犬に引きずられてるグイエット
コンコルド墜ちてもやはり空の夢

交野市 山川 日出子

千年の歴史が続く天神さん
竜おどり天神さんを盛り上げる
初公開パンダお疲れ王子園
サミットで貳阡圓札お土産に

交野市 森本 弘風
(益弘改め)

逆上がり出来たと弾む孫の声
妻と見るドーム野球は避暑気分
闇市の匂いで飢えを凌いだ日
船渡御にもう秋を呼ぶ赤とんぼ

河内長野市 植村喜代

この月もあの日の月も同じ月
サクランボ孫が顔見る食べはじめ
ばあちゃんの本と柳誌をもつて来る
暫くはスランプつづく暑さかな

河内長野市 井上喜醉

半袖の終戦あの日には忘れない
今日も照り西瓜が育つ貸農園
夢のない自分の歩幅確かめる
凡人の欲が突つ張る宝くじ

岸和田市 井伊東吉

夕立を待ち焦がれてる泉州路
夜通しのクラー悲鳴聞こえる
野球漬け昼高校で夜はプロ
ゼロ金利解く日銀に拍手する

岸和田市 原苑子

朝ねぼう行方不明になった夢
クレソンの茂り待つ間に丸坊主
自慢話一つない子が頼り甲斐
幸せになつて作句がままならぬ

岸和田市 藪野けい子

残暑まだ電柱の影で信号待ち
不美人と認めています厚化粧
美人と同席し開くコンパクトの数
少子化に子のわがままを許してる

堺市 宮本かりん

嗅覚の鋭さ大は辛からう
変りなく過す喜劇の一日か
無表情熱いドラマを秘めている
感情のままに蛇口の水はじけ

堺市 神原文

迎え火へ姑好きな茶碗むし
身の内に常時迎え火焚いており
今日の僕褒めて貰いに墓参り
甲子園十七歳の汚名消し

大東市 児玉蛙

旅の膳酔う前に箸つけとこう
三猿に生きて気楽に恙なし
絵日記の母の顔が赤鬼に
待つて待つて出番なかった羨いと

豊中市 湯浅馬洗

お国ことばが球児はげます甲子園
雷鳴に一人になった露天風呂
戦場にかける脇役千の顔(女優アレック・ギネスの計帳)
墓参道唐もろこしの葉がさわぐ

豊中市 松岡久留美

子等のため女盛りを棒に振る
野良猫の人にも勝る母性愛
雑魚はざこ釣り合い取れた夫婦愛
七転び八起へかけた虹の橋

富田林市 大橋 鐘 造

若過ぎた二人が崩れていく月日

初対面互いに握る手に火花

少年の前で無口になるルール

決心がついて外した鬼の面

寢屋川市 北岡 波留吉

大ジョッキでうつぶん晴らす妻の乱

大陸の地図を広げて平和説く

ポーナスやと嫁が余分にお小遣い

喧嘩などしたかいなあと金婚日

寢屋川市 富山 ルイ子

喜寿越えて生きることへのむつかしさ

地団駄踏む巻きもどされぬ人生に

罅迫り合い角がだんだんのびてくる

兄の死を羨ましいとさえ思ふ

寢屋川市 太田 とし子

炎天に耐える空地の名無し草

花の味忘れぬ蝶が舞い戻る

明日は晴れてよ曇りくもりの日が続く

坂上 高 栄

息子の家でリゾート気分と思われず

山彦が答えてくれる墓参り

泣き崩れる女に捜査の目が光る

異次元の世界に遊ぶプラネタリウム

羽曳野市 酒井 一 壺

二両目のまん中がいい始発駅

不便にも昔の駅はあたたかい

禅寺で時を刻んで修業僧

戦死者へ刻む墓標の文字も欠け

羽曳野市 安芸田 泰 子

人工解化山野を知らぬ兜虫

老猫の穏やかな忌避目を閉じる

優しい風吹いて亡夫が遠ざかる

補聴器は外して老いを丸く生き

羽曳野市 西村 りつえ

絵手紙のカボチャに元氣もろた夏

きつい事言うていながら生返事

渦潮も母漕ぎ出せば風となり

ゴキブリに騒ぐ夫に妻しらずか

枚方市 二宮 山 久

ふる里を恋うる手土産たんともち

さと帰りまっただけと同級会

ラッシュ時にあの娘のいないこの暑さ

枚方市 森 本 節 子

おまつりはボイルの服にリネンの靴(上町の思い出)

菩提寺におまいりの日たしかめる

無念無想 肌を感じる空気のゆれ

浴衣着て髪はシニヨン塗りの下駄

皇居前老兵一人最敬礼

枚方市 鈴木政子

父親の一喝家族に見直され

ヒヨ鳥も惊鳥巢立ち蟬時雨

敬老会時期尚早とお断わり

枚方市 宮川珠笑

回診へ猛者も正座で手を揃え

裏白の折込みチラシが夢くれる

今月のドラマ書き込む予定表

年寄を押しのけ年寄先に乗る

藤井寺市 太田扶美代

自信過剰男を落とす穴がある

突然に歌いたくなる星のうた

涼し気な風だな良心が鈍る

まな板に刻みこんでる憂もある

八尾市 井尻民

無駄遣いした日の財布開けてみる

病んでると元気を出せと爪が伸び

夕陽受け振り向きもせぬ彼の背な

曲り角彼に会えると信じてる

八尾市 村上剛治

腰低い人だが自説譲らない

愚痴さえきいてやれば元氣な老母である

読書しか知らない不器用な父よ

おしゃべりな風はなんでも聞きたがる

人間に疲れてくもの糸見てる

八尾市 宮西弥生

クローラーの部屋で昨日の蚊と出会う

雷も男もこわくないひとり

投げ出せば恩師の檄が飛んで来た

八尾市 生嶋ますみ

子から出すシグナル早く気づかねば

妻の愚痴補聴器外し聞いている

ひまわりも少しばてぎみ真つ昼間

図書館でゆっくり汗を干している

八尾市 神原まさと

ビニールのプール湯になりみな昼寝

氷屋の風鈴鳴らす扇風機

ごめんなさい孫が仏間でうんちする

来年の盆もお参り出来るよう

神戸市 池田善守

夏祭り年に一度の下駄を出す

甲子園母校出場暑さ飛ぶ

体形の目立たぬ服がほしくなり

ご機嫌だ妻は静かにだまつてる

尼崎市 春城年代

術後の目に夏の星座のいきいきと

嫁いだ娘と三人でゆく盆の墓

蟬のぬけがら遊学の子を遙かにして

洗い髪拭き拭き出たらお姑さま

繁華街水着のような娘が泳ぐ

伊丹市

小熊江美

人生の荒波泳ぎ今の幸

年だから自分のテンポで歩いてる

お若いと言われあつさり買わされた

川西市

米原雪子

約束を延ばされやがて忘れられ

忽然と消えるが如く逝つた姉

それなりに老いのセンスの夏座敷

楽しもう古希の手習い焦らずに

三田市

北野哲男

ノブの手をやりわり押えられた夢

保険料上がつて保険金下がる

線香の煙が束に天王寺

勲章の写真子供に笑われる

西宮市

菊池トミエ

神様のいじわるきつと愛のむち

寝苦しさ藤の枕と替えてみる

夏草の中に咲いてる立葵

仏だんに西瓜供える畳の上

大和高田市

岸本豊平次

寒ければ着ればすむけどこの猛暑

君が代に球児の昏開かない

ご近所の旦那をいいとこ採りで褒め

団栗でないのいるか孫四人

炎天下負けるものと仁王立ち

和歌山市

玉置当代

紀の川のほとりが終の住み処なり

もうすでに おかめひよつとこなり夫婦

三年も座つた石に嗤われる

和歌山市

細川稚代

乱世へ怒り続けているマグマ

アイスクャンデーかじつたこの歯抜かれたり

チャンスには強い男を道づれに

ウミネコも迎えてくれる由良の浜

和歌山市

山根めぐみ

癌告知いよいよ来たと臍に言う

不足満杯即身仏の喉仏

奥様ですかホームヘルパーですオホホ

お昼寝の夢に降りこむ俄雨

和歌山市

池永正甫

青空へ雲一幕の芝居する

叩かれて花道をゆく勝ち力士

今夜どう一杯やるか眼で合図

海の青山のみどりも高くつく

鳥取市

山本益子

見かけより心の風はソフトです

原爆の語り部残す火を消すな

永らえてそつと老眼拭くゆとり

絵手紙のいたずら書きにある目覚め

蜃気楼水平線に夢を盛る

鳥取市 富山 檳榔樹

ついでこい一言決め手嫁になる
それぞれの人それぞれの花開く
徳積んで老いの人柄光増す

鳥取市 春木 圭一郎

秋風が金もないのに旅誘う

ひとり行く旅に句帳と缶ビール
旅すがら夢のかけらとめぐりあう
旅がらすいい事ばかり書きとめる

鳥取市 美田 旋風

堅物がきわどい話聞きたがる

子も歳をとればほどほど頼もしい
よく学びよく遊ぶ風の子が減る
銭があるうちは誰かに愛される

鳥取市 倉益 一瑤

鳥の絵を描けばあなたに逢えそうだ

一瞬の迷い両目をしかと開け
スマートに転ぶピエロの面付けて
初誕生の鯛はまかせと爺の竿

鳥取市 岩原 喬水

襖越し姑起きてる音をたて

悪縁がきっぱり切れた骨拾う
老婆の苦勞に二重丸あげる
タバコ癖止めたら指が淋しがり

鳥取市 西村 黙光
いい湯だな暫し宇宙を漫步する
涙腺がゆるんで芝居腕を上げ

録音が判決下す痴話喧嘩
嘘本当夫婦喧嘩は面白い

鳥取市 植田 一京

いい事があつてクリームよくのびる
愛は溢れて少し歪んでくるのなり
ピアガーデン日差し傾くまで待てぬ
陽の落ちる砂丘神話の貌になる

鳥取市 夏目 健一

竹の子の夢をいざなう青い空
根回しが正論隅に追い払う
YES NO 言わぬ裏には人のエゴ
尊敬にすりかえ愛を生かしてる

倉吉市 最上 和枝

ジャンケンに強いがゲームには弱い
エステテック無駄と気安め縄になる
母さんに貰った顔が天下一
平常着の旅で拾って来た寓話

倉吉市 米田 幸子

戦中の姑はなるほど無駄が無い
少年よ大樹になれと施肥をする
仏飯を供えて明日の命乞い
あの丘に勿忘草を咲かせよう

ケ・セラ・セラ影が短くなって来た
フリーター居着きデパート不況なり
まづとうにちびる私とボールペン
あゝ頃の父の痛みを知るバイト

米子市 鷺見正子

幾つものトンネル抜けて祖母となり
子に泣いて子に助けられ親子かな
憧れはいつも心に温かい
あゝ無情気取った夫の遺影抱く

米子市 永井三津子

定年が終着駅でない老後
夕暮れの路地を脂粉の風がぬけ
討死のように園児が午睡する
肩書におぼれ責任考えず

米子市 神庭詩郎

恐竜が今なら核を食べてくれ
うろろと貧乏神が落ち着かぬ
細々と生きたい今日もソバを食う
どん底の埋蔵金が頼りです

米子市 中村金祥

一番星消えてあの子の声がする
この窓はわたしだけしか見えぬ星
ふるりの野菊幼い頃の色
灯が谷間に見えるふるる里よ

米子市 茂理高代

春夏秋冬ほんに素敵な伯耆富士
精いっぱい生きた証を子に残す
折にふれ亡母の教えが物を言う
ふたり住みすぐに妥協をしよう

米子市 光井玲子

絵手紙のかぼちゃを額に秋の風
一夏を瞳の奥に遠花火
悠然と髭をしごいて油虫
せつかちの主に合わせている時計

米子市 木村春枝

匂袋ときどき夢をつめてでる
人の世や妻から姑になるレール
赤子抱くとても素敵な顔して
星月夜ひとり見るのはつまらない

鳥取県 黒田くに子

あの丘に行けばライバル三四人
ご先祖の生活丘から掘り出され
ベッドからあなたが少し見えて来た
子供等が去って目まいに見舞われる

鳥取県 西川和子

三十年目おんなじ宿の湯に浸る
病む父に切れないこより教わった
売り上げにっこりなんて今とても
にっこりと茶髪一番乗りの母

鳥取県 吉田孔美子

鳥取県 近藤 春恵

傷心の日はふる里の風を恋う
さわやかな秋の使者です赤トンボ
野も山も私も秋の色になる
味見する母と娘の目が笑う

鳥取県 太田 幸枝

命日に夫の好みしお赤飯
生き残り今日一日をどう暮す
初恋を孫に聞かせてなつかしむ
見舞客いて欲しい時困る時

鳥取県 石谷 美恵子

善人と言われ通した見えぬ汗
妹が断りもせず先に嫁き
夫婦喧嘩できる元気が嬉しくて
ありがとう日々仏飯はコシヒカリ

鳥取県 岩崎 みさ江

生きてゐるただだけでいいと言う
荒れた手に零れるほどの愛がある
神さまを恨んだこともある両手
千両万両一両植えて鳥を待つ

鳥取県 権代 康女

列車事故クマが一匹死んでいた
登りつくまではこぶしをにぎりしめ
少子化に昔をしのぶ子沢山
よく来たと亡父母が言ってる手を合わす

鳥取県 山本 正光

健康も先祖の慈悲と考える
迎え火が亡妻の形で燃えあがる
編笠の空は仰がぬ盆踊り
ママさんの手を握ったら叩かれた

出雲市 板垣 夢酔

ゆつたりの客にガイドは足あわず
おいしい血吸うてお陀仏蚊も哀れ
もぎたての桃は青春噛む思い
悔やみ欄待たねどいずれ載る日くる

出雲市 石倉 芙佐子

カッカッカ今日の鴉は調子づく
大胆に此方見ながら見ない振り
ボスらしい面魂で止ってる
鷗と鴉攻めては引いて凄まじい

岡山市 井上 柳五郎

八月はノモンハン戦敗戦日
豪快にシャンシャンシャンの蟬しぐれ
竹馬の友暑さ見舞うも計の知らせ
夢と欲老いにほどほど持って生き

岡山市 福原 悦子

背伸びした冷たい風の世渡りに
軒広い家を支える父の顔
どん底を髪を伸ばして抜け出そう
迷いから覚めて見上げる蒼い空

折り鶴のハラリと翔んだ夏の朝
 ごきぶりの赤ちゃん上手死んだふり
 花散らす雨とも慈雨とも呼ばれます
 九十二命の重み受け止める

竹原市 石原淑子

一ぺんだけ味わって見たい酔い心地
 夜おそく寝る癖ついてラジオ聞く
 遮断機のおかげで逢えた古き友
 五月五日生れとはしゃいでいる八十歳

松山市 浦辺静江

命名の筆を洗って祖父となり
 二の鳥居三の鳥居と邪念消す
 スランプがゆっくり鯉の魅を投げる
 卵割る黄身から朝の気をもらう

北九州市 梅田宣司

歳らしい球が届かぬ変化せぬ
 ふるさとを重ねて愛でる山野草
 風下で世の裏側が見えて来る
 不倶戴天そんな昔もあったっけ

唐津市 井上勝視

敗走の兵よ地の底海の底
 欠伸する孫もて余す夏休み
 妻の掌の中でぐっすり酔っ払い
 棹差して測ってみたい深情け

唐津市 樋口輝夫

おんさい川柳まつり

東西諸大家川柳遺墨展 協賛川柳大会

平成12年11月18日・19日

18日(1日目) 大正村散策 (随時)

19日(2日目) 川柳まつり (12時開場
 とき 大正村かえでホール
 ところ)

開会セレモニー—12時30分

大正琴演奏・主催者あいさつ・来賓祝辞

川柳グランプリ(平成11年度表彰) 鶏かご社中

川柳披講(課題) 3句詠—13時20分

モダン 島 翔竜選(鶏かご)

カフェー 杉山海苔風選(あじさい)

タイムスリップ 村上 永筆選(ふあうすと)

村長 西出 楓楽選(川柳塔)

ロマン 伊藤とみお選(鶏かご)

特別課題吟 ローカル 佐藤一粒選

(現地投句箱による一般投句を含む)

以上6題共投句締切10月20日(当日消印有効)

便箋に3句連記。投句料1000円

※前日からの参加は投句の折記入下さい。別途案内します。

アトラクション—15時20分 閉会—16時30分

投句先 〒484-0081 大山市柳町7 島 翔竜宛
 TEL(0568)61-4426

お問い合わせ先 本社編集部

TEL(0568)61-1416 FAX(0568)62-7510 鶏かご川柳社

星空浴やがて父母恋しかり
 夏帽子追風に乗り逃げて行く
 何も彼も断るしかない籠の鳥
 近道は南瓜の蔓に乗っ取られ

熊本県 熊本県 岩切康子

このやろう肩腰膝が年齢だろか
 早朝散歩影はスリムになっている
 玄関で待たせシェーバー唸り出す
 金出して捨てて新品買ってくる

熊本県 高野宵草

この句 この人

橘 高 薫 風

かき氷の山から捜す登山口 古久保和子

宇治金が運ばれて来た。緑一色の山を魁で
すく。最初から頂上の甘い場所を占有して
はいけません。麓から麓からです。

手足れの揃う和歌山にあつて作句力はトッ
ブクラス。それも優しいご主人が句会場への
アツシー君を勤めるたまものか。

お迎え火何をうろうろしてなはる

安藤寿美子

お迎え火を焚いたところである。門口に気
配はしたものの仏間の蠟燭に「仏来たまう」
様子はない。十年も過ぎたので忘れたんかい
な。あんたは相変らず世話のやける人や。

女に惜しい才人だけれど謙虚そのもので、
この頃着用の帽が似つかわしくなられた。

秋風に両手で湯呑み持つてみる

緒方美津子

女だから行儀よくの他に、冷えまさる秋の
気から、茶碗の温もりが両手に欲しくなる。

あつさりした句だが、中々この境地になれ
ない。先日家の近くの小句会を覗かれたら、

その指導者が私と同じ病院で作句していた
樋口舟遊氏であつたという。勇気がある。

MVP孫が笑いを撒きちらす

井上 森生

孫の可愛さは誰も言うことだが、MVPが
抜群だ。早く言つた者が勝ちとは、工業の先
端技術と同じ。松下コンツェルンの偉いさん。

端正な顔もリストラ容赦ない

桜井 千秀

一流会社であらうと、今の日本では安心し
てはいられない。端正な顔のつくりも、洒脱
な服装もリストラの対象に関係はないのだ。

中筋三幸、菅井智水庵両会長の後の三幸教
室、二百名の会員を切盛りする女丈夫で、会っ
て話すと孫娘恵利子さんのことばかり。

大根の葉っぱをくれた店が消え

川端 一歩

スーパードコンビニの勢いに押され、商店
街の凋落は歯の抜けたように廃業する。近く
の農家の朝掘りの筍、大根を買えば葉っぱも
一緒に新聞紙にくるんでくれた。お百姓と同

じ太い指をしたあの夫婦はどうしているか。
第二の勤務に精を出す作者は、常に本を携
えている読書家。能ある鷹のたたずまいだ。

梅雨あける金庫の金を虫干しに

加島 由一

「お父ちゃん、よう言うわ」と奥さんに言
われそう。まるで金丸さんの金庫番のようだ。
大阪府警に勤務の硬骨漢だが句の幅は広い。
器量が大きいからであらう。

まんじゅうを三つも食べた仏さま

早川 盛夫

饅頭を商う作者だから、朝こしらえたのを
仏壇に供える。日暮れには三つも減つてある。
ピアノと塾通いに忙しい仏の仕業である。

炎天の暗さ自転車屋の暗さ 桑原 道夫

昭和二十年八月には炎天ながら暗い日が続
いた。原爆の投下であり終戦の詔勅であつた。
人は肉親の死にも奈落の暗さを感じる。

一方、町の自転車屋の暗さはどうだ。眼を
馴らしてからでないかと奥は見えない。雑然と
置かれた小さい機械、道具の類を踏んづける。
ようこんな所で仕事が出来ななあと、思う。

心理的な暗さも物理的な暗さも同じ「暗さ」
で表現する。詩の面白さ、味というものだ。
それを自由に駆使出来るかどうか。作品は

言葉だけでしか勝負出来ないのである。

自選集

川島諷云児

田口虹汀

虫の居場所では起きる乱気流

お陰さま八十年も生きました

退屈も幸せのうち午後のお茶

健康に悪い煙草がうますぎる

明日こそいい日にしよう夕茜

板尾岳人

人生を楽しく過ごし逝かれしか(故 石垣花子)

旅に出る人を見送る遠花火(故 田辺炎六)

神に会う約束をしてひとり旅(故 実兄光男)

美しいひとを見つけた秋の風

美しいひとに出会った男傘

榎本吐来

テレビに始まりテレビに暮れる古稀の夏

まだ生きる資格持つて自己嫌悪

今日も未だどっかと課題背負う杖

一年に一度のチャンス墓参り

故里もやっぱり変わる五十年

袖かけは無いけど手誉め虹の松

公園の初代は寺沢志摩守

五代目は心安まる小笠原

両手上げて世界へ叫ぶ平和像

曳山笠の囃子と共に川柳塔誌

両川洋々

闇の底で鬼が一匹眠らない

減反の無念を叫ぶ田が叫ぶ

継ぎ足した夢にも出番ありますか

ライバルに命乞いなどするもんか

火のドラマどうして風よ消したがる

小林由多香

体温を越える暑さに攻められる

早く店開けてスーパ―には負けぬ

岬から竿一本に当り待つ

両方の耳へうわさが飛んでくる

悲しみを尚つのならせる蟬しぐれ

石川侃流洞

尻向けて絵にはならない檻の虎
指差確認ポツボ屋の癖直らない
段差に注意用心深くなった歳
イカソーメン大夕焼の皿に盛り
ワイングラス孫に酌がれている至福

西村早苗

うまくなる頃そつと山から出たけもの
ふつと怖くなる鎌のよなお月
親指を立てておやじが居るらしい
狐の嫁入りかぼやつと日照り雨
くたびれを痛み分け合う夏帽子

小西雄々

約束と違う輪廻に思案する
引き潮が連れる噂に飽きがきた
グルメには飽きた血圧降下剤
遺言状書く暇はない未練花
風を抱く女の手から秋を知る

舟木与根一

熟れるのを待てぬ鳥の事情がある
宇宙住居 抜ける微かな透き間風
熱帯夜に耐えて朝顔笑み競う
先祖代々藪蚊に慣れて眠る墓地
新盆二人 風化が進む二〇〇〇年

堀端三男

地獄極楽の絵解きうとうと聞く法話
新聞で曜日確かめ医者通い
炎天続き今年の豊作予告する
思ひ出の君にコスモスつきまとう
ラストダンスはあなたと言ってそれっきり

藤井明朗

教育改革 学校の奮起重視
敬老会逢う約束の友は逝き
健康回復お迎え延期請い願ひ
人生に詩を忘れボランティアを忘れ
博愛を忘れた個人主義の乱れ

藤村 女

ランプの灯虫の声聞く山の宿
どれ着ても宿の浴衣が大きすぎ
幸せは身近にあって気がつかず
幾坂を越えて白髪にある深み
おどけてもピエロの素顔笑わない

西田柳宏子

味噌汁の味薄くする思いやり
埒もないええおっさんがなんやねん
鉢合せいつち逢いたくない顔と
プランナーばかりで実行役が居ず
軍隊の筋金入りが要介護

野村太茂津

傍線を引いた言葉に苛まれ
少し呆けたか心の鬼が逃げ出した
補聴器を外すと響く天の声
疑った宇宙の限り無い力
断言すまこと大和の御世と生る

月原宵明

二〇〇〇年世界の核の終る年
飲みだすともう箸置きに用は無い
蛞蝓の夜遊び経路みな分かり
相当の覚悟蜥蜴が尻尾切る
冷や奴今も昔も箸で追う

土橋 螢

満月光あなた迎える香を焚く
生かされてあなたこなたに思がある
指先を吸われ黙って目を閉じる
苦勞したおとこなるほど楽しそう
生殖のトラブル喧嘩ばかりして

玉置重人

花が好き田んぼの青はもつと好き
スケジュールあなた過勞死せぬように
クーラーの嫌いな妻と暑くいる
コーヒーはブラックポリシー持ってます
四コマの朝が楽しいトースパン

野田素身郎

家族旅行からもはずれる後遺症
暮らし向き熟知しているお中元
湯上がりのビールひと口あればいい
杖ついてよろよろ僕の影法師
ナツメロに今も面影浮かぶ秋

遠山可住

ベテランの完敗歴史ぬりかわる
最新に換えたボタンに泣かされる
敬老の里にほほえむ地藏さん
一しきりの雨かみなりよありがとう
夕焼けへ突っ込んでゆく飛行雲

芳地狸村

竹そりのスリル味わう鳴沙山(敦煌にて)
乗り降りにラクダの背で泣き笑い
月牙泉目玉に生きているラクダ
厚底の美女に出会った沙州市場
敦煌の日の出にカメラ忙しい

恒松町紅

親切でこぼれる程に注いでくれ
ぴちぴちとした厚底に気をとられ
うっかりと軽いジョークを叱られる
夏雲や蟬とる声が裏でする
自惚れて筆が少うし踊ってる

長話昔の友が思われる

丁重に丁重にことわる言葉選っている

人はみな世わたりのむつかしさ口にする

嬉しさがたかまつてきて手を上げる

影法師自分に付いてきてくれる

情念のこよりで母と子とつなぐ

夜霧からひろい忘れた父の遺書

一本の小骨が修羅を抜け出せぬ

彼岸花吾も旅ゆく一人なり

アセチレンガスが匂うた昼火花

ふる里のよさを忘れぬ蛙の群れ

肩書を外し眠りが深くなる

紺碧の空へ万歩計弾む

母の愛いっぱい詰めた宅急便

炭坑節残して坑山が消えてゆく

修羅幾つ越えたか母の立ち姿

謝りに来た子の母が高姿勢

亡母の持つ鈴が心の奥で鳴る

一言が根雪となつてまだ解けぬ

風邪ぐらい医者は不要と寝て治す

正本水客

波多野五楽庵

木村あきら

工藤吟笑

八月六日忘れてしまふ平和なり

百薬の長で命を永らえる

肝臓が感心してる俺の酒

中国産の松茸盆の皿に盛る

一円もお金一円要る時も

任せとけと一度叩いて見たい胸

主役より美人でちよつと意地悪で

ほどほどで止まらぬとこに危機がある

すつと出た殺し文句にある効果

ボランテアのように我が子が来てくれる

馬鹿になる本から貰う生きる知恵

付け焼刃変なところで行き詰り

仮面の裏に疲れがぐつと溜つてた

人情に押され余儀なくした妥協

世話焼きが過ぎて嫌味になる女

傘変えて梅雨を楽しいものにする

横文字のように女体の昼寝かな

土壇場でむかしの男意地を見せ

おなじ道ひとりで歩けば遠くなり

愛人に電話するよう孫にする

宮口笛生

金井文秋

阿萬萬的

越智一水

黒川紫香

いつお会いしても笑わす人でした
去り際も上手に送る女だな
居眠りを起さずガイドよく喋る
気配りの押し方と知る車椅子
透き通る音で秘境を走る風

斉藤 焔

敗戦の記憶 凌霄花の朱
明日からをもっと話そう沖繩よ
栄光もどん底も見た牛である
座るべき人が座って和む椅子
雑草も虫も玩具にする二歳

八木千代

莊嚴に寂しく盆の灯は消える（石垣花子さんを懷う）
病室も柩の中も静もれり
若き日の語らい戻る面輪かな
鱸からも手を振る此岸からも振る
彼岸の灯行つて戻つてみたくなる

二 宗 吟 平

出しゃばりと見られたくない陣を引く
アユ釣場見て素人だと思ひ
お見舞に行つて吟詠出す小聲
年の功いつでも白を持たせられ
雀にもわけて鶏欲張らず

森 下 愛 論

五臓六腑ゆっくり洗う酒エキス
ほめられてまた追加する大ジョッキ
自惚れのカブトを脱げば唯の人
憂国の戦士の集いは一等兵
お若いと言われて腰がシャンと伸び

弘 津 柳 慶

昭和中年に戦地の苦労わかるまい
養老院でめでたく一対の花が咲き
思春期の少女の瞳美しい
帰省した子がノオノオと寝て終い
定年になって希望の虹も消え

河 内 天 笑

信号によろひつかかる月曜日
主治医が信頼出来る有難さ
病院の空気吐き出す深呼吸
絶滅のめやす天然記念物
スタイルのええ娘に出会い目が覚める

橘 高 薫 風

星が出て露天風呂にも沖がある
少年少女たり鳩放ち兎飼ひ
顔の皺心の皺を思いやり
若返ることほどほど秋の花
善い人はみな先に逝く今日もまた

（悼 波部白洋）

川柳太平記 (269) 川柳の群像

林 荒 介

東 野 大 八

「まるで野武士の如き頼母しい方でしたの
にね」

と老妻は天国へ行ったこの人の悲報に涙を
こぼした。昭和4年1月20日鳥取県生まれだ
のに平成12年5月10日急逝。享年71。

「物心ついたのが満州事変の最中、中国山
脈の山あいだで役人の子として生まれた。玩具
の鉄砲を担いで、二十数戸の部落の一軒一軒
を、出征することになりました。銭別を下さ
い」と挨拶をして回り、おひねりや駄菓子
を貰った記憶がある。厳格な父だったが、この
時は叱られた記憶はない。小学三、四年生の
頃から、各町村で募集された開拓団の人を伴
い、父は満州に渡るようになっていた。

どうにか自分の頭で物考えられるようにな
った頃は、第二次世界大戦もたけなわ。籍
は学校にあつても勤労働員、勉強どころでは

なかった。そして敗戦。大日本帝国が崩壊し
大和以来の制度は変革されてしまった。

父もまた敗戦後、半年も経たぬ中に職を辞
めた。小作に出していた僅かな田畑を返して
もらい俄か百姓に変身、気難しかった父が急
に好々爺になり、家人を慌てさせた。時には
妙にふさぎこんだりしていた。ソ連の参戦も
あり、満州の情報はずしく、開拓団の皆様も
気に病んでいた。そんな父も贖罪の中に脳軟
化症と呆けて果てた。

国体は変革されたが、自己を主張すれば体
制から弾き出される。公務員・教員を経て自
営に至った。やつと軌道に乗った頃、川柳と
出合い、本音で話せる仲間も出来た。

残留孤児の報道に心を痛めながら、父の尻
尾を引き摺り、昭和を見据えて生きようと思
う昨今である。改元されたが、どつぷりと昭

和の中に浸っている。

○逆上り 不意に湧き出る父の首 荒介

（川柳塔・平成元年3月号所載・アンケー
ト昭和と私・林 荒介）

夫人の林瑞枝さんは、川柳ではレッキとし
た麻生路郎系の川柳塔同人で、三つ歳上の姉
さま女房である。川柳はそうした縁で、手と
り足とりして教導された節がある。何分この
夫人は、日本全国川柳叢書22の「傘の浜」
という句集（平成四年近代文芸社刊）も出し、
路郎賞にも輝いたこの道の大先輩である。こ
の瑞枝夫人の句集には次の後書がある。

「近所の奥さん達五人と川柳を作り始め
たのは昭和三十八年頃でした。（中略）以来
二十八年の歲月の中で沢山の句を読んで、沢
山の人と出合い、又投句を続けて、各地の川
柳会に出席した。

私の主人荒介も作句するようになってから
岡山・大阪・広島・神戸・和歌山・高松・福
岡・豊岡等に遠征して、あちこちの川柳行脚
がはじまった。（中略）題名の「傘の浜」は
私の生まれ故郷・鳥取県淀江町は和傘の生産
地で、傘の花咲く浜は永遠に私の胸から消え
去らぬ原風景であります」

とある。このベテラン女房の御加護で晩年
は川柳塔同人にもなり、川柳塔賞の作句面に

おける候補作にも加えられる程になった。

青を抜けるに帰ってゆく螢 荒介

これからの人生は、螢を荒介さんだと思つて生きることに決めて、八木千代さんと六人で鳥取県の伯太町へ行つて、たくさんさんの螢を見て、ての平に螢をのせてひとときの詩人になりました。

(林 瑞枝) 来信

朝常軒直方良省居士という長つたらしい戒名に代つた林省三兼荒介への、同人知友等の用吟を念のためにつけ加えておく。

甲 吟

山緑 男はきつと山歩き

中原 諷人

うとうとと男の夢の続きかな

金葉 雨学

鬼は流れて雲のかたちに野に放つ

前田 一石

雲は流れて亡父になる亡母になる荒介になる

前田 ひろこ

悲しゅうて伯耆大山雲の中

板尾 岳人

ジグソーの二つが欠けて絵にならぬ

森山 盛桜

佳句提げて早々黄泉の旅へ立ち

小林 由多香

荒介さんありがとう他に言葉が出ないです

船津とみ子

五月十日その朝露地に咲いた花

八木 千代

もう一度教え請うたや荒介さんに

森脇 麗

残された声を大事に道しるべ

木村 富美子

雲の峰句会の声が聞こえそう

木村 春枝

黄泉の選者は少し早過ぎる

中原 みさ子

故郷の山山菜が呼んでいる

福代 天雀

納豆オムレツ君の笑顔に今朝も会う

新 正子

種まいて急ぎ五月の風にのる

澤田 千春

何もかも溢れ失うものばかり

田中 亜弥

黄金に七色煙の遥から

白根 ふみ

ニヶ月の病はあまり重かつた

池尾 保子

五月の風にふらり旅立ちなされしか

鹿島 蘭

引きとめるすべなかつたか俄雨

青戸 田鶴

無常かな五月の空に旅立たれ

門脇 晶子

かけがえのなき人うばう花の雨

さえきやえ

惜しまれて師は黄泉の旅に立ち

塩谷 八重子

風につつまれ足跡辿る旅人よ

政岡 日枝子

あつけない旅立ち花の咲く頃に

林 瑞枝

驚愕の姿見られぬ句座となる

小松 原爽介

山菜を はたるを追うて逝つたのか

森中 恵美子

手を振つてさらばさらばと振り向かず

川柳 塔社

大山はまた現れるのに風よ

小島 蘭幸

悲しさに言葉も花もしずむのみ

波多野 五楽庵

約束は残したままで桜散る

濱野 奇重

師と仰ぐ人大山と重なつて

角田 千秋

まほろばで一息ついておわす師よ

小村 てい子

ありし日の面影静かに掌を合わす

野坂 なみ

逝かないでさらばくの樹が叫んでいる

茂理 高代

姫蓼は師の形見なり絶やされぬ

大塚 恵子

虹の橋渡つて逝かれた師を偲ぶ

矢野 満子

思いもかけず一陣の風師をさらう

光井 玲子

足跡に花を咲かせて遠い旅

猪森 スミエ

道中もつじの花に囲まれて

三好 寿々子

悲の面に荒介さんはもう居ない

東野 大八

(以上順序不同)

林 荒介作品も紹介しておこう。

荒介

駅裏でひとの足跡ばかり掃く

〃

影を掘り起しておびたらしい猿

〃

目の疼くものを見詰めて目放せぬ

〃

千代紙も古い言葉でたたまれる

〃

貧しさに十本の指みな使う

〃

面の数とんでん返しの旅ならむ

〃

ラムネ玉記憶の底でよく弾む

〃

そばかきしきたりのある草の屋根

〃

一族のくらしの中に雪が降る

〃

ローソクと長い話をして更ける

〃

▼次号は「小浜 牧人」

誹風柳多留二四篇研究 22

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤要人

158 素人の女郎代金五両なり

清 間男の相手の女房を「素人の女郎」と表現したのがミソ。こういった句は、常に、単なる間男か、美人局かに意見が分かれるところ。一応、間男がばれて内済金五両を支払った句としておく。

山田 賛。雨譚注に、

買色でいつち高いハ五両なり

末四15

とある。

佐藤 賛。

159 三角八目出たい薬袋なり

清 屠蘇は紅絹で作った三角形の袋に入れて酒に浸し、これを一年の邪氣を払うものとし

て飲む。この屠蘇袋を詠んだ句だが、同じ三角でも亡者の額紙と違って、屠蘇袋は目出度いものとの意を含めているのであろう。とそふくろひたひにあて、しかられる

安七叶3

小栗 賛。ただ亡者の額紙までいうか。四角の薬袋の比較だけで良いのではないか。

橋本 同右。四角の薬袋との対比と思う。

佐藤 同。

160 むしのあゝむりに娘に成て出る

清 年老いた女形、曾我兄弟敵討ちの場の五郎丸も考えられるが、三十振袖を詠んだ句としておく。

すなわち、年増な踊子が無理に娘らしく装

って振袖を着、客の座に待するというのであろう。「むしのあゝ」は、本句の場合、図々しくも或いはあつかましくも、という程の意であろう。

佐藤 賛。

161 ふだらくの岸打浪を猪牙走り

清 「補陀落」は、「仏語。インドの南海岸にあり、観音の住所といわれる山。この山の華樹は光明を放つとも、芳香を放つともいい、観音の浄土として崇拜された。」（『日本国語大辞典』）とある。

浅草寺の傍らを流れる大川は、まさに「補陀落の岸打浪」と表現するにふさわしい。その大川を猪牙が疾風の如く上り下りする。

ふたらくのきしうつなみをちよきハおし

安七智5

ふたらくのきしうつなみをのりこへる

天七整3

例句を並べてみると、これらの句は主題句の焼直しか、或いは文句取の可能性もある。

小栗 賛。西国三十三所の青岸渡寺の御詠歌

「ふだらくや、きしうつなみは、みくまののちらのおやまにひびくたきつせ」の文句取のようである。

橋本 同右。隅田川を熊野灘に見立て。

大野 賛。補陀落山は浅草観世音の異称
〔川柳大辞典〕。小栗説も必要。

佐藤 同右。

162 人相のいゝ大としま喜分なり

清 遣手婆を詠んだ句だが、普段は人相の悪いのが定説。

それが「人相のいい」と表現されたのだから、祝儀の一分を手にした直後の人相ということになる。

人相をいろいろにするば、あ也

玉17

忝分だけ笑ふと遣り手元トの顔

安四叶3

佐藤 賛。

163 鼓より才蔵口をたゝくなり

清 三河万歳脇師の才蔵。鳴物に鼓を持ち、それを叩きながら滑稽卑猥な言動をする。しかし、鼓はほんの付けた程度に叩くだけで、才蔵の面目はその滑稽卑猥な言動にある。

佐藤 賛。

164 素人が餅屋に成といそがしい

清 「餅は餅屋」であるが、いよいよ暮も押し詰まって忙しくなると、家ごとに餅を搗き始める。「素人が餅屋」と言う表現が句のミソ。

橋本 賛。

餅ハつく是からうそをつく斗

初36

佐藤 賛。

165 いゝ日よりつくりそんじた仁王出る

清 「いい日より」は晴天十日である。大男の関取を「造り損じた仁王」とは巧い表現。

橋本 賛。

山く 嶽く を晴天十日見せ 二六3

佐藤 賛。

166 けちな客一ヶ月余り寄つかず

清 吉原の八月は、八朔、十五夜、九月は後の月と紋日が立て続けに続く。けちな客ならずとも大変である。

橋本 賛。九ヶ月なら玉菊燈籠も入るか。

粕谷 賛。玉菊燈籠は七月なので無理に入れる必要もない。

燈籠が消えたと廓も雪がふり

九六2

そらさぬ顔で七日の末に切れ

二八・5

佐藤 賛。

167 名の下へ二才の居る八食時分

清 「名」は、呉服見世で番頭の名を書いた札。番頭はそれぞれ自分の名を書いた札の下に座って商売に専念するが、昼飯の時は丁稚などに留守番をさせて、奥で食事をする。その留守番役の丁稚を「二才」と表現した句。

名の下てきせるを廻すひまな事

一九22

名の下へかみく すハるい、とくい

一九ス2

橋本 賛なるも、名札の下に坐るのは番頭ではなく手代と思う。西原柳雨氏は「川柳江戸名物」に「店先に並んで坐つてゐる番頭の上には、喜助、正吉、……と云つたやうにその番頭の名を筆太に書いた紙を張出し……」と述べ（『川柳風俗志』）にも同趣の説明ありているが、

手代迄紙付にするこふく見せ

七28

手代にも正札附の呉服店

三三15

呉服屋の手代置にはへたやう

五16

などの例から見てても手代。また「史伝」では「手代の名を記したる紙の札」としている。

粕谷 橋本兄捕捉に賛。

佐藤 同。

秀句鑑賞

同人吟 中 村 ゆきを

— 9月号から

川柳は制約も少なく、自由のびのびと発表することが出来ます。それが却って作句を容易にしているキライがあります。家計簿や日記を見ても相手は当惑するだけでしよう。

日々の営みを思いつくままに句にすると、読者は素通りしてしまいます。作者が斬新と感しても、一人よがり、推敲の余地を問われず。秀句は、常に多作から生れ出ます。徒に文学性と優しき目を湛さましよう。徒に文学性を追求することは避け、短詩文芸の香りを漂わせれば最高でしょう。更に重要なことは、句に内包する作者の哲学観です。批評や穿ちは個人の哲学に深く関わり合うものです。また口語調であれ、破調であれ句の誕生にふさわしいリズムを持たぬとその句は崩れます。今回の鑑賞では、まず五十句を選びすべて読み上げて録音し、何度も聞き直しました。句のたたずまいは、読むだけでなく、耳からも鑑賞すべきと考えているからです。

飢えた人捨てて宇宙に出かけるな

三好 専平

スケールの大きい人類への句です。科学は超科学たり得ない。人の情は、超宇宙に広がることも可能である。人が、完全に人間となるためには、今こそ開発の方位を地球の極質地帯に転すべきと考えている。吐き捨てるように畳掛けた下五句。現代川柳の上質な批判精神を感じ、共感抱く秀句にしている。

兄と同じ顔でふくらす紙風船

古川 喜美子

親と子の微笑ましき相似。表情も仕草も一体となつて、見事に詩をふくらませます。

誰もが好感おはえる句でしょう。

この句は、情景の切り口を鮮やかに示し、詩が奏でる叙情伝達をうまく生かしている。

いくばくの余生耕す辞書を買う

神保 坊太郎

青春とは心意気にありましよう。青春とは書に親しむ旺盛な精神に宿りましよう。余生を耕すには、最高の買い物であり、その思いがづぶさに伝わる句です。余生に実るものいづばいの心豊かな句に仕上がっています。

犬小屋の掃除が終り犬を呼ぶ

小島 蘭幸

愛情いっぱい犬小屋を掃除して、犬を呼んだが、飼い主に甘え切った犬は、末っ子にじゃれまわつて、耳を貸さない。神と人間共もかくの如しと思わせる。川柳の醍醐味。

他人には小さきことよ我が涙

富坂 志重

孤独なる旅人の涙は、神がお拭き下さる。生きとし生ける誰もが一度ならず遭遇する深い心の痛手。句の構成も格調高い。

見えずともしたたる桃のおいしさに

堀江 正朗

この秀句には鑑賞文など到底必要のない感慨の深さを覚える。したたる桃への慈しみ、おいしいという優しさ。至福の時が永遠に。

空想の家が小高い丘に建つ

野口 節子

小高い丘は、理想郷。メルヘンを淡いタッチで描き、丘は花ざかり。人は空を希い。空から誰かがおいでおいでと呼んでいる。門柱には、大理石の表札がすでに掛かつていて。

先見ぬけれど日めくり大切に

青戸 田鶴

自己疎外を深める現代人。日常の営みこそ真理です。雨の日も天の恵みに感謝しよう。

投げ捨てゐる訳にもいかず鬼瓦

政岡 日枝子

風雪に耐え、家を守り、四方を固めた鬼瓦。無用の長物になり給うその訳は。擬人法なら鬼瓦もきょうびのこととて半ば諦め顔か。

文化とは何か田舎の大ホール

鷺見 正子

N響を呼び、近代美術展を開き、宇多田ヒカルに歌わせたら、最後だけ満員。ならば、哀切好みの日本人へ、郷土文化の貝殻殻を。

小ざかなが足裏つづく故郷の川

中井 ゆき

故郷は母である。訪ねる人に頼ずりする。足を浸せば子さかなさへも寄つてたかつて、くすぐつてくれたよ。流れも昔のままで。

生年月日書くこと紛れもなくわたし

西口 いわゑ

万人が持つ自画像。口語体を詩に装飾して淀みがない。内なる思いが鮮明である。

向かい風 度胸決めれば運が向き

奥田 みつ子

乾坤一擲マケルとおもうな思えば負けよ。度胸一筋立ち向かう。心地よい句風である。

長生きは今日死なぬことと書いてある

玉置 英子

川柳の本質ここに。同時に善行も積まん。

淋しがる人 人間らしいではないか

本間 満津子

ベテランに作句法を習う秀作。筋が通り川のリズムを聞く。録音したとき、最高の文芸表現を感じた。蔵書の扉に書きたい句。

おばあさんが黙ると死んだかと思う

谷口 義

襖を隔て、祖母は何をしているのだろう。死んだのだろうか。お祖母さんも、あなたが死んだかもしれないと思っているかも。

物忘れ同土通じる老いの家

八田 敏

誰も来なくていい。睦ましい夫婦へ朝日が覗き様子を見届けて昇る。夕べには二人にぱつと灯がともる。ついでに歳も忘れなさつて。

七転びしてもとれない角がある

杉本 孝男

宿業を皆持つ。いましめの句。他人のことならば、ここまで。自分のことなら角を丸く磨こう。角突きあつたり、目に角立てぬように。転んでもタダで起きないのが角の味。

父親の方がうれしい肩車

松本 よしえ

子は父の肩で成長して行く。父は子の重みを宝にして明日を夢見る。おい倅あまり揺さぶるなよ。声も聞こえそうな、情愛の句。

昨日よりちよつと素敵な風に会う

木村 富美子

風の贈り物は、恋か優しさか、いずれにしても素敵さに変わりはない。ほのかな一瞬の変化を見逃さないで句にとどめた妙手。読者をも浮き浮きとさせてしまふ楽しさ。

平和だな妻の軒のリスミカル

田辺 鹿太

最愛の人の寝息。部屋いっぱい安堵感。いい日であったと一日を思う。ひよつとしてあなたには別の苦労が。この句には、そこまでする必要はない。すべてが平和だから。

どこの社員か車で昼寝してござる

福田 満州

堺屋長官の預貯金の多さ。景気は一体どうなつてんの。今日も注文は取れず。社には帰れず、思案余つてついウトウト。そこを通り過ぎたご老体に見つかつちやつた。年金貰えてあなた幸せ。夢見しているかも。風刺句。

淋しくて作り話をしていると

栗田 久子

人は切ないものです。わずかばかりの不幸せに涙を溜めて。でもお姫様にも貴婦人にも変身してしましましょう。少しのリキユールと、バラがあればいい。酒に酔い、花に酔いながら……。しみじみと胸を打つ句です。

水煙抄

河内天笑選

出雲市 佐藤治代
我が儘をする日夫に蓋をする

わたくしを汚して行った通り雨
横向きの鏡胸より腹が出る
焼き茄子の匂いに暑い日が続く
忘れたことが溜った水たまり

神戸市 木村忠義

近道か車が走る田んぼみち
その雲よ日傘になってありがとう
悔いるよりプラス思考で切り抜ける
一日のよごれを洗う風呂と酒
バックづめコップへ移しチェックする

橿原市 居谷真理子

人の良い鬼だ角見せ牙を見せ
リモコンが四つ転がる四畳半
なよなよと女小金を貯めている
出るとこへ出たら流し目ぐらいする
認めたくないが恋人けちんぼう

豊中市 江見清

気配りが見えかくれする程の良さ
地球には緑の服がよく似合う
月並のスピーチ皆が箸を取る
好きにせよと言われて腰がひけてくる
女房が留守だ自由だ何しよう

京都市 山本磔

犬侍にはならぬならぬと吞んでいる
たんぼの綿毛のように立ち去ろう
手紙からああ熱風が吹いてくる
年相応のスマイルがあればよい
単帯おんなは花になりたがる

横浜市 北沢街湖

遣伝子と二人三脚する老後
下駄 草履 外反拇趾のラブコール
好奇心そろりそろりと首を出す
札状は斜めに読んで始末され
和服なら何てことない皮下脂肪

和歌山市 武本 碧

いい人を演じふところ寒くなる
教え子にろくろ回しの手を借りる
実力の鞆リストラくぐり抜け
アルバムに片道切符だった恋
鼻先に自信過剰がぶら下がる

高知県 近森 功

未だ修理すればと通う齒科眼科
まな板の鯉にも未練あるだろう
逝った子の年を数える星まつり
城取ったように住みつく迷い猫
案山子までリストラにあう余剰米

出雲市 青山 久子

熱帯夜ひたひたよせる過去の波
すだれかけ謎めく部屋にしてひとり
わんわんと子供のように泣きたい日
堰ひとつ胸の流れにつけておく
一日をとろりと溶けるほど眠る

和歌山市 土屋 起世子

生きるため捨てた青春掘り起す
物忘れいいことだけは胸の中
建前のいらぬ田舎のいい暮し
おいあんだ秋刀魚すだちと同じ仲
下着ドロあんだの家は大丈夫

横浜市 巖田 かず枝

よろこびの歌かも知れぬ蟬時雨
故郷を背負う球児の汗光る
暑いのを言い訳にして手抜きする
コンビニのようだ誰かが起きている
故郷に元氣もらいに行くとする

岡山市 大森 純子

いざこざも生きる一つのエネルギー
夏期休暇を下さいという万歩計
茶を出され自慢ばなしを覚悟する
フジヤマのトビウオ今は権力者
心地よい疲れをくれたボランティア

愛媛県 黒田 茂代

コンビニを知らない主婦をしています
ややこしい事を頭脳が拒絶する
満月がひとり泳いでいる水面
聞こえないのじゃなく聞いてないのだよ
何事もなかったように生きている

大阪市 小泉 ひさ乃

小糠雨幾つになっても母恋し
大きな目の受皿で愚痴溜めている
手内職外の空気を吸いに出る
価値観の違う夫と共白髪
毒舌は温い心のうら返し

横浜市 吉田 裕峰

風雪に耐える演歌は岬から
妻となら音が無くてもズンチャツチャツ
オムライスグリーンピースが威張ってる
大の字を月に見せてる露天風呂
エスカレーター一歩遅れる妻の脚

横浜市 田中 笑子

ダイエツトしてから着ると水着買つ
聞いてないこの一言で輪がゆがむ
大所帯しつかり者でとおす嫁
裏金を貰って黙るおえら方
褒められてお札に返す褒め言葉

横浜市 秋元 和可

褒められる度に一輪ずつ剪られ
天と地に感謝しながら鍬を持つ
泥つきの野菜が垣根越しに来る
原爆忌夾竹桃に蟬時雨
鎌首をもたげて蔓が伸びていく

横浜市 福田 由美子

ダイエツト同居してからでる効果
朝食はセルフサービス夏休み
押しつける自説が溝を深くする
姑が来て昼寝の時間削られる
クローラーの部屋から家族動かない

横浜市 荒井 広和

竹林の風に頭を冷される
ビル街に淋しく響く蟬の声
青山が霞んで見える古希の坂
太陽を蹴って漁場へと向う海女
優しさについて見落した頼りなさ

八王子市 井上 京一郎

ワイドショー馬鹿にしながら世事にたけ
低金利預かる側の甘い汁
にんげんの顔で周りに居るケモノ
別荘はなくてもステテコでビール
露出した肌ヘクローラー叱りつけ

野田市 那賀島 雅子

当選の女史が胸はる赤い服
空白の日記いじめがかくれてる
わが影の歪みに気付く水たまり
傘寿なお生きる気力の杖みがく
ポックリと死ぬ話して盛り上がる

秋田県 湊 修水

老人介護甘い話をちりばめる
試みにデーサービスに乗ってみる
平たんな道にも罫がありました
衣食足る国でモラルに蹴つまずく
味噌汁の匂いわが家を朝にする

青森県 福士トキ

豊作だ豊作だと鳴く蟬の声
今日は みみず顔出す草むしり
あちこちの祭りばやしに血が騒ぐ
幼子は幼子のまま五十回忌
両隣垣根切る音盆返し

札幌市 三浦強一

街角に青春があるギター弾き
切りましょう医者あつさりとご宣告
百円シヨップ妻ストレスの捨て所
お土産はいつもタコ焼でも嬉し
ふる里の土産が降りる上野駅

京都府 丹後屋 肇

小便小僧ネオンの色を放ちけり
克蘭ケの目線に据える一輪花
退院を告げる電話も長話
まなじりを決してむかう初打席
ぶきつちよな腕で眠ってくれる孫

京都市 勝山 美千代

送り火へ冥土に便り届けたい
はだかん坊居なくて蟬の大合唱
魅せられて百円シヨップ無駄を買い
価値観の違う同居は忍一字
炊事時電子音には惑わされ

奈良県 古手川 光

点滴のゆっくり落ちる長い夜
ファックスで他人の家に入り込み
水槽のうなぎは厄日とも知らず
おそろいの浴衣ではしゃぐ夏祭り
水槽へ金魚が増える夏祭り

海南省 堂上泰子

親思う心芽生えた娘が嫁ぐ
結晶の雪のマークが抱く汚点
絶交の親の子同士恋成就
カッコウに送られ帰る散歩道
デパートで涼んで帰る炎暑の日

和歌山市 木村親路

条件を少し削って嫁さがし
健康は宝と思う歳になり
四年後の景気案じて入学す
雀の涙ぐらひは欲しい預金利子
抱きしめる孫の体に陽の匂い

和歌山市 上地 登美代

菌が進化して人間を攻めてくる
蛙の声イライラさせるテスト前
ハチマキを締めてファイトを湧きおこす
ありったけの翼広げる母の愛
はどほどの欲もあつての長寿法

和歌山市 吉村 さち子

塵のない家を訪ねて肩が凝り

褒められてその気になって出た油断

男五十ようやく終の住み処もつ

仏壇と私の部屋がある新居

幸せになって忘れるちびた靴

和歌山市 福重 美子

飲みつ振り女に泡を食う男

目の中のゴミが私を攻撃中

母のおでこ体温計の代りする

コンビニが道草させる塾帰り

ゴミの日に助けてくれる旦那様

和歌山県 中村 君枝

スリムさへそらそらもつと中国茶

みーんな使つていいよ母さん貯めたもの

想い出に生きて姉妹も老いたまう

根回しがきいて私も魔女気分

無欲さが時に相手の胸を打つ

高知市 小川 てるみ

約束を信じてからの長い闇

逃げ水を追いかけて行く夏帽子

一日が始まる朝へ水の音

羽繕い重ねながら妻でいる

夢を盛る皿は大きい方が良い

高知県 桑名 孝雄

過去形ならあれもしましたこれもした

I Tの攻撃僕はどう躲す

横文字はたどたどしいが縦字なら

ああしんどママに上客だと言われ

骨粗鬆 顎はどうやら別らしい

高知県 百田 幸

ワインドー迷った揚句去る女

遠い道時に迷いもあった仲

遠く住む孫少しずつ他人めく

あなたには聞こえて欲しいひとりごと

たくわえて他所行き着れず捨てられず

香川県 清川 玲子

人情にふれて頑固さ溶けてくる

カレンダーに刻む二ヶ月先の旅

走るほうが早いところへ電話する

冗談で言った言葉が走り出す

クラス会の鞆ブランド品に決め

香川県 原 賢

名水と蜚で過疎の村おこし

汗だくでジャンボ籤買うペダル踏む

これきりと脛を齧った罪の数

向こう脛 生傷たえぬ青二才

ほどほどの距離を保った友であり

今治市 野村清美

点滴にすぎり反省一しきり
病窓を見守るように茜雲
屋上の風爽やかに頬なでる
雲間から労わるように残り月
退院へ心わくわく荷をまとめ

松山市 山之内 八重美

体裁はどうあれ無農薬を買う
鎮静剤に父の雷良く効いた
四国路も便利になった高速道
気のきいたお紋りが出るバスツアー
新じゃがの煮っころがしは母の味

愛媛県 安野 案山子

兼業の農機具代へローン組む
三本の矢が乱れだす遺産分け
騙されるかも知れないが夢を買う
二日酔いの脳へ流れる迎え酒
釣り好きのお坊さんからお裾分け

北九州市 岡田 幸生

王冠を叩くと弾む瓶ビール
あじさいに会う約束の雨仕度
仲の良い茶碗を探す陶器市
見ない振り出来ぬ一言から揉める
明日採る胡瓜からすに先越され

米子市 猪森 スミエ

甲子園の広さ見て来た雨蛙
おこぼれの酒で踊った浜千鳥
灯を落し河鹿の笛を聞く浴衣
響かせて村がふくらむ祭り笛
磯釣りの鯛一匹が病みつきに

鳥取市 近藤 秋星

納涼祭老人ホームのお祭りだ
納涼祭寮母さんらの艶姿
ふる里の夏を満喫して帰り
ふる里のお盆鷺鳴いている
立秋をせせら笑っている猛暑

鳥取県 平井 栄翁

あじさいの変化楽しむ今朝の雨
秋の蚊の執念深さびしやり絶つ
新しい恋がふたする過去の傷
試着室脚も鏡もくたびれる
子の学費終って仰ぐ星明り

鳥取県 河本 照子

二十一世紀私の腰も曲り出す
新米を農家の方が遅く食べ
泣き笑いしながら姉妹語り合い
口答えしない代わりになる涙
上得意様と覚えのないハガキ

鳥取県 西垣美知子

孫のこと深呼吸して我慢する
老いらくにほんのり恋と言う出会い
どん底でつないだ職だ胸をはる
病窓で勇気をもらう虹にあう
腹立ちを握り拳の中に秘め

鳥取県 鳥羽玲子

冷凍庫過信どっさり詰めている
最後の歯抜いてとまどう舌の先
弱音はく人ひとり居て列乱れ
プライドが高く気楽に近づけぬ
化粧して漸く今日の顔になり

鳥取県 下田茂登子

桃太郎生んで嫁の座強くする
どこ迄が仲がよいのか計れない
借りたこと忘れた傘が二本あり
諍って始めて読めた裏の顔
お隣の夫婦に少し嫉妬する

倉吉市 牧野芳光

歳月は重し百合見失なう
無人駅男の背中動かない
旧友の話 台所に触れず
かんぞうの花いつ狂うかと見てる
火のように燃えるか水に流れるか

姫路市 勝間タツエ

二度とない今日の足跡ふんでいる
母よりも長寿の私頭さげ
ほしい物もあげたいものも愛の言葉
田の中で涼しい風に愛撫され
花時計見る人もなし暑い日よ

尼崎市 清水久美子

他人の手を当てにしない行動派
殺生も気にしていない子のお盆
毒舌も愛されている片えくぼ
旱天の一步手前で来た豪雨
ガングロと言われたくない甲羅干し

尼崎市 軸丸勝巳

ソ連参戦 楽土一転生き地獄(終戦 5句)
大移動 往きつ 停りつ 無蓋貨車
切れ切れの玉音を聴く皆無口
武装解除ああ軽き身の置き処
赤い夕陽の曠野南へ南へと

尼崎市 内田美也子

陽が落ちて生気を戻す万歩計
渋滞の試練をくぐる盆の道
御無沙汰を孫と詫びてる父母の墓
一夜漬け食欲そそる茄子の紺
腰かけてしまうと長くなる話

尼崎市 松下比呂志

時化する日の海は荒ぶる神の貌
善人と飲んで語って浄化され
潮満ちて海はたつぷり重くなる
歳三ツ少なく言って若返る
浜風が風鈴鳴らす港町

兵庫県 広瀬房江

南瓜の花ふつくらと実る夢
割り勘で祝ってくれたテレビ見る
仏壇に供える桃の恩返し
筒切りの脳内写真異状なし
エプロンにかくれて届くサクランボ

兵庫県 山本泰子

つばめの子巢立って後はまた一人
運命に翻弄されて今農婦
思い切って十枚買った宝くじ
波の音日本海まで聞きに行く
郵貯の満期へ遺言書き替える

兵庫県 安達厚

へえおおきに医者と薬で生きてます
酒煙草止めても生きる道選ぶ
パソコンに戸惑う指を孫笑う
物忘れ惚けに繋がないでくれ
車椅子押す手も古希の坂を越え

大阪市 岩崎公誠

流れ星願いをかけることもなく
両手上げアホになりきり阿波おどり
勲章も金も縁なくガラス拭く
ハイヒール猫が背伸びをしたかたち
胸と尻サンバパワーではちきれる

大阪市 熊代菜月

手をあげて意見の言える子に育ち
雨あがり山が湯気出す背のびする
自販機にお札言ってる酔っぱらい
七夕のような恋した遠い夏
格言の日めぐりめぐりはや六月

大阪市 星野きらら

一病を大事に生きてゆく輪廻
一円玉拾う勇気がこんなにも
猛犬注意 猫大の字で昼寝する
蝸牛の恋へ演出雨しきり
夫逝って翔ぶ羽根みがく三年目

大阪市 中井正秀

暇つぶし猫のトイレを作ってる
ときどきはムンクのように叫びたい
いつ死ぬと分かれば残すことはない
昨日まであった家はや駐車場
ボーナスは無いが年金有難い

大阪市 榎 本 日 の 出

一輪車ケガを承知で買ひ与へ
ケイタイがあればいいな―山歩き
まだ少し愛があるので小言いう
日焼止め塗って出掛けてまだ女
ボケてない健忘症と言っている

大阪市 一 本 勇 太

悪女ぶる女無邪気かも知れぬ
夏に弱い人だったねと風鈴に
遠雷に越してはならぬ川がある
書いて消す破つてもとの闇にいる
共食いにされないように反り返る

大阪市 中 村 叡 子

半跏像御仏なれどなまめかし
静かなる夫の寝息ふと案じ
リハビリが実り親指動き出す
烏賊墨が好き お鉄漿もいとわな
盆踊りあの娘ばかりを背のびして

大阪市 中 澤 伽 羅

大胆な人扱いのサンガラス
海開きそれは私の誕生日
朝顔をあまり見かけぬ街になり
花火済み疲れた顔が並ぶ駅
お祭りに行くと花火を買ってくる

冷コーであつい二人の長話

良い父に変えたアップの保険額

朝市で米寿の母はわかめ売る

これ以上飲んだらあかん癖が出る

生ビール泡まで買うと言っていない

大阪市 伊 藤 博 仁

ボケ話笑っておれぬ年になり

ツバメの子顔中口にしてねだる

無視されてそれでも踊る鳩の雄

近づけば爺と言って蟬が逃げ

手のひらに暗証番号書いて行く

大阪市 大 川 道 子

大欠伸したらムンクの絵になった

ありがたや風呂浴びる間の全自動

貰ったが使い道ない記念品

恥かいて忘れられない旅となる

てっゆうかで会話始まる現代っ子

堺 市 荻 野 像 山

かくれんぼ柱にしっぱ生えている

旅だけは夫婦仲よう見せておく

ぶつきたい時もあったな古カバン

笑っているが心が晴れた訳じゃない

夜は好し留守はなお好し一人酒

堺市和田つづや

漫画でも読んでみようか足ギブス
タンポポをくれる嬢ちゃん闘病中
すぐ返事したくないから聞き返す
玩具箱みたいな人で好きになり
娘が沈む今青春に居るんだね

堺市村上玄也

冗談が弾んで人を傷つける
無責任はびこる国で生きる知恵
夢だけは宇宙サイズで生きている
後ろ盾なくすと腰も低くなり
0金利とうとう預金食いつぶす

堺市矢倉五月

鉢植えに蛙一匹住んでくれ
投薬が減って不安な二三日
寝つき良い夫は知らぬロゼワイン
夏済んでポケモンシル置きみやげ
気を揉んで掛けた電話にはずむ声

堺市大橋錦

捨て猫の目に負け一夜家にあげ
まどろみを蟬とすずめに起こされた
クーラーの故障で財布寒くなり
一歳を預かりベース狂わされ
道端の駐車に暗黙のルール

堺市喜多美波

子守りするための力を貯めている
この暑さ毎夕そえる冷や奴
炎天にカンカン帽の父浮かぶ
世帯持ち息子も料理うまくなり
介護する鬱憤を聞く長電話

岸和田市不破仁緑

コンチキチン外人さんが前をゆく
晴天を喜んでたら水不足
水撒けばどこで見てたかとおんぼ鳩
暑い夏一層蟬が熱くする
減らされる手元を睨む計り売り

岸和田市木村正剛

そのうちに盤回しになるわたし
吉とでた老後に望みつないでる
飄々と最後を飾る駄目男
憧れを手にしてみればただの石
幸せを感じるハードル下げておく

岸和田市宮野みつ江

十七歳父の拳が届かない
暴走の子を待つ母の熱帯夜
横向いて子は真実を探らせず
お好みの焼き方ぐらい放つといい
スランプの底でやさしい目に会おう

河内長野市 木太久 正一

終戦日天を仰いで虹を見た
年毎に気合いを入れて越す盛夏
人間の鎖で囲む基地の島
何ごとも無かったように名護の海
夫々に悩みを抱いて生きている

河内長野市 大西 文次

能弁の舌がもつれるプロポーズ
最果てに飛ばされて行く旅支度
老妻の影一回り小さくなり
柏手を多い目に打ち神頼み
世渡りも楽し寄り道回り道

河内長野市 印 藤 智 子

老人の裸婦像がない美術館
心療科待合室は会話なく
銀めしの話が好きな戦中派
コンタクト拾って貰い深い仲
手作りの服はなかなか捨てられず

羽曳野市 川 口 信 子

丸暗記あくびをしたらもう忘れ
孫が来て嫁の話が筒抜けに
強がりを言って孤独に耐えている
幸せをよろこぶ人のそばに居て
迎え火やさまよう風と盆の客

羽曳野市 山 本 たけし

股間まで流れる汗の屋根修理
八月は往時偲んで眠れない
掛軸に一筆の涼鯉はねる
夏草が茂る更地はゴミばかり
箒星西に流れて風は秋

藤井寺市 岸 本 寿 代

朝早く蟬の楽隊じーじーじー
古希になり写真の整理走馬燈
冷えずぎと言えずに一人腰さす
つけ毛より禿げた頭が男らし
夢いだき建てた二世帯なやみふえ

柏原市 永 浜 加津子

夏ばてのうつらうつらに蟬時雨
細やかに幸せ拾いよき老後
帰らなきや言うて始まる長話
おみやげを貰うばかりの甲斐性なし
チビギャング駆けぬけわが家夏終る

大東市 井 上 すみれ

大阪弁の女一人で住んではる
アーケード好きな日傘がじやまになり
新札に印刷ミスとは勿体ない
残りもの食べて八月十五日
四世代生かしてもらう不思議さよ

枚方市 大昇隆 広

不器用な恋が拾った美人妻

つまらない意地がつまらぬ事件生む

苦勞見せず宿の女將の帯キリリ

土地の風だけが迎える一人旅

夕暮れてひよいと宿とる一人旅

四条畷市 吉岡 修

恨んだがバネにもなった師の拳

やれ嬉し酒はよいよと医者が言う

不器用な男でいつも向こう傷

いつだって野生に戻る猫かぶり

ブティックへ行つて淑女に化けてくる

和泉市 横山 捷也

不器用な敵に豊作キウリもぐ

裸でも本音の出ない人と呑む

新盆の父の表札そのまま

ボケないぞ推理ドラマの先を読む

熱戦譜遠いふさと連れて来る

富田林市 山原 昭水

不器用と器用が暮らし夫婦です

内気な娘いま恋人はピアノです

再会は昔のままの歌酒場

やんわりと私を縛る姉女房

読書週間エッチな本も読んでいる

豊中市 みき わきみ

我が棺に入れよ『旅人』と唐詩選

竹木簡紙 ITと世が進む

もったいない また大正が口を出し

今にして子育て中は花なりし

息子らが孝行出来るまで生きた

吹田市 須磨 活恵

本当の痛み潜つて人を知る

悲しくて雑巾かたく堅くしぼる

どん底で見えないものが見えてくる

すかたんも長い人生味のうち

ある日ある時訳もなくふと孤独

吹田市 木村 無祿

蓮池をめぐり今日だけ仏徒なり

お目出度い長寿政府はもて余し

蝶を待つ花とりどりの艶姿

ヒトゲノム命無限と言う恐怖

ストレスを吐き出すように蟬の声

吹田市 穴吹 尚士

人生は後の祭りの繰り返し

自分史に創作混ぜる見栄っ張り

手抜きして妻堂々と昼寝する

失言の癖は死ぬまで治らない

先生の地盤を狙う鞆持ち

五千歩のために通院しています
高槻市 西谷 治三郎

学校は八月閉鎖 塾満員

あこがれた悠々自適もてあまし

猿にでもできる反省できぬ奴

ダイエツトやって魅力が無くなった

高槻市 左右田 泰雄

響き合うかたちで愛のEメール

相談をするあてもなく貝になる

ネクタイをすると背すじがシャンとする

あじさいが急に息づく雨催い

とり巻きが皆逃げ腰になる落ち目

高槻市 生田 義一

そこここに世襲政治家ミニ王朝

暑い日々鳥肌の立つ記事あふれ

八合目大パノラマは霧の中

家族旅記念のドラマ一つ増え

今日も是非いいことあれとお茶を立て

大阪府 澤田 和重

排ガスの町を夕立きて洗う

嫁姑たがいに本音としこめる

夏休み我が家に孫を引き寄せる

長電話の相手だれかと気にかかる

水上バスで指を折ってる橋の数

何げなく誘うあなたに乗って見る
富山市 松見 たえ

気が付けば引くに引けない人の好き

人生の余白あなたに賭けて見る

老人増加真つただ中にいる私

日立市 加藤 権悟

回復の抜糸の疵を笑い合い

朝どりのザルにふくらむナス キュウリ

空調の塾に日焼けの子がいない

稜線の雷雲父の貌になる

新潟県 高野 不二

こけてから七十の年考える

ワープロが親切すぎて使えない

ぜいたくな気分二人で見る花火

五割引やつぱりほしい物はない

横浜市 保田 絹子

黙々と守る人あり大自然

ハマナスの香りカメラに撮れたなら

サロマ湖の夕陽浄土か湿花園

横浜市 生坂 サト子

いい旅もわが家の風呂で締め括る

ぎこちなく初めて孫と乗る電車

足柄の子供相撲に沸く大人

ほっとした時間が長居してくれぬ
シンプルなおそば屋さんのかき氷

ケーキ屋で自分で選ぶ誕生日
横浜市 近藤道子

水やりへ依怙鼻肩してしまふ鉢

蚊一匹好かれてじれる台所

ざあざあと妬心を流す通り雨

横浜市 布山嘉信

糠味噌に手もつかりそう妻の味

鬼百合の由来を思う美しさ

五右衛門も啄木も詠む浜の砂

サミットは静かな街を見せてやり

横浜市 鈴江純子

青天のへきれき孫を抱かされる

鈍行で土地の言葉に囲まれる

子の帰省土産は汗のユニホーム

語り部の声穏やかに反戦歌

横浜市 長島亜希子

梅雨晴れ間ふとん干したし出かけたし

一票の力信じて票を入れ

二十代の身体と言われ自信湧く

向上心強い娘がまだ嫁かぬ

横浜市 平達也

俺の所為心で詫げる妻のケチ

通院が生き甲斐だとは情けない

似た人を見て思い出す遠い過去

ストレスを貯めて返事はまだ書かず

ビジネスがひとり歩きをする介護
横浜市 川島良子

赴任地の夫と遊ぶiモード

走り出すもう聞く耳は持っていない

十七歳爆発させる甲子園

東京都 清原悦子

肩書きがとれて名刺はカラフルに

デパートでストレス発散させている

一人旅ちよつと期待をして行こう

頂上で自己満足の声を出す

東京都 吉田土風

方言をマル出しにして親しまれ

実力者のロボットになり伸し上がる

地方色豊かに続くのど自慢

影武者は用済みとなり消されゆく

東京都 井上つよし

三日月に願いを込めるダイエット

空財布診察券がふくらまし

麦藁帽蚊に食われつつ雑草むしり

パン食を箸で味噌汁しんこ漬

静岡市 中西雅

七八つかサブランクの庭せまし

絆つぐ天寿の母の袋帯

露天風呂水平線の日の出浴び

人を愛でお菓子をはめて茶がうまい

浜松市 岡本 まち

北のみやげ富良野の香り連れて来る
幸せの時アンコール出来るなら
どっこいしょ気合いを入れて始動する
自然体で生きるこれも処世術

京都市 三宅 満子

一匙に祈りをこめている介護
かき氷せめて口だけ氷点下
ゆがく焼く夏は行場の台所
猫とする昼寝私の暑氣払い

八幡市 衆野 和俊

ウォーキング抜いて抜かれてリフレッシュ
公園は愛犬連れの井戸端に
主婦の目で折り込みチラシ見る歳に
トランクスおじん返上ならぬかな

榎原市 西本 保夫

犬を飼うゆとりがあると思われぬ
えーいままよその日ぐらしで生きている
リストラの主人にひまがありすぎる
この夫婦人に明かさぬなぞがある

奈良市 上村 季世恵

淡路博暑さに酔った三姉妹
裏方の苦勞知らずに花ほめる
炎天下一張りの蛸出迎える
御馳走にお酒はずんで旅の宿

奈良県 渡辺 富子

戦争を語ると父の記憶冴え
夕立へ花も私も生き返る
満ち足りた笑いはじける手巻き寿司
炎にも氷にもなり女です

滋賀県 中 宗明

職業を選ぶ余地ない不況の世
謝れば今なら許す恋敵
ダイエットする娘羨む病み上がり
宿六がうろうろしてる大掃除

尾張旭市 三浦 きぬ

悔い多い人生だったから愛し
染み一つ残し今年の夏も去り
亡夫征きし門司の波止場は夕風で
噴火 地震 台風 逃げ場欲しい国

香川県 松村 輝夫

日本も若い地雷が埋まつてる
叩かれてじつと我慢の釘になる
念仏を唱え今だに竹を踏む
夏盛りカヤブキの里開け放す

今治市 塩路 よしみ

空っぽの頭で今日もお茶を飲む
もう誰も握ってくれぬ節くれ手
シャボン玉ひいふうみいと無に還る
ブランコを揺らし昔の風に逢う

今治市 渡邊 伊津志

大切なのは勉強をする心

円満な心になって枇杷を剥く

闇よりも濃い蝙蝠の円舞見る

水圧を利用してゐる墨彩画

神戸市 船津 とみ子

祖父母夫の順に葬式出しました

ひ孫抱く七十五歳うれしいわ

買物へ背のリュックが背に馴染む

五月十日を思うさようなら荒介さん

尼崎市 河津 正治

正論を吐いて古傷深くする

泳法を変えて世間が広くなり

頑張りで節目ふしめを泳ぎ切る

根回しが効いて拍手が鳴り止まず

伊丹市 延寿庵 野鶴

切り抜いてしばらく置いてゴミになり

托鉢のお椀に入れる鬱ひとつ

もったいをつけて主治医が結果言い

逆風へ笑顔絶やさぬ野の仏

伊丹市 桧谷 郁子

初孫に火花も祝う素敵な夜

ため息は空に哀しく青江三奈

今日の幸まっかな夕陽有難う

どよめきの歓声虎の逆転打

川西市 西内 朋月

夕涼み暴走族の音響く

織田作と同じもの食う自由軒

南瓜の茎を食つてた夏がくる

焼け跡にカンナ燃えてた敗戦日

篠山市 谷田 多美子

海見える温泉につかつて童歌

湯の町にみかんの香る洗い髪

健康は宝アロエの鉢手入れ

梅 ぶどう ジュースに仕立て土用明け

兵庫県 黒崎 美紗子

思い出の函館夜景今いちど

久し振り丈長ドレス若くみせ

友からのみやげうれしやよい液肥

うきうきと輪にはいつてた盆踊り

倉敷市 家守 政子

寡婦同士泣いて笑つて長電話

上流を気取る財布が軽すぎる

中流になりたい妻の職探し

夏バテにとても美味しい梅茶漬

倉敷市 撰 喜子

田に羽根生えて異国へ舞いおりる

タベルナという食堂で昼を取る

信仰心あつくギリシャより帰る

地中海の気候になじみ旅終る

母の味覚えた妻の寿司が出来
岡山市 清水 金太郎

もう最後だと寄った戦友五六人
神主も実家へ盆の墓参り
お守りも持たせ試合に送り出す

岡山県 国 米 きくゑ

時々胸ではじける線香花火
故郷をのんだダム湖にボート漕ぐ
一杯のコーヒー隅の指定席
朝々に花と対話の至福どき

倉吉市 大 下 智 子

見栄張らずそのままズバリ私流
末っ子の誰に似たのか見栄っ張り
食欲にブレイキかかるサルモネラ
流行を追うとそれだけごみも出る

倉吉市 猪 川 由美子

失言癖つまり地金が出たのです
アジサイは会話弾ます妙薬だ
母性欠けて子等が次々傷められ
世渡りのポーズが下手で誤解され

米子市 小 塩 智加恵

子も孫も長男と言う二字を負う
友の汗双手で受ける夏野菜
人の好い子に気ぜわしい強い嫁
糊きいたシャツに沈む熱帯夜

花形をいつもうっとり見てしまふ
米子市 足 立 由美子

鮮やかな一色添えて折り返す
憧れのプランへ靴も弾み出す
健康に憧れているマイ・シューズ

鳥取市 録 沢 風 花

カサブランカ活けて涼しい部屋になる
虹つかむ道は険しくなるばかり
彼岸花この世の罪を負うて咲く
森よりも銀座のごみに寄るカラス

鳥取市 福 島 庸 二

発想を変えて挑戦新世紀
価値観の違いごみとの別れ道
雨あがり空のキャンバス虹で染め
バイキング野菜不足を取り戻す

鳥取市 西 尾 敬之介

仏様やっこの盆凌げそう
山門を酔ってぐぐって罰もない
法衣脱ぐお坊さんから落ちる汗
中毒を用心し過ぎ捨てる破目

鳥取市 福 永 ひかり

控えめな自己申告の酒の量
発端はほんの些細な言葉尻
貧乏は金の値打ちを知っている
わだかまり残したままでいる別れ

鳥取市 田中 懂子

手分けして絵日記埋める夏の終

せみしぐれ途切れて気づく蟬の声

茄子トマト草と背丈を競い合う

サロンパス鏡に背中見せて貼る

鳥取市 有沢 せつ子

借景に日本海付き分譲地

街なかに頬被りしたごみが落ち

過ちを減らそう二十一世紀

軽い気で覗けば自動ドアが開き

鳥取県 山岡 久枝

夕立の久しき雨に生き生きと

貧乏もあなたと一緒にそれでよい

板前の見るも鮮やか刺身盛る

露下りて涼しい朝の畑仕事

鳥取県 澤裕 子

海に来て心の狭さ思い知る

見栄を捨て親子のような嫁姑

ライバルに狙った椅子をさらわれる

鳥取県 高尾 京

片足は亡夫のそばにと告知され

青空を画帳に白きひとほけを

食欲が増して命をとりもどす

病院食 いもの料理もあれこれと

鳥取県 山内 芳江

一人立ち出来なくなった底い癖

偶然をくれる神様ありがとう

きつと出る芽だからそっと見守ろう

さっぱりと忘れた振りも生きる知恵

鳥取県 西沖 彰雄

本音にて生きれば世間狭くなる

反省はするが謝る気持ない

冷や飯を食ったが視野が広くなり

合点のゆかぬ相槌なぞ打てぬ

鳥取県 鳥羽 直市

抜け道を考えながら妥協する

ふる里がやさしい風で待っている

突き放すきびしさもあり愛もある

やがて死ぬだから仲良くして暮らす

鳥取県 橋谷 静江

健康な五体親への感謝状

友が来て手造り野菜自慢する

たくさん愛くれました夏野菜

雨不足無残に枯れる夏野菜

鳥取県 山下 節子

無一文三途の川も渡れまい

雑魚だって同じ重みの票を持つ

意思表示出来ずズルズル買わされる

大丈夫言ってほしくて医者通い

安来市 原 煩惱児

家族という絆を確と盆の月
踏ん張ってナースの白いローヒール
老い達者土用鰻を旨く食い
ああそうかそうかと父の太い肚

松江市 小 川 注 湖

宍道湖を染める夕日の中にいる
新生児並んだ足にある印
星空に無数の話浮かんでる
病室に花火音来る夏祭り

出雲市 岡 あきら

ゴミの日の呆れるほどのゴミの量
丹精の茄子を枯らした油虫
諍いの最中に一句浮び出る
天然鰻奮発をして暑氣払い

出雲市 城 多 喜

分け合って悲しみ一つ消化する
ぶつちんと切れた私の脳細胞
背のびして私の星を探してる
かけ声をかけて階段染にする

出雲市 加 藤 スズコ

冷や奴今日の暑さを語る箸
おどりの輪素足の影にまるい月
負けぬ気でおしゃれをきめる夏帽子
趣味多忙傘寿ひとりの世帯主

島根県 福 間 博 利

花絶えぬ庭に元氣な妻がおり
昭和史に青春がある戦友会
カナカナの鳴くふる里がとおくなり
夕立が残暑の庭で踊ってる

島根県 菅 田 かつ子

ささやかな昼飯朝の残りもの
誘われるうちが華だと出て行つた
観光もそこそこに乗る冷房車
おいこらに慣れて返事をして暮らし

島根県 多々納 テル子

生きたいきと老友はかつらがよく似合う
受話器置きテレビ体操でもするか
言うだけは言つたこの先折れておく
朝穫りのトマトやつぱり旬の味

島根県 持 田 多輝子

五欲みな流して素顔とりもどす
自分史の縮図は悔いる事ばかり
独居にも馴れて未練のない余生
苦勞して育てた子等はみな素直

島根県 武 島 ちよえ

招かれて嬉し寂しい敬老日
一品の不足食卓花で埋め
減らず口叩いて孫はのび盛り
親切に深入りされて疲れます

和歌山市 前岡健三郎

大被害自然の怖さ思い知る
産廃の捨て場所拒む地元民
宇宙塵不用衛星何万個
井の中の蛙もでかい夢をもつ

和歌山県 坂東和代

預け料引かれてないか預金帳
投げた石なげた言葉はもどらない
B型の女が揃う従姉妹会
みみずさんあなたのお国どこですか

和歌山県 村中悦男

耳の底占有してくる油蟬
油蟬聞きつつトマト丸かじり
油蟬玉の汗して草を引く
油蟬大樹を抱いてゆすり鳴く

吹田市 二宮栄子

ママ入院俄か母ちゃんしています
仏壇に朝の挨拶六つの手
汗のシャツ一人で脱げず駄々こねる
ただいまよりジュースが先の子が帰る

吹田市 後藤志津香

夏帽子ペア憧れの富士登山
店先にお化け西瓜が置いてある
夏バテに森の冷気を浴びに行く
朝一番窓一杯に蟬しぐれ

吹田市 大谷昌子

駅売りでおしゃべり好きのスポーツ紙
女神さま今では魔女に見えてきた
薄化粧決意あらたに紅をひく
親業の切符手にせず親になり

大阪市 亀井円女

世が世なら茶髪にしたい神さんも
今日のバラ寿し亡母は何点くれるかな
あじさいはいいが枯れ際見とうない
私は直球良人はうまい変化球

大阪市 尾崎黄紅

少年の描く自画像は赤絵の具
出る杭を打たれた意志に悔いはない
あんないい人雨に遭い風に遭い
華麗なる花火のいのち五秒です

大阪市 平井露芳

少食になって肥って来る不思議
水やると花の病気はすぐ治り
フーアーユで通じたらしい森英語
祈とう料払いポックリ逝くつもり

大阪市 伴あざみ

いっそ身を蛭にやつし燃えようか
夢みれば帰り道ない恋地獄
熟成の時を待ってる熱い胸
奪っても奪っても未だ渴いてる

東大阪市 田中 美弥子

いのちの灯ゆらゆら揺れて老母眠る

許されてまことの愛に包まれる

草引きへ重ね塗りするサンガード

治療法無いとは酷な膝小僧

堺市 梶本 哲平

猫が好き化けて出るものみんな好き

立ち読みの星占いはあたらな

名刀の一閃きらり流れ星

崩れそう家も会社もこの国も

堺市 斎藤 さくら

冷房の効かした部屋で鍋美味い

お疲れの言葉に代えてはいビール

応援の熱気に酔った大阪ドーム

仏壇に供える花も咲かせてる

八尾市 與田 明

浮気して下着が裏のままでは

腹太鼓鳴らしてビール流しこむ

ビタミン剤飲んで猛暑に耐えている

靴も減り達者よろこぶ万歩計

八尾市 田中 トシエ

お車が参りましたと追い出され

農継がぬ子から米送れの電話

還暦の実感わかぬ祝酒

現代娘釣書をコピーして送り

八尾市 中島 春江

お目当の人居らずして盆踊り

腰痛もわが人生の友となり

蟬せみは女の方が無口です

介護保険料掛け捨てだねと言いたいね

枚方市 二宮 紫鳳

母と子の絆確かな里帰り

満たされた笑顔のそばに夫が^ぽいる

ほどほどの幸せで良し花火散る

墓参りすると心の垢が取れ

大阪狭山市 矢野 梓

うれしい日つらい思い出みな忘れ

占いに逆らい夫婦続いてる

青春の血が蘇る甲子園

里帰り宅急便が先につき

河内長野市 水谷 正子

水墨画やつてるらしい見舞状

意地はって相合傘の肩がぬれ

水くさい話夫婦で保険かけ

水道代胡瓜に化ける炎暑なり

富田林市 中崎 深雪

姑に未来の自分かいまみる

客来れば家も私もピカピカに

おせじだとわかってるが頬ゆるむ

すましているが鬼一匹を飼っている

羽曳野市 永田章司

子供無く生前予約お葬式

浴衣着て扇子を使うセンスなき

聞く耳をもつて器を大きくし

侘び寂は置いてけぼりのIT化

泉佐野市 稲葉洋

瘦身に尚夏やせの二重奏

決心をする日が延びる禁酒令

しまったと思うこと増す古稀の日々

駄目ですよ見ているだけよ他所の花

泉佐野市 備後三代子

二回り小さくなって更衣

シャンソンのささやきワイングラスにも

くちなしの匂う風向き歩を止めて

何しても手間どる病後快復期

大阪府 前田忠子

長電話これもストレス溜めぬ知恵

古希近し私の夕日どのあたり

十七歳の孫に浴衣を縫うてやろ

旅の宿浴衣の友に未だ色気

大阪市 野田栄呼

断われずいやいや役に返り咲き

ひょいと来て風穴あけて立ち去る子

貯金箱穴があるのか貯まらない

涼感に布団手足で探り寄せ

横浜市 伊藤ふみ

ふる里の青空見上げ愚痴飛ばす

ふる里の月を仰いでバーベキュー

新盆へ姉妹向き合い皺を読む

横浜市 金森徳三

なんのかの曰くをつけて今日も飲む

年金に介護保険が脛かじる

久しぶりラッシュに乗って若返る

横浜市 芦田鈴美

あついあつい言って暑さを確かめる

忙しい時は淋しさ忘れてる

肉ジャガのレシピを添えて出す手紙

横浜市 山梨雅子

花火にも不況風吹き早仕舞い

水やりの庭木順序はまちがえず

久し振りに眠れた朝の爽やかさ

横浜市 三村八重子

稽古着の汗の重さも十七歳

礎の七つボタンに黙禱を

献血のようにはいかぬドナーカード

横浜市 豊田羊子

娘の彼は納豆嫌い古都の人

紙婚も納豆たべに実家に来る

ケイタイでスイートホームへ手をつなぎ

静岡市 増田 扶美

夕立に蛙の声を久しぶり

帰省子に父の浴衣の短すぎ

目くばせを待ってひそかに席を抜け

静岡市 大村 正雄

朝刊に暑さが宿る熱帯夜

夏痩せの富士を背にして運動会

一瞬の期待集まる水瓜割り

三重県 尾崎 勤

テリトリー作る私も独裁者

失恋の歌カラオケで手拍子で

山頂で値段も見ずに買うビール

京都府 前上 英一

ねぎらいの形に靴が揃えられ

似たような話聞いている屋台の灯

折り込みのチラシを今朝も妻へ選る

高槻市 執行 稲子

バージンロード蝶ネクタイも眩しそう

記念樹にお水をちゃんと誕生日

表札は敢えて男名にしときます

大阪市 中村 忠敬

アルコール消毒しすぎ二日酔

肝臓に平謝まりしもう一軒

川柳誌なんて倒産したんやろ

大阪市 榎本 舞夢

孫の指借りて引算教えてる

宿帳に妻と書かれて弾んでる

こおろぎが一匹部屋にまぎれこみ

寝屋川市 岡本 勲

相合い傘雨がやんでもさしている

六十路越えて新人OB会

減らず口大人たじたじでも嬉し

東大阪市 今岡 貞人

賞味期限過ぎた余生に人間味

伸び縮みする良心を持ち合わす

悠然と我が道を行くちぎれ雲

吹田市 木下 敏子

夫婦には賞味期限はついてない

平凡な毎日を舞う白い蝶

言い切ってから寒い風胸にゆれ

八尾市 鷺見 章

まつり太鼓ねむれぬ夜を窓にきく

アジサイに光こぼして初夏の雨

真夏日の風はやさしく背をなでる

八尾市 高橋 明子

青信号見たか長さん渡りましょう

猛烈に増えて携帯何話す

満開の鉢そよ風に桔梗ゆれ

少年は壮志を抱きバスジャック
羽曳野市 森 田 四三郎

ポイ捨てを無言で睨む嫌煙者
混浴に老いときめく旅の宿

河内長野市 杉 谷 カズエ

ママごとを曾婆ちゃんに見て貰う
年月の速さを思う八月忌
目標に米寿卒寿のいいお方

堺市 田 中 紫

何もかもＩＴ革命嫌いです
ぼんやりと怠けごろごろする辛さ
千葉すずに若い世代の瑠璃ひかる

岸和田市 亀 井 皎 月

車にも老紋章の付く齡
鉢植の元氣な姿友として
今日もまた腰の修理に出かけます

和歌山県 森 下 順 子

捨て切れぬ箱のたぐいと一人住む
ちちんぷい臉が重くなってくる
風通る部屋の夏百合いい姿

宝塚市 飯 西 ミサヲ

腹がへるそれが嬉しい病みあがり
白い歯が上下で三本よだれくり
出迎えは黒い顔した小さな母

朝どりのトマト思わずかぶりつく
川西市 田 中 喜 俊

朝めざめ気持よいのはもうけもの
長電話気持ゆっくりしゃべります

尼崎市 尾 宮 弘 治

出向の課長を中にハイチーズ

大風呂敷一寸突いてみたくなる

豆腐より干しイカが好き総入れ歯

尼崎市 森 安 夢之助

反抗期母はおろおろするばかり

大皿にチヨボツと嘘が盛ってある

次の一手にため息が出るばかり

三田市 久保田 千 代

人生も残り少なく加速気味

湯上がりにビールとやつこあれば良し

誘われて決意がゆらぐ休肝日

姫路市 服 部 一 典

父の日も妻が逝ったら仕舞いです

昼寝どき居留守も出来ぬ独り者

妻の初盆えろうお元気でと言われ

兵庫県 徳 平 毬 子

乾杯に酔って嬉しい快気席

患者にも緊急欲しい予約票

海の幸健康食と膳に添え

鳥取市 河田 のり代

ダイエツト出来ずにスリーLを買う
車のローン済まぬに事故だ情けない
愚かですでも言われれば腹が立ち

鳥取市 横田 春名

若い日々読書にまでも背のびした
良妻のポーズ三日で崩れそう
今ずばり論せばきつと目を覚ます

鳥取市 岡田 信恵

子が巢立ち趣味に夢中で若返る
無口だが互いに心通つてゐる
肩たたき孫のサービスあてがあり

鳥取市 山宮 愛恵

いつも一緒に君はさつさと旅だった
どうしよう君の笑顔が浮ばない
わたくしを棒立ちにさせ陽が落ちる

鳥取市 宮脇 道子

愚痴を聞く友が居て老いパラダイス
人を見に出かけたような菖蒲園
鏡見てシャツ出しルック入れ直す

鳥取市 山口 千代子

マネキンは一足早い衣替え
八十路過ぎ五十肩だと医者言う
人生の雨風嵐くぐり抜け

鳥取市 谷岡 清子

口下手な青年に娘が先走る
孫と食うすいかの味は倍旨い
度胸決め思い切り踏む自動ドア

鳥取県 藤山 弘子

御中元インターネット利用する
母さんの口にブレイキきかせたい
こども会ごみ減量へ動き出す

松江市 銭山 昌枝

丑の日のうなぎ一匹持て余す
鬼灯が赤くなる頃孫が来る
穏やかな寢息が洩れる隠居部屋

出雲市 伊藤 玲子

サンダルが悲鳴をあげる熱い浜
台風が去って優しい月の顔
靴音が弾む合格したらしい

出雲市 川島 和歌子

水撒いて客を迎える初夏の風
うなだれて日照り続きに水を待つ
朝取れの茄子の紫紺眼に沁みる

出雲市 榎ミツエ

海猫が気持よさそに水遊び
ダイエツト唄と踊りで背を伸ばす
ちぎれ雲やんちゃな風と恋してる

益田市 岡田 たけを

バス停で噂を聞いて聞き流す

バスのステップ老人向けに出来てない

降りる時急かされて転ぶ停留所

島根県 毛利 幸

草原の風に時計が忘れられ(内モンゴルの旅 3句)

旅の宿梅干しの味がみしめる

草原の朝の空気をぐいと吸い

愛媛県 宮本 末子

ひとときの四季を臉に写真展

実が成ればうれし枇杷の木レモンの木

茄子焼けば七輪思う母思う

宇部市 中田 忠夫

紅一つ引けば魅力の出る女

見栄を張るつもりじゃないが派手を着る

その節はどうもと淑女から電話

宇部市 高山 清子

言い負けた悔しさ千切る庭の花

欲しいもの健康若さに金

一枚のメモが招いた身の破滅

唐津市 岩崎 實

原爆忌 家族揃うて黙とうす

青柿の落ちて長梅雨あけてゆく

夏の朝五時にトラック動き出し

千葉県 大川 晩翠

シドニーへ熱い視線のスイミング

本を買うセカンドハウス夢に見る

奈良県 江波 正純

大国に首たてにしかふれません

売り出しのチラシ片手に梯子する

高槻市 乙倉 武史

コスモスが休耕田で媚を売る

なるようになるさ気にせぬ他人事

高槻市 大崎 侑子

借りる時嘘も涙も大袈裟に

盆休み祖母に多忙の一週間

撰津市 望月 遊美

国際的にと掛け声ばかりニホン国

天皇制元号か国際暦か踏絵とす

八尾市 高橋 明子

七回忌時々夢に現れる

川辺にも秋風吹いて旅に出る

大阪市 櫛田 周作

淋しさってやっかいなものみんな飼う

認められるより一人のファンがいい

泉佐野市 大工 静子

安楽死のお地藏さんに二度詣り

スタレ越し気にそわぬ人黙っとく

倉敷市 森 本文子

師の訃報花火叩うよう上がる
炎天に野鳥へ手洗い足して置き

姫路市 北 条 てる代

ファンでもないが握手をして別れ
真実を告げて幸せ取逃がす

鳥取市 田 村 邦 昭

かくれんぼメガネが一つ見つからぬ
新風を吹き込んでみる古い殻

鳥取県 岡 嶋 金 子

無念なり一人娘が先に逝く
いきなりに玄関あけて顔と顔

鳥取県 竹 森 富久江

病気かな裏腹なことばかりする
七変化出来る命を生かしきる

松江市 松 浦 登志子

ばあちゃんにあわせて話す出雲弁
CTが出した答えに不満顔

香川県 瀧 井 勝

田舎から今年限りと米届く
読み書きの苦手な父の太い指

投句、原稿は所定の用紙にて締切日厳守をお願いいたします。

第31回 奈良県芸術祭参加 第72回 奈良県川柳大会

と き 10月29日(日) 12時開場

ところ 奈良県新公会堂 Tel 0742-27-2630
バス(市内循環他)大仏殿・春日大社前下車

参加費 1500円(昼食は各自お済ませ下さい)

欠席投句料 1000円(発表誌後日呈)

宿 題 「時 間」 阪 本 高 士 選
「影」 中 村 直 子 選
「待 っ」 杉 野 ま つ 子 選
「毯」 松 本 多 加 選
「底」 米 田 恭 昌 選
「ふたり」 吉 川 卓 選
「灯」 松 田 俊 彦 選

各題2句 締切り13時

欠席投句の方は10月14日までに下記へ
お送り下さい。

〒630-8261 奈良市北市中町71 杉野方
奈良番傘川柳会
Tel 0742-23-3128

主 催 奈良県川柳連盟
担 当 奈良番傘川柳会

第24回 寝屋川市民川柳大会

と き 平成12年11月3日(祝)正午開場
締切1時

ところ 寝屋川市立総合センター4F
(京阪寝屋川市駅下車、バス西口①乗場
より守口市駅行、③乗場より守口市駅
行、太間公園行、古川橋行)

兼 題 (各題2句 席題なし)

「結 ぶ」 江 口 度 選
「先 頭」 吉 村 一 風 選
「天 狗」 丹 波 三 千 子 選
「聞」 山 本 礫 選
「値打ち」 住 田 英 比 古 選
「無 理」 橘 高 薫 風 選

会 費 1000円(記念品・作品集)

投 句 11月1日(水)までに必着
(切手 400円同封のこと)

投句先 572-0063
寝屋川市春日町9の9
高 田 博 泉 内 川柳ねやがわ

編集後記に当たる「編集縦横」とは別に、月々頁の穴埋めに楽屋落ちの小文が掲載されている。興味ある項を転記する。

川柳横町 (筆者 不死鳥)

★路郎が新年号の編集に夢中になっていると三男のボーが横から、「お父さん」「ウム」「川柳雑誌付録あるのン」路郎グツと詰って「幼年クラブと違う違う」。

★水府は福助やグリコで磨いた腕で、番傘二十五周年記念事業を素晴らしく賑やかにやってのけた。艱難汝を壁にすである。

★路郎の悪戦苦闘ぶりを氣遣った森東魚「オイ、摺り切れるナ、摺り切れるなヨ、摺り切れちゃ駄目だぜ」と泣かんばかりに手を握る。★川柳職業人の意義を解さない柳人の多いのに驚く。川柳を解さない社会人を笑えない。★珍竹林が雅号を氣にしている。それで雅号のことを少し書く。

きん坊は錦浪で死んだ。鯛坊は周魚になったが、飴ン坊は京魚になりきれずに飴ン坊で

死んだ。雅号は符号であるから、何んでもいいという理論はなりたない。改号は早い方がいい。

★番傘二十五周年の大会に、道のためとはいながら、公会堂の入口で所持品の受付をしたり、エレヴェーターへの案内をしたりしていた紋付袴氏の労を搞きたい。

人生五十涙ぐましき事多し 不死鳥

★豆秋が風のようにやって来て「もうお目にかかれぬかも知れぬので暇乞いに来ました」という。訳を聞けば、友だちに腹を喰べさせ、今晚の十二時までが危ぶないと聞きましてからと言う。それからもう一年余りになる。

★路郎が南海高島屋の中を迂路々々しているうちにバリカンを買わされた。別に酔っていた訳ではなく、あのチャキ／＼という音を想像して童心が悠然と湧いて来たんだそう。

そのバリカンでアートとボーを丸刈にした機見女、腕が鳴ると見えて、東魚先生を丸刈にしたいと、その来訪を待機している。川柳家で丸刈志望者は、今のうちに川柳無料丸刈

所まで申し込みたい。

★大連の月南夫人が逝く、仁川府の可宵夫人が亡くなる。「南無女房乳をのませに化けて来い」の古句を舌の上に乗せしめじみ味う。

★川柳漫画を論難している人があるかと思えば、川柳と商品の広告とを結びつけて得意になっている人もある。どちらが川柳を冒瀆するものか分かつたもんじやない。

★葎乃が「選をしに行きなほるか」と聞くから、何んのことかと思つたら選挙のことだった。なるほど選に違いない。第四区は十人立っているから行けば九人没、行かねば全没だ。

「近作柳樽」の選と比率に大差がない。「棄てるな一票」の宣伝もいいが、もつと大選挙区にしないと棄権する方が公平な場合がある。

★裏日本と言う言葉には親しみよりも哀愁を感じる。北陸と言う言葉には強さを感じる。

★すべての物が落ちる力を失うまでは防空は不可能だ。

★電車の中には生活がない。汽車の中には生活がある。

★煙草好きの路郎が銀紙を蒐め出した。銀紙を蒐めて飛行機を献納するのかと思つたら、川柳会館を建てるんだそだ。その言い草がいい。飛行機なら俺が言い出さずとも出来るが、川柳会館はそっはいかぬと。

平成十二年度 路 郎 賞



岡山県

大石 あすなろ

四面楚歌壁にもあつた非常口

まだ女絵になりたくて拗ねてみる

いつからかわたしの真似をしない影

朱の絵の具女きれいに過去うめる

ストレスの音で折れてるシャープペン

あの時を静止画像にしてみたい

虚と実と混ぜて流れは渦になる

策士家にもなれずこつこつ石をつむ

驚き!!喜び!!夢のような、そしてこの賞の

重さ、感情が交錯いたしました。二千年とい

う節目の年に、こんな大きな賞が戴けるなん

で、感無量です。いつも温かく指導して下さ

る先生、よき先輩、よき柳友に恵まれた賜と、感謝しております。これからも人間陶冶の詩として、精神の向上に、心がけたいと願っております。有り難うございました。

柳 歴

昭和六十二年 大原川柳社入会

昭和六十三年 川柳塔社誌友

平成 八年 川柳塔社同人

準優秀作一席

枚方市 海老池

洋

両の手で戴く重い紙ひとつ

足音と励まし合うた影法師

その辺でおけば笑ってすむ話

それにしても軽いと思う玉手箱

自分史のところどころに立ち泳ぎ

字足らずと字余りまるで僕と妻

春夏秋冬、雲は詩人で雲は画家

襟首をコンピュータに掴まれる

準優秀作二席

芦屋市 黒田能子

大勢の中でボツンと淋しい日

手のひらの砂さらさらと忘れ去る

泳ぎ疲れてマンボウは空に浮く

歯ブラシの二本の暮らし静かなり

栗むきながら語り部となるふたり

顔洗う朝のいのちを洗うよう

いい笑顔美人でなくていいのです

番犬もわたしも今日は忙しい

平成十二年度 川柳塔賞



横浜市

田中 笑子

嫁来たら隠居どころか動かされ

春の陽に追いかけられる万歩計

タダイマと同時に妻が喋りだす

故郷の風は優しく急かさない

おすそわけして故郷の自慢する

能書きを読んだら葉怖くなり

指切りの温み残して子は寢息

頬つぺたを紙風船がふくらませ

昨年、今年と川柳塔賞が横浜あおば川柳会
に輝き、驚きと感激で胸が熱くなりました。

先生のユーモア溢れる優しいご指導で、よち
よち歩きながら、多読多作をモットーに作句
して参りました。でも、なかなか思うように
ならず、そのような時、先生始め教室の皆様
に助けられて参りました。その結果の賞なの
で、最高の喜びです。有り難うございました。

柳 歴

平成八年十二月 横浜あおば川柳会入会
平成九年 六月 川柳塔誌友

準優秀作一席

出雲市 佐藤 治代

継ぎ足しの命は恋も酒も好き
おかしくて悲しくなって又笑う
ほしい物ないと言うのも淋しいね
辿りつく先は見えないから生きる
笑う日も泣く日も支え合う両手
演歌さく耳から涙もろくなり
命ある限りを走る一行詩
淋しさも笑いも分けて日向ぼこ

準優秀作二席

和歌山市 吉村 さち子

八月になると平和を轟かす
日を追っていつか悲しみ食べつくす
嘘言わぬ花と明日の話する
話し中ばかり元気でいるらしい
当然な事が意外と喜ばれ
ちよばちよばの友だから気がおけぬ
仲よしを通すに言わぬ事もある
寝たきりにさせぬ鬼にもなってみる

受賞者の皆さんおめでと

橘 高 薫 風

完璧主義の路郎先生の時代、取巻きはピリ
ピリしていた。今年の二賞選考の手順に杜撰
な処があり、二次選考諸氏に迷惑をお掛け
した。愛染帖、茴香の花の各賞が和歌山で占
められ、更に四賞までも偏ることになったの
は、鳥取県勢に代ったものであろう。横浜の
あおば川柳会の川柳塔賞連続受賞と共に心か
らお祝い申し上げる。

大石あすなろさんは、永年地味な活動を続
け、地域の川柳育成に尽くされた小林妻子会
長とそのお仲間のたまもので、黒田能子さん
は爽やかな人柄から成る句柄に清楚な個性が
感じられた故であらう。新家完司氏は昨年に
続いて四位であった。

今年の選考は、河内天笑、宮口笛生、板尾
岳人、西出楓楽、宮西弥生諸氏が二賞それぞ
れ五十名を選出、私が二十名にしばらく二次選
考をお願いした。結果は別表の通りで、お一
人の応募者に自選のルールの勘違いがあった。
この結果は現在の川柳塔仲間の全体像の水
準と言える。伝統、革新の穏健な推移である。
受賞者の皆さん、ほんとうにおめでと。

二賞選考経緯

西 出 楓 楽

七月一日の常任理事会で、紫香、柳宏子相
談役の出席を得て、二賞選考選者の選出から
準備を開始しました。慎重に審議の結果、二
次選考は各々の地域の事情を考慮の上、十四
名を再任し、十一名の新任を決定、本社から
は主幹と理事長の計二十七名としました。

七月中旬までに各選者に電話で依頼しまし
たが、月原宵明氏が体調不良のため、後日辞
退申し出があり残念でした。

応募締切後の八月十七日、第一次選考六名
が本社事務所に集まり、慎重に選り抜いた約
五十編のうちから、主幹が特に念を入れて二
十編を選出しました。

二次選の投票方法は、昨年同様で名前を伏
せ、①②の番号を打ってコピーし、投票用
ハガキ同封の上、各選者に即日送付を終えま
した。

返送されてきたハガキを事務所で二十五、
二十六日に整理、受賞者の句に規定違反がな
いかを、バックナンバーを繰って調べた上で
受賞者が確定しました。

なお川柳塔賞候補中失格とあるのは、間違
つて人の句が応募してあったためです。事前

に見抜けなかったのは大きな反省点です。来
年度からは、選ばれた二十編すべてをチェッ
クした上で第二次選考宛送るようにします。

二賞選考委員

第一次選考 (六名)

橘高薫風 河内天笑 宮口笛生 板尾岳人

西出楓楽 宮西弥生

第二次選考 (二十七名)

本社関係 橘高薫風 河内天笑

地方関係 (東北) 波多野五楽庵

(関東) 菱田満秋 (北陸) 舟渡杏花

(京都) 都倉求芽 (奈良) 米田恭昌

(和歌山) 牛尾緑良 木本朱夏

(大阪) 川島諷云児 田中正坊

玉置重人 高田博泉

(兵庫) 黒川紫香 吐田公一 中塚礎石

(岡山) 小林妻子

(広島) 小島蘭幸

(鳥取) 小林由多香 森田熊生 林 瑞枝

野口節子

(島根) 恒松町紅 尼れいじ

(四国) 木村あきら

(九州) 仁部四郎 永田俊子

二賞選考規定（要約）

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から8句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から8句
毎年度9月号から翌年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月15日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・選考委員の六名で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係
東北 関東 北陸 京都 奈良 和歌山 大阪
兵庫 岡山 広島 鳥取 島根 四国 九州
地方関係の選者は、年度毎に交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選考委員は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選考委員が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。
- （備考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

路 郎 賞 得 点 表 (応募数245名)

1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点

いかにして
表の数字
は
得点
に
な
る

選 者	作 家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橘高 薫風		2		4					3						5						1
河内 天笑	2			3										1				5			4
波多野五楽庵											1	4	5					2			3
菱田 満秋						5							1	3			2		4		
舟渡 杏花				3	5				2				1						4		
都倉 求芽	4	3								2							1				5
米田 恭昌				3					4	2					5				1		
牛尾 緑良		4							1	2			3			5					
木本 朱夏		1							2			4	5			3					
川島諷云児									5				4		3				2		1
田中 正坊				2					5				3				4				1
玉置 重人						5			1					3				4	2		
高田 博泉						3	2							5			4			1	
黒川 紫香						2			5					1	4						3
吐田 公一								1	3					5					4		2
中塚 礎石					1	2							3	5					4		
小林 妻子					4	2			3	1									5		
小島 蘭幸			1										4		2	5	3				
小林由多香	1											4				5			2		3
森田 熊生				3	4	2								1					5		
林 瑞枝									1			2	3				4		5		
野口 節子										1				5			4			3	2
恒松 町紅									5	3		2						1	4		
尼 れいじ									2					1			4		5		3
木村あきら						1				3		4			5				2		
仁部 四郎					3				2			1			4				5		
永田 俊子														1	2		4		3		5
		7	10	4	23	29	4	1	④④	14	1	21	32	31	30	18	30	12	⑤⑦	4	③③
		岩崎みさえ	楠見 章子	江口 度	徳山みつこ	清水 潮華	高田美代子	長谷川 淳	海老池 洋	西原 艶子	仁部 四郎	桜井 千秀	新家 完司	福本 英子	藤解 静風	加島 由一	倉益 一揺	谷口 義	大石あすなろ	土橋 螢	黒田 能子

川 柳 塔 賞 得 点 表 (応募数139名)

1 位 = 5 点 2 位 = 4 点 3 位 = 3 点 4 位 = 2 点 5 位 = 1 点

選 者	作 家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橋高	薫風		3					2									1	4			5
河内	天笑	3	4										5			2				1	
波多野	五楽庵		1	5							2					3		4			
菱田	満秋					1	3						2	5					4		
舟渡	杏花	4					3	5												2	1
都倉	求芽	5							4		2						1				3
米田	恭昌				5			3			2		1				4				
牛尾	緑良									4			2					1		3	5
木本	朱夏		5				1	4								3				2	
川島	諷云児				1			4									5	3			2
田中	正坊			1		3			2				5						4		
玉置	重人	5	1												2			4		3	
高田	博泉	3						1						4		5			2		
黒川	紫香				3	4							5	2							1
吐田	公一							1					5	3			4			2	
中塚	礎石							5					3				2	1			4
小林	妻子					4		5				3							1		2
小島	蘭幸		5											1		2	4				3
小林	由多香													4	5	3				2	1
森田	熊生				3			1					4	5							2
林	瑞枝	2			1			3						5			4				
野口	節子	5	1		4								2	3							
恒松	町紅	5								2	3			4							1
尼	れいじ	1			5			4					2				3				
木村	あきら				3						4			5			1				2
仁部	四郎	2					5						1	3						4	
永田	俊子		3		5			4	1								2				
		35	23	6	30	12	12	④②	7	6	13	3	③⑦	④④	7	18	31	17	11	19	32
	中井 アキ	大森 純子	山之内 八重美	失 格	澤田 和重	広瀬 房江	佐藤 治代	渡辺 富子	近守 功	湊 修水	川口 信子	吉村 さち子	田中 笑子	不破 仁緑	大西 文次	亀井 円女	中居 善信	北沢 街湖	猪森 スミエ	尾崎 黄紅	

受賞作品

和歌山市 木本 朱 夏



木本 朱 夏

能面の裏に三つの寒い穴
嬌声が過ぎて広場のさむい闇
一心に包丁を研ぐ花の昼
マツチ棒の記憶のなかの深緑
灰になるまでの時間を歌う骨

評 木本朱夏さんの句を見て驚いた。私が川柳を知って四十七年、これ程凄く川柳に迷った事がない。

能面の裏に三つの寒い穴

水道橋でお能を舞った事もある私が初めて悟った面（おもて）の三つの穴の寒さ、面をつけてまさに橋掛りへ出ようとする時の寒さ、を思い出す。面に反響する陰にこもった語声、ある時は恋に破れ、ある時は怨霊になる心、すべてが部分しか見えない三つの穴に集約されている。その総てを言い表わして余りあるこの句は一生に一度生まれるのであろうか、愛染帖を選させていただいている選者冥利につぎる句に逢う事が出来た。
毎月、身を削る思いで作品と対峙しているが、この句に逢えた事は川柳の広さを知る事が出来た。
(波多野五楽庵)

準賞作品

富田林市 池 森 子

掃き出しています名もなきわが鱗
ワンチャンス逃がした接点から秋に
ジエンドとても小さなのだ仏
いのちより重たい彩のクレヨン画
遠巻きにじっと見ているわが檻

大和高田市 鍛 原 千 里

冬は嫌い女ひとり寒すぎる
大胆になってみたらと春の風
まだ女許容範囲の赤い爪

和歌山市 古 久 保 和 子

シャボン玉はじけ私の現在地
バス停に無口な冬が立ったまま
寝袋のかたちで繭になるおとこ

この賞に限り平成十二年一月から八月までの提出句です。

古来より日本には言霊という美しい言葉があります。

わずかに十七音字に自分の想いや祈りをどのように織り込んでゆくか、川柳の楽しみでもあり苦しみでもありましよう。伝統川柳、詩性川柳、前衛川柳、多々ありますが言葉の属性や言霊を大切に、自分の想いに殉じた川柳を目指したいと思います。ありがとうございます。

柳 歴

昭和五十七年 三幸川柳教室入会

昭和六十七年 川柳塔社同人

平成五年度 茴香の花賞受賞

平成 十年 第六回かもしか風炎賞

受賞

受賞作品

和歌山市 福井桂香



福井桂香

人間の子供が育たなくなつた
シャボン玉嘘をつけないから壊れ
魔女ひとり棲むかもしれないぬ壺を抱く
美しい紙で包もう棘の花
無防備なおんなに似合う夕桜

評 今年の茴香の花賞は、和歌山の福井桂香さんに輝きました。作品の一つひとつも克明に表現され、作句の姿勢には日常の精進がいつまでも余韻となつて残ります。迷いもなく受賞作品としていただきました。黒田能子さんは中でも群を抜く力作が続き、私自身その作品に封じ込められた思いの数々が今でも忘れられません。
矢内寿恵子さん、太田扶美代さん、鍛原千里さんの作品には、沢山、沢山の勇氣と力をいただきました。ここで改めて受賞者の皆様にお礼を申し上げます。
(宮西 弥生)

夢にみていた茴香の花賞を、今世紀最後の年という節目に、思いがけなく受賞。誌友の頃に賞を戴いてより、久々の受賞でもあり喜びも一入でございます。一重に諸先生方や柳友の励ましの賜と感謝しています。来世紀へ向かって驕ることなく、作句に精進して参ります。ありがとうございました。

準賞作品

芦屋市 黒田能子

流されたところにあつた川が好き
近頃はゆっくり靴がへつて行く
ちよつと背を押して下さげ踏み出せる
スリリング手のひらにのせ豆腐切る
平穩に生命線が続いてる

岡山県 矢内寿恵子
辞書を引く流されまいとして流れ
ひらがなの姿のままで老いたしと

藤井寺市 太田扶美代
定年へ失くした時間返される
ふつつかな妻の形で生きている

大和高田市 鍛原千里
吸うて吐くただそれだけの世に疲れ
雑念を捨てたら見える針の穴

柳歴
一九八〇年 三幸川柳教室入会
一九八三年 川柳塔誌友
一九八四年 川柳塔賞準一席
一九八五年 川柳塔同人
一九九四年 和歌山文芸祭り知事賞
一九九六年 川柳句集『花の館』出版

受 賞 作 品

和歌山市 川 上 大 輪

訪ねれば風は知ってるかもしれない

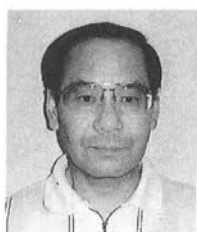
評 ふと消えた一枚の割り符、ひよつとして風が行方を知っているかも知れないと僅かな音にも耳をすましてしまふ、切なさが伝わって参ります。

準賞のあずきさんの句、優しさが嬉しいし表現に無理がない。俊路さんの句、人間に生まれた事にうなずける。

(高田美代子)

大輪さんの今の心境を風に託したすばらしい実感句に深い感銘を受けました。一路集の天、三十六句の内大輪さんが(六句)と健闘ぶりでした。準賞のあずきさんの句、花のお好きな作者の優しさが溢れています。俊路さんの句、ご自分の思いをスカッと表現されました。拍手を贈ります。

(西口いわゑ)



川 上 大 輪

本当は飛び上がるほど嬉しいのに、まだ悲しみが先走ります。仏壇に向かって受賞の報告をすることほど情けないことはありません。でも富湖と歩んだ川柳の道です。「お父さんよかったね」ときつと言ってくれていると思います。これからも富湖の分まで川柳を楽しんで行きたいと思っています。ありがとうございます。

準 賞 作 品

豊中市 吉 田 あずき

花の名を尋ねた日からお友達

鳥取県 上 田 俊 路

尊厳死つまり最後のプライドだ

候 補 作 品

弘前市 高 瀬 霜 石

寡黙な人は大きな耳を持っている

唐津市 井 上 勝 視

高々と捧げてさがる感謝状

大阪府 靱 山 隆 盛

元気な字ドナーカードに書き入れる

今治市 塩 路 よしみ

あたたかみ残して席をゆずられる

柳 歴

昭和四十五年 川柳を始める

昭和四十七年 川柳塔社同人

昭和六十三年頃 川柳塔社を一時退会

平成 八年 川柳塔社に復帰同人

現在 川柳塔わかやま吟社はまゆう川柳会に所属

受賞作品

出雲市 原 章 峰

かさかさに乾いて宇宙人になる

評 人間は多面性を持っている。その面の使い分けが難しいところであるが、今の自分を否定し、完全に風化させてしまうことによって全く別の自分を創り上げていくという楽しい発想にエールを贈りたい。

どの作品にも多彩な人間模様が織り込まれており、楽しませて戴きました。

(川上 大輪)

受賞句は感性の句であり、準賞句は情の句です。人間がうるおいを失くしてしまつたら、頭でっかちの宇宙人になるのでしょうか。

対比して、準賞句は母子の情愛たつぷり。自分におきかえて、羨ましく思う句です。

以下候補作品、いずれもうなずかされる句ばかりです。

(山本希久子)



原 章 峰

各地柳壇賞に選ばれ、驚いたり、感激したり。推せん頂きました先輩に、厚く御礼申し上げます。日本で水が一番うまいのは、神戸六甲山の水源と聞いています。昔がたくさんあるからだそうです。かさかさに乾いていく世の中、せめてうるおいのある、川柳の森をめざして、頑張りたいと思います。今後共、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

準賞作品

倉吉市 野 口 節 子

下駄履きで行けるところに母がいる

候補作品

はじまりは街でもらった花の種 亀岡 哲子

包丁のリズムどうやら晴らしい 鈴江 純子

好きにしていいたいと言うからやりにくい 村上ミツ子

見ておれぬものに男の糸と針 永廣昇太郎

じっくりと檻の中から人を見る 谷口 次男

柳 歴

昭和二十六年 島根療養所葦川柳会

入会

昭和四十五年 中断

昭和六十三年 いずも川柳会復帰

平成 七年 川柳塔同人

愛染帖

波多野五楽庵選

八尾市 村上 剛治
 浄土とはこんなところか露天風呂
 夕立のふくろだたきに会いました
 和歌山市 川上 大輪
 舌下錠トロリ私を欺くか
 デスマスク奇麗だったと言われても
 松原市 小池しげお
 落伍者になるまいとする米の粒
 花の名を呼びずてにして水をやる
 弘前市 斉藤 島
 夢売りの帽子を好きな赤蜻蛉
 綾取りの何時まで続く変声期
 和歌山市 西山 幸
 鏡の中も私も同じ瑕がある
 濡れ衣が乾く日までさむい背よ
 西宮市 奥田みつ子
 恨むまい恨むまいとて鏡拭く
 米子市 林 瑞枝
 生家まだすつくと残る深い井戸

砂川市 大橋 政良
 助走路でころがる帽子追っ掛ける
 鳥取県 土橋はるお
 長雨のしずくが置いていった鬱
 嘘を盛る器人間かもしれぬ
 寝屋川市 堀江 光子
 なんの理由もないが岬に立っている
 島根県 伊藤 寿美
 棟梁はあの泣き虫に違いない
 島根県 伊藤 寿美
 恩人にうっかり足を向けて寝た
 米子市 政岡日枝子
 この世からますます遠くなる耳よ
 海南市 三宅 保州
 悪い人でない瞬間湯沸器
 弘前市 高瀬 霜石
 芯からの疲れはちよつと後にくる
 豊中市 田中 正坊
 自分から自分へ手紙書いている
 鳥取県 林 露枝
 黙っていたことがよいのか悪いのか
 堺市 桜沢 千世
 石になる前に懺悔をしておこう
 八尾市 村上ミツ子
 とときはしやしやりでてくる裏の顔
 富田林市 池 森子
 田舎には絵本の海がまだつづく
 香川県 木村あきら
 二枚舌後一枚が欲しくなり
 高知県 桑名 孝雄
 なんなりと申せ覚悟は出来ている

大和高田市 鍛原 千里
 コスモスの海で溺れる男たち
 和歌山市 木本 朱夏
 カラフルな首枷はめけている戦士
 和歌山市 福本 英子
 焦点がぼけて争いにはならぬ
 尼崎市 春城武庫坊
 右脳の錆を落として秋を待つ
 吹田市 山本希久子
 真つ先に省かれている足の裏
 和歌山市 吉村さち子
 柔らく包んだ小言効いてくる
 池田市 藤井 計光
 底辺に生きる男と馬が合う
 岡山県 大石あすなろ
 湿っぽくなった火種を吹いている
 弘前市 高橋 岳水
 流れ星振り向く事が多くなる
 大阪府 澤田 和重
 あれ以来くちにテープを貼っている
 唐津市 宗 水笑
 挨拶をされてこの町みんな好き
 愛媛県 黒田 茂代
 どん欲な袋に愛が溜まらない
 堺市 和田つづや
 大夕日明日はトマトが熟れそうだ
 宇部市 平田 実男
 アルバムの剥がしたところは胸の傷
 横浜市 菱田 満秋
 大伽藍お布施の好きな仏さま

傍観の筈が渦中にひき込まれ
横浜市 保田 絹子

人前で泣けぬ女になりそう
藤井寺市 高田美代子

ドアの音いまは触らぬことにする
弘前市 福士 慕情

直前の錯覚だった黒い猫
富田林市 中井 アキ

自画像は特攻隊の成れの果て
鳥取県 土橋 螢

ひび割れの下駄を預けにゆく家裁
和歌山県 中後 清史

消しゴムでほろほろ黒い傷をとる
京都市 都倉 求芽

すっかり喋り寂しくなった影法師
鳥取市 植田 一京

鳩時計律儀に大暑つとめあげ
和歌山市 桜井 千秀

お腹まず下痢して秋が来たという
弘前市 蒔苗 果林

風化しそうな恩をしっかり抱えている
八尾市 高橋 夕花

ひまわりの造花西日に向きながら
八尾市 宮崎シマ子

なるようになると笑っている夕日
箕面市 出口セツ子

引き金の指が狂つたらどつしよ
岡山県 山本 玉恵

今更と思つ今ならとも想い
西宮市 牧渕富喜子

冷や飯を食つて世間が少し見え
鳥取県 西沖 彰雄

それなりに美談持つてる八十歳
高槻市 江原 秀夫

火葬場で焼くのは惜しい知恵袋
倉敷市 家守 政子

凡人の靴だ斜めに減つてゆく
堺市 宮本かりん

ロック聴く耳が歪んでしまひそつ
和歌山市 楠見 章子

妻の掘る穴へ時には落ちてやる
寝屋川市 江口 度

罪ひとつふたつはだいて人間味
岡山県 矢内寿恵子

メールボックスに秋の子定が迷い込む
藤井寺市 太田扶美代

風運ぶ奈良町からの童唄
大阪府 川原 章久

あなたには見せぬこころの雨模様
寝屋川市 平松かすみ

手の届く位置でチャンス之又逃す
富田林市 片岡智恵子

悲しみを書けば悲しみますと消え
大阪市 神夏磯典子

体型も脳波も崩れ医者通ひ
和歌山市 玉置 当代

貫禄が中年肥りかからない
今治市 月原 宵明

子が巣立ちやつと二人の水入らず
羽曳野市 永田 章司

廃船の私語を悲しく聞く錨
箕面市 椎江 清芳

九段坂母の戦後は遠くなる
日立市 加藤 権悟

潮時をさぐる無言の睨みあい
寝屋川市 森 茜

無駄骨を折ると頼りにされている
高槻市 乙倉 武史

生き下手も死に下手も無く傘弄くる
大阪市 稲本 凡子

妻と娘のバリアにいつも弾かれる
横浜市 鈴江 純子

不器用が意外に受けたクラス会
今治市 野村 清美

母の書く手紙に誤字が多くなり
寝屋川市 岸野あやめ

抱いてみて石の重さよ温かさ
和歌山市 古久保和子

気が抜けた別ればなしを聞くビール
大阪府 榎山 隆盛

CMが邪魔になるほど良いドラマ
熊本県 高野 宵草

冷房が効いたテレビの甲子園
和泉市 横山 捷也

さよならの握手も同じ温かさ
倉吉市 牧野 芳光

トラブルの中に必ず俺がいる
鳥取市 春木圭一郎

童心に還れと柿の実が熟れる
愛知県 早川 盛夫

愛媛県 中居 善信
謎ひとつ解けぬ男で鈍感で

鳥取市 徳田ひろこ
ジグソーパズルまだ動いてる風の紋

尼崎市 春城 年代
満でいうか数えて言うかまた迷う

高槻市 傍島 克治
流行を追って息切れひどくなる

西宮市 西口いわゑ
流れ星心配ごとが一つある

鳥取市 近藤 秋星
生涯青春 モットーにして生きている

横浜市 近藤 道子
上向いて歩こういやなこと忘れ

羽曳野市 吉川 寿美
盃の中で仮説を組み立てる

鳥取市 録沢 風花
立秋の声で人間取り戻す

米子市 鷺見 正子
音沙汰がなくて平和な核家族

鳥取市 岸本 宏章
親でさえ覗けぬ部屋が恐ろしい

池田市 栗田 久子
他愛ない話題がつづく立ち話

鳥取県 橋本多哥由
一徹を通してたまに損をする

米子市 青戸 田鶴
おとろえをかくしはしない夏の花

松原市 玉置 重人
汗しとど宇治金時を食べに行く

青森市 漆戸凡々子
ライバルにせめて長生きして勝とう

八尾市 生嶋ますみ
自己主張老いの身勝手崩さない

和歌山市 榎原 公子
黒髪に拘泥りがあり秋の風

堺市 志田 千代
柿落ちて待つ人のない里帰り

倉敷市 井上 富子
節約を楽しんでいるリサイクル

弘前市 岡本 花匠
三猿を真似て失う人間味

香芝市 大内 朝子
再会の火種をあおる曼珠沙華

黒石市 相馬 一花
好きだから好きと言えないふくらはぎ

唐津市 井上 勝視
晩酌に妻の欠伸が許せない

米子市 光井 玲子
遠景となつてしまった故郷の寺

鳥取県 西原 艶子
氾濫のピンクに眩暈してしまふ

藤井寺市 中島 志洋
OB会未だ肩書が生きていた

岡山県 福原 悦子
寄り添って軽い寝息という安堵

和歌山県 青枝 鉄治
核ボタン一つで変える世界地図

箕面市 岩津ようじ
わが願い由緒正しい安楽死

羽曳野市 徳山みつこ
有頂天まずい演技をしてしまふ

美祿市 安平次弘道
二次会で刺された釘が疼き出し

倉吉市 山中 康子
暑いから同じボタンですすむ日課

東京都 播本 充子
三人の息子と八月の平和

唐津市 久保 正剣
喜寿にして八苦の呪縛まだ解けず

堺市 矢倉 五月
やっかいな記憶に若い頃の事

東大阪市 北村 賢子
自分らしく生きるチャンスもなく老いる

鳥取県 上田 俊路
バツ一の切り口がまだ乾かない

大阪市 本間満津子
迎えに来たら皆に握手して行こう

出雲市 岡 あきら
朝顔の明日の約束なら出来る

札幌市 三浦 強一
ただ酒の悔いを詰め込むゲンボール

横浜市 芦田 鈴美
赴任地にときどきネジを巻きにくる

唐津市 山門 幸夫
夜来香ビルマの月を連れて来る

米子市 門脇 晶子
車座で遊んだ鳩も老いてきた

出雲市 園山多賀子
向日葵もプラス志向で陽に背く

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 9月号から

清水潮華

永いながい一日でした一人の日

野瀬昌子

家族に囲まれて、それなりに賑やかに暮している、時には一人になりたいものです。そんな思いの中で、ある日一人になると何となく落ち着きません。実感しています。

錆びてくる脳へレモンの丸かじり

山宮愛恵

脳の錆が取れるものなら、何個でもレモンを丸かじりたいですね。この句で頭でなく、胸のつかえが下りました。少し錆びている脳も愛しい身内です。

入り口があるから出口きつとある

原賢

確信を持ち、前向きに対処する姿勢を感じました。生きている限りは、様々な入り口へ勇気を出して進みたいものです。弱気な私を励まして頂きました。

別れようと思わないけど喧嘩する

佐藤治代

喧嘩をしても、別れたいとお互いに思わないのが、大方のご夫婦だと思えます。明るいご家庭、大切になさって下さい。不器用でいつも本音が出てしまう

穴吹尚士

私は、冗談にまぎれて本音を言う狡い癖を持っていますので、作者は不器用ではなく、大変勇気の有る方ではないでしょうか。その時もベアの切符で乗るつもり

福岡博利

その時はどういう時か分かりませんが、年を重ねると一人は淋しいものです。ベアの切符は喜びを倍にしてくれます。

気分次第で遺書を時々書きかえる

坂東和代

同感です。まだ遺書は書いていませんが、頭の中では、何かあるごとに消したり、継ぎ足したりして、鬱憤を晴らしています。

ホツとする椅子がきまつた場所にある

猪森スミエ

毎日の通勤で、私も定位置で電車に乗り、何時もの座席がふさがっていると、がっかりします。ほつとさせてくれる温かい椅子を、これからも探します。

何気ない会話の中で拾う知恵

塩路よしみ

この句のようなことを、年の功で何度か体験しています。何時もアンテナをしっかりと張っておられる姿勢に脱帽です。

妻や子にまだ見せてない背なの傷

中居善信

七人どころか、十人も二十人もものライバルと対峙しているお父さん、ご苦労さまです。培った能力が認められない社会、IT革命等々、苦勞の種は山積みです。

健診に備え体調を整える

長島亜希子

健診は、正直言って嫌で恐いものです。

急に摂生して晩酌を止めたり、ジョギングを再開したり、と本人は真剣です。

同居して若いリズムに負けている

三浦千津子

その通りです。同居を手放しで喜んではいられません。

たまには、負けた振りを楽しんだら如何でしょうか。お友達を沢山作って下さい。

一日をぼんやり過す充電日

榎本舞夢

錆びた脳にも充電出来るでしょうか。私もぼんやり過ごし何やら満足しています。

尚香のむ

西出楓楽選

塩の効いた顔で旅から子が帰る
想い出し笑いでポストから帰る
包丁を研いで包丁らしくなり

バーゲンで買うてバザーで処分する

スーパのカゴからドラマ見えてくる

本棚に並んだほどの知恵は無く

洗濯機回して今日のゴング鳴る

思考回路とまっています蝉しぐれ

眉間より目尻にしわをよせ生きる

押入れについつい溜めるとりあえず

一日を無駄にはしない蟬時雨

その耳に届くは海の子守唄

みどり色いつでも視野にある安堵

満身の力で咲いて狂い咲き

妬心などさらさら持たぬミニトマト

おかしいと言われどエロはホツとする

気がかりな日に背後から鳴く鳥

さゆうりの夢にかはちやいいことありそんな

人形の一つがノラの顔になる

島根県 伊藤 寿美

米子市 林 瑞枝

川崎市 和泉あかり

和歌山市 古久保和子

和歌山市 楠見 章子

八尾市 生嶋ますみ

弘前市 宮崎ヒサ子

寝屋川市 籠島 恵子

東大阪市 北村 賢子

和歌山市 福本 英子

箕面市 出口セツ子

米子市 政岡日枝子

鳥取県 西原 艶子

藤井寺市 太田扶美代

出雲市 園山多賀子

米子市 鷺見 正子

寝屋川市 森 茜

島根県 さえきやえ

和歌山市 西山 幸

和歌山市 西山 幸

悪人が美人でドラマおもしろい
自画自讃ベンが重たい時もあり

ステッチのわたくし色が効いている
つつましく生きて何もう変らない

三Bに力をこめて書く本音

ひとり居て笹の葉擦れが気にかかる

妻も母も脱ぎ捨てながら花ごよみ

病院の窓それぞれにいのちの賦

自己主張 大きく揺れるイヤリング

縫い上げた浴衣が急かす太鼓の音

手ひねりの花瓶 造花を受け入れる

あなたには笑顔に見える立ち泳ぎ

石ころの山登らばや花浄土

七夕祭 恋は序曲のままがよい

五十円ぶんのやさしさかもめいる

来世もこの人リザーブしておこう

据え膳の旅より家の茄子胡瓜

煽てにも乗らぬ弱虫棲まわせる

起承転結いまのあたり余命表

スランプの時だ休養しておこう

老いひとり住んで姿見鏡買う

旅遍路こころのシワを伸ばします

チャンスだと振るラケットは空を切る

暑いねと言うのも暑い夏の天

天秤にかけているよな思案顔

あいまい語まぜ断りの回り道

西宮市 西口いわゑ

伊丹市 樫谷 郁子

東京都 播本 充子

大和高田市 鍛原 千里

大阪市 神夏磯典子

横濱市 保田 絹子

富田林市 池 森子

西宮市 奥田みつ子

和歌山市 玉置 当代

横濱市 田中 笑子

米子市 小塩智加恵

和歌山市 福井 桂香

西宮市 牧淵富喜子

大阪市 稲本 凡子

和歌山市 木本 朱夏

横濱市 山下 省子

倉敷市 撰 喜子

鳥取県 岩崎みさ江

吹田市 山本希久子

今治市 野村 清美

寝屋川市 岸野あやめ

横濱市 川島 良子

横濱市 長島亜希子

和歌山市 上地登美代

和歌山市 桜井 千秀

富田林市 片岡智恵子

癌と言うニキビが命脅かす

片足で立つて体力たしかめる

掘っても掘っても正解には逢えぬ

捨てにきて拾って戻る藻の噂

生きざまが死にぞまふつと立ち止まる

あらわには出さずよかつた息をのむ

薬指 絆しつかり結びます

立秋に疲れた帽子立ちなおる

木杓子が恋しがってる自在鉤

粧うた嘘へストレス溜りだす

いい明日になりそう星が降りしきる

空白のページの裏にある悲涙

心地よい汗で踊りの輪を抜ける

落ちつかぬところに熱いお茶を飲む

許す気はあるがきつかけ見失う

残照に笑顔の種を播いておく

新聞の文字がだんだん小さくなる

回りには淑女ばっかりいる疲れ

ふとこらにいつまで亡母を抱くつもり

花言葉覚えて少女から脱皮

近づけば野菜の花のような人

乳母車エレベーターであやされる

小さな嘘オーデコロンで間に合わせる

よそ行きも普段もずっと同じ顔

病むわれに廊下の言葉皆優し

美しい文字 美しい人だろう

和歌山市 山根めぐみ

米子市 青戸 田鶴

富田林市 中井 アキ

松江市 川本 畔

愛媛県 黒田 茂代

倉吉市 山中 康子

大阪市 鈴木トヨ子

米子市 白根 ふみ

今治市 塩路よしみ

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 田中 みね

和歌山市 吉村さち子

大阪市 津守 柳伸

鳥取県 田村きみ子

池田市 栗田 久子

倉吉市 野口 節子

富田林市 藤田 泰子

鳥取県 石谷美恵子

西宮市 門谷たず子

羽曳野市 吉川 寿美

岡山市 大森 純子

横浜市 清水 潮華

富山市 舟渡 杏花

八尾市 村上ミツ子

熊本県 岩切 康子

寝屋川市 坂上 高栄

断れば語調かわって電話切れ

星空に亡母を見つけて話する

ユーモアに欠けた女のマイペース

老骨をいたぶる風の介護法

夕焼けの真つ赤をあすへ輸血する

ぶどうひと房 話のきりがまだつかぬ

青空へ飛ぶシヤボン玉手をつなぎ

そこまで書くな惨い事件をこまごまと

言い訳は自己中愛のぬけ殻か

ヒヤヒヤの橋を渡って得た知識

つき通す嘘にどきどき追われてる

ダイナミックな花火見るのも疲れれます

肘ついて思案の窓の外は雨

横浜市 三村八重子

大阪市 松尾柳右子

鳥取県 土橋 睦子

藤井寺市 高田美代子

香芝市 大内 朝子

八尾市 高橋 夕花

八尾市 宮崎シマ子

大阪市 本間満津子

大阪市 板東 倫子

堺市 桜沢 千世

和歌山市 榎原 公子

東大阪市 安永 春

芦屋市 黒田 能子

寿美さんの句―可愛い子には旅させよという格言を、そのまま詠んであるが「塩」があたらしい見つけ。近頃では若者の旅のスケールも

大きくなり、世界中を羽搏いている。母親として、一回りも二回りも

成長した子を迎えたうれしさが、余すところなく表現されている。瑞

枝さんの句―想い出し笑いの原因は各々に、誰にでも経験がありそう

で共感を呼ぶ。あわただしく乾燥した現代に、電話でなくポストであ

るところがうれしい。あかりさんの句―そこはかとなくユーモアが漂

う句。一体包丁らしくない包丁とはどんなものだったのだろう。正攻

法でゆけば切れなくて役に立たなかつたのが、研いで切れるようにな

つた、との解釈になる。作者の意図は別のところにあるのかも知れな

いが、どちらにしても句づから、作者のはつとした気持が伝わり、

クスツとさせられる。和子さんの句―こういう経験を繰り返しながら

賢い主婦になってゆく。損は授業料としよう。

正

住谷石舟選



正面を見据える鷹の面構え
 正直がお天道さまと仲がいい
 正直に生きるゝと変り者にされ
 日本の文化へ青い眼が正座
 正直な方と気の毒がつている
 当り前なのに正直褒められる
 正当化しよう味方をもつひとり
 正常なうちに遺書をせかされる
 正解のない毎日へ汗を積む
 幾重にも正論包むオブラート
 うしろの正面黙って母が立っている
 井戸端会議妻が持ってた正義感
 正直に言えば誰かに傷が付く
 一生涯正方形で生きた父
 正しいかどうかは天の決めること
 正装を解いてかき込む海苔茶漬
 正論の先に踏み絵が敷いてある
 正道を歩くと損をする世間
 正論を若いわかいと取あわず
 正面の敵より怖い風見鶏
 正面の敵に用心美人だぞ
 自叙伝を正す赤ペン欲しくなる

剛治 朝子 玄也 あずま 旋風 満秋 寛子 次男 政良 シマ子 志洋 倫子 あやめ 靖巳 清史 さち子 志重 水笑 孝雄 脇

正解を無言で見せる父の背な
 モラルハザードこの世は正に世紀末
 正座して石の声聞く恐山
 正も邪もいずれ仏のふところに
 正解の出ぬまま響く発車ベル
 正直に言えと刑事のような妻
 古時計とても律義で正確で
 正論を吐くので輪から外される
 どうとどうと真正面からぶつかろう
 足して二で割った答えに丸がつく
 正面に立つと吹き矢が飛んでくる
 写経する正座へ心洗われる
 正面に置くくと本物らしい壺
 正眼に構える友を信じよう
 若い気でつっぱり過ぎた正義感
 正確な答えが返る腹時計
 気がつけば子は正面を向いてない
 正よりも副が貫禄あるゲスト
 かごめの輪うしろの正面母がいる
 ポケットの奥で揺れている正義感
 正面の乳房に困る目のやり場
 正解は生にも死にも無いだろう
 そろばんに合わぬと知っている正義
 正当化するには少し無理がある

隆盛 勝視 岳水 たず子 勇太 無禄 寿恵子 正雄 富美子 秀夫 洞庵 鉄治 啓子 仁緑 正剣 典子 妻子 強一 霜石 愛論 大輪 天 小池しげお

強

相馬銀波選



格式を捨てると強い風に遭う
 いつ見ても強がつている仁王さま
 十指みな強さで攻める弦の音
 野党また強い与党に押し切られ
 今少し子のため強い母でいる
 一本のペン大衆を動かせり
 生涯の伴侶は強い人がいい
 強過ぎた悪夢と残るきのこ雲
 魔の時刻強い仮面が崩れ出す
 強力な味方あなたに酒がある
 土壇場になれば女性にかなわない
 強い父演じ過ぎたか肩が凝る
 強がりと言えれば孤独がつきまとう
 強い相手に強氣に出るたにし
 強がりも去って八十路の涙つば
 謙虚さが一層強くする秘訣
 座布団の飛ばん横綱待っている
 都落ちそこにも強い敵が待ち
 土壇場へ母の強さをみたく
 責任のないのが強い意見出す
 生きさまの強さもうろう未亡人
 強くない犬は大きな声で吠え

さち子 たず子 睦子 愛論 ミツ子 あずき 照子 花匠 セツ子 典子 一花 遠野 和枝 順風 志重 雅城 隆盛 輝夫 朝子 庸佑 ツネ たもつ

見せかけの強さ女の肩パッド
袷元に強気忍ばせ生きた亡母
泣かされた方が泣かしたのを雇っ
子を庇うことには命かける母
強敵のリストに妻が載っている
もう何も失うもののない強み
もう止めた飛車角落ちで歯が立たぬ
強いのはお酒だけだと皮肉られ
強がりを書いて飛べない水たまり
赤ちゃんの無心にだれも敵わない
ライバルの強さはきつと無心だな
弁の立つ裏方さんの居る強み
引揚げの地獄見て来た老妻がいる
父の座で演じる強い父の役
強いのが勝つと思うていた誤算

佳

赤い糸強い絆であった筈
人間の強さは力だけでない
残高はゼロだが力瘤がある
気の強い女は先に歩かない
地吹雪もなんの津軽の葦である

人

強い男を探しています秋の雲

地

赤組が強そう赤の味方する

天

抱卵の鳥にはひるむものはない

軸

北育ち寒さに強い稲になる

政良
ヒサ子
大輪
めぐみ
孝雄
宏章

倫子
道子
剛治
剛美代子
鉄治
勝視
ちかし
重人

慕情
保州
霜石
しげお
島

大輪

シマ子

高橋
岳水

慌てる

原 さよ子選



倫子
道子
剛治
剛美代子
鉄治
勝視
ちかし
重人

慕情
保州
霜石
しげお
島

大輪

シマ子

高橋
岳水

立ち話孫いなくなり西東
足音にあわてふためくつまみ食い
朝寝坊した日に限り姑が来る
ばあさんがお経唱える震度1
俄雨干した布団にどうしよう
隣から慌てて帰る夕支度
日曜日朝寝してると客の声
故郷の母急に出てきて慌てさせ
インターホン鳴って慌てる風呂上り
来客へ慌て座布団裏返す
雷鳴に慌ててへそをかくす子ら
陣痛へババが慌てるバスの中
無言電話夫のそぶり慌て出す
慌てるとほつれた糸がなおからむ
満点の妻がいきなり離縁状
母が逝く慌てて詫言る夢の中
夏休み娘の金髪に大慌て
脚線美ミニが慌てるつむじ風
開発に慌てた狼が街へ出る
慌てるなあせるな秋の夜は長い
慌て癖ロマンティックが味わえぬ
残り火が時々自分慌てさす

志重
ミツ子
隆盛
道子
正雄
深雪
庸佑
倫子
圭一郎
めぐみ
高明
たえ
岳水
鉄治
シマ子
ヒサ子
清芳
徳三
柳弘
朝子
扶美代

慌てれば腰の座らぬ弥次郎兵衛
慌てると敵は大きくなっていく
焦げている慌てて切った長電話
無駄口が過ぎて所用が慌てて
子期しないスピーチ急に指名され
口止めの口が違って慌て出す
慌てればドミノ倒しになって行く
慌てるな敵も浮き足立っている
レジに来てやっと気付いた桁違い
慌ててない耳は遠いが目に見える
未払いの家賃大家がドア叩く
見えて来た賄賂に秘書が慌てだす
出し抜けに娘結婚すると言う

佳

なるようになると慌てぬ次男坊
ぐらつとき一瞬枕抱え込む
見知らない美女が出てきた遺産分け
慌てるな言うても家が火事なんだ
ほろ酔いでうっかり入る女風呂

人

ステコが慌てています女客

地

初対面少し慌てるほど美人

天

さつそうと出掛ける服へ鳩のふん

軸

慌て者一家でいつも漫画でき

恭昌
雅城
弘一
俣子
像山
靖雄
東吉
あずき

志洋
純子
寛子
煩悩児
大輪

さち子
仁緑
重人
妻子
一花

水笑

善信

武本
碧

初歩教室

題一石

吐田公一

川柳の三要素の一つにユーモアがある。このユーモア性が詠み込まれる川柳はなかなか難しい。下手をすると駄洒落に終ったり、内容が軽薄なものになり易い。川柳界の一茶と呼ばれた須崎豆秋さんの句はその点ピカ一

骨立てたまま二次会へついて行き 豆秋
最近はどうしたユーモアの句が少ない。過日地方の大会に出席した時、選者の一人が抜かれた句にユーモアの溢れた句が多く。会場に笑い声が絶えなかったことを思い出す。ただ出題によってユーモアの作句が左右されることは否めないが――

初歩の方もどうかこのことを頭の隅に入れて、作句の時には活用していただきたい。

添削句

○ハンカチに小石を包む女の子 泰雄

説明句。小石に何らかの心情が必要

▽ハンカチの小石彼との宝もの

○生き先が石ころだらけ老い一人 悦子

着想と石ころだらけの表現はいい。

▽行き先は石ころだらけ老いの道

○百度石祈る親子にウインクス トヨ子

○ウインクスはとってつけたような表現

▽難病へ親子で祈る百度石

○躓いた石蹴とばして深呼吸 菜月

石を人と考えればこゝは深呼吸ではなく、

躓かされた意趣を晴すとすれば――

▽躓いた石蹴とばした憂き晴らし

○炎天へひと雨ほしい石仏 ひさ乃

○単なる表現の問題だが

▽炎天へ雨乞いしたい石仏

○玉砂利で旗振るガイドのヒールとれ 侑子

ヒールとれと言い切ってしまったところがミス。ここはお客様のヒールにすれば

▽玉砂利へヒール遣うガイド旗

○雨に濡れ光る庭石虹の色 たえ

人間が詠めていない。

▽雨に濡れ客待ち顔の庭の石

○墓石をみがいて盆の準備する 文江

下五を単純に結んでしまっている。

▽盆供養墓石しっかと磨きあげ

○石投げる川面に三跳びする波紋 栄呼

人間が詠まれていない。

▽一石の波紋思わぬ身の破滅

○霊場の山で安らく石仏 郁子

人間を詠むには安らぎをもらうとかくれるとすべきではないか

▽霊場で安らぎくれる石仏

○分家との境界石を今日入れる トシエ

「採め事の起らぬように」との意を込める

といのでは

▽境界石悔いを残さぬように入れ

○お地蔵に片手拝みの万歩計 四三郎

中七の表現を変えてみると

▽お地蔵もコースに入れた万歩計

○石垣を積みし旧家も並の人 智加恵

石垣は積んであるもので重複

▽石垣の旧家も今は落ちこぼれ

○坪庭に亡父の自慢の石灯籠 てる代

自慢もいいが

▽坪庭に亡父偲はれる石灯籠

○石段の呼吸しゃがんでととのえる 志重

しゃがんでが冗長

▽石段を見上げて老いがつく吐息

○大理石王宮の間を眺め入る 一歩

一寸した工夫（着想）で川柳らしく

▽王宮の栄枯眺めた大理石

○石けって遊んだあの娘若いまま 千代

下五にひと工夫を

▽石けって遊んだあの娘まだひとり

○ 踏いた石が運動不足だと (例 玲 子)

石を対人関係と考えると

▽ 踏いた石に我が身の不徳知る

○ 動かないそれで重石になれる人 洋 子

上八音字の表現が安易

▽ 座ってるだけで重石になれる人

○ かがやいて人を惑わすダイヤモンド 春 江

中句と下句を入れ替えると

▽ かがやいてダイヤは人を惑わせる

○ おなかにも大事に石を持っている 鈴 美

持つ・持っているだけでなく、その後を詠む。

▽ 胆石を持って大事に生きてます

○ 母病い薬だめなら百度石 五 月

中七の表現が冗長

▽ 薬石を好まぬ母へ百度石

○ EメールIT対応できぬ石頭 満 子

上句は冗句すぎる。EメールかITどちら

かを消去。全部を詠み込む必要はない。

▽ ITへ対応できぬ石頭

○ 城壁の巨石にこもる民労苦 章 司

下五が無理に押し詰めたような表現

▽ 城石にこもる怨嗟の民の声

○ 宮大工石橋叩き三十年過ぎ 紫

下六で字余り。三十年と詠まなくてもよい。

できるだけ下句は五音字にするように

▽ 石橋を叩き鍛えた宮大工

○ 指の石悲しい心知っている 深 雪

指輪の石には色々な思い出があるはずで

▽ 喜びも悲しみも知る指の石

○ 石段の後輩・上り下り 晚 翠

傍点の箇所が意味不明。石段を出世の階段

と解すると

▽ 石段の先輩を越すキャリア組

○ 庭園の行ったらあかと丸い石 宏 子

中八の表現に一考が欲しかった。

▽ 石置いて人を通さぬ庭園美

○ 石頭どう叩いても首振らぬ 芳 江

内容に具体性がない。

▽ 融通がきかぬ役所の石頭

○ 三年間座った石があたたかい 栄 子

三年間の辛抱がその席を温かくしたの方が

いいのでは

▽ 三年間座って石も温くなり

○ 大理石のギリシャの白が目にまぶし よし子

人間が詠まれていない。単なる情景句

▽ 石柱の神殿栄華の夢のあと

○ 石垣の角を曲れば対の家 舞 夢

これも単なる情景句

▽ 石垣に盛衰がある武家屋敷

佳 句

暑からう墓石にかけの缶ビール

磐石の警護八百億につき

くやしさが石を蹴らせるランドセル 和 可

投げられて石はすなおに着地する (浦 玲 子)

石畳母の手を引く孟蘭盆会

石の上三年経てば浦島に 尚 士

働いた指に褒美の石光る

石仏の顔それぞれに彼岸花 一 典

石けりを孫に教えた里の道

石けりも知らず舗装の通学路 純 子

罪のない石が支える縁の下

宝石に勝る笑顔でハイポーズ 美 也 子

つまずいた石が教えた曲り角

玉砂利を踏んで世俗を遠ざける

観光の石畳にも被爆跡 仙 雅 子

不揃いな石が吐きだす自己主張

何時の日かわたしも眠る石洗う 輝 夫

ポケットに角のない石握りしめ

踏いた石から歳を教えられ 方 子

石橋を叩いて時流乗り遅れ

石蹴ってまだ治まらぬ戻り道 栄 翁

石ひとつ手を合わせれば神となる

墓石を迷いがとけるまで洗う 無 禄

(中七の表現がいい)

底辺を流れて丸くなった石 〇八重子

(擬人法で上手に) 敏 子

私の句

墓石もできてそろそろ入る準備



田辺灸六様を悼む

小野 克 枝

灸六主幹のみたまは、今どの辺りにいらっ
しやるのでしょうか。二度と私達の許へは帰っ
てきていただけない、遠い遠い黄泉の国へと
旅立たれたのですね。こんなに辛く悲しい現
実に遭遇することになろうとは、誰が予想し
たでしょうか。

猛暑続く八月二日の早晩、木口公遊編集長
からの電話で灸六主幹の悲報を知りました。

絶句、そして涙……。あまりにも突然すぎて
茫然自失。谷底へ突き落されたような衝撃に
目の前は真っ暗、続く言葉を失ってしまっ
た一瞬でした。

奥様のお話によりますと、七月二十六日午
後から胃の調子が悪くなり、かかりつけの病
院へ入院されたそうですが、思ったより経過
良好で、一週間目には外泊許可が下り、大変
喜んでおられたそうです。その前日には、家
族へ向けての思いやり溢れる川柳を書き記す
など、余裕の時間を過ごされていたはずで

のに、運命の神は無慈悲でした。翌朝四時二
十分、急性心不全のため、不帰の客となつて
しまわれたのです。

主幹は六、七年くらい前から胃、心臓、胆
石症と体調を崩されていたにもかかわらず、
気力と頑張りで責務を全うされました。その
豊かな情熱と知性、ウイットに富んだお人柄、
ムードメーカーとしても、各方面からの信頼
度は高く、他柳社との親睦交流にも出来得る
限りの力を注がれていました。

ご趣味も多才で、川柳は勿論のこと釣り、
ゲートボール、絵、書、カラオケと幅広く、特
に演歌番組（玉島テレビの）にはよく出演され、
堂々と自慢の喉を披露され、拍手喝采を浴び
ておられました。また、今年四月には、倉敷川
柳社の小松原豊年さんが彫刻を寄贈されて花
いっばいの自宅の庭に、生かされるいのちを
洗う四季の花」の句碑を建立されました。
葬祭当日は、参集下さった大勢の方々で会

場の大広間だけでなく、廊下までも埋めつく
されました。玉島社代表として前主幹高見は
まれ様が読まれた弔辞の中で、逝去の前日、家
族に遺された川柳を発表されましたが、涙の
大洪水をせき止めることはできませんでした。
主幹御自身もその夜、まさか天国からのお迎
えが近いとは夢にもご存知なかったと思うの
です。妻を想い、子を想い、孫に寄せる気持の
ありつたけを大好きな川柳に託されたのだと
思います。いよいよ最後の時が参りました。
会員の句、また遠方から馳せ参じて下さった
板尾岳人様ほか数名の方々のお別れの句も、た
敷きつめられた花の上に並べさせていただき
ました。川柳を生き甲斐になさっていた主幹
です。きつと喜んで一人一人の顔を思い浮べ
ながら読んで下さると信じています。

運命の裏切り哀し師を奪い
灸六主幹の句
克枝

義理はたすまで掛け替えない命
突つ介棒の妻が居ないと倒れそ
業病に負けるなひとりではないぞ
三人の子育て娘やりおるわい
幸せな家庭を築きさようなら
(遺句)

本名 田辺伊佐男

戒名 貫道宗伊居士 享年 七十九歳
どうぞ安らかに眠り下さい。 合 掌



石垣花子さんを偲んで

白根 ふみ

語に尽きるものばかりです。

最近の句には

原点を見据えて歩く女達

大丈夫とは言うけど女の手

女だってまさかになれば背負い投げ

このように女性の強かさも見事に表現されています。

空気のように家族がそばにいてくれる

一人ぐらしで大波小波打ち寄せる

ご家族との情景が存分に窺えます。

晩年の作とも思える句――

稜線が見えた頃から気力萎え

地球からこぼれそうで這っている

じりじりと迫る健康状態が窺えます。

そして最後には、

幻の世界見事に薪金

まさに幽女の域に達しておられたことでし

よう。

お母さまの一番お好きだった句は、

百花咲く野に一つずつ物忘れ

まことに穏やかな私の境地とも思える句で、

遙か佇むところだす。

花月妙光大姉

お母さま、長い間私どもをお導き下さり、本当に有難うございました。どうか安らかに眠り下さいませ。さようなら さようなら

々見受けられます。

石垣花子さんは、私が「川柳塔きやらぼく」に入会した頃(昭和六十三年)、きやらぼくの会長さんとしてお母さんのような存在で、近隣句会へはよくお供させて頂きました。

川柳のことが少しわかるようになった頃、お歳とは関係なく、若々しい句を作られることに驚き、博識で閃きの良さにはいつも感心させられていました。

昨年の十月から病床に臥され、ご家族、ご親類の介護も空しく、去る八月十六日静かに旅立たれました(享年八十七歳)。

句会に同行の車中で、いつも「これが最後になるかも」とにこにこしながら元氣よく話しておられたことが懐かしく想い出されます。氣丈なお方で、少々のことはいつも乗り越え一人で静かにお暮しで、私の家とはわずか百メートル程の近さで、私が小さな「賞」を頂くと、必ずお祝いを持って励ましに来て下さり、強く生きておられた姿が句の中にも多

ご家族とは別にゆっくりと過され、私が訪ねると、いつも手造りの作句ノートに思いを馳せておられた姿が浮かんできます。

亡夫の打った釘もぼつぼつ錆びだした数年前にご主人を亡くされ、それまではいつもご主人のリハビリに専念されていました。

鈴付けてから面白くなった猫

広口の瓶 手を入れて見たくなる

今日も元氣でポストへ種を播きにゆく生前、お歳に似合わず身軽なお方で、足取りの軽やかさは驚くほどでした。いそいそと投函される姿が見えてまいります。

みずみずしい感性とユーモアを織り混ぜ、止めどもなく句を産み出し、素晴らしいの一

本社 九月句会

九月七日(木)午後五時半

アウイーナ大阪

少雨だった八月も過ぎ九月に入っても猛暑
 続く中、本社句会には99名の参加があった。

お話は同人の川端一步氏、将棋、川柳、酒
 を三友とし、小学一年生の頃、教えてもらっ
 た将棋は、職場でも修練を積む機会に恵まれ
 上達、大阪市交通局を六十歳で退く前年には
 職場での名人位を獲得するまでになった。

職場を配転する毎に、次々新たな強敵が現
 れ、自身の勉強にもなる。柳号の如く、まさ
 に一歩ずつ前進を果たしたのである。

麻生路郎師も将棋を好まれ、時折随筆にも
 書いておられる。川柳との共通点も多いと言
 う。例えば、呆けない、金がかからない、歩
 (多数の人間)を大切にする等である。

初出席に、飛永ふりこさん、西川節子さん
 筈井欣子さん、中岡単衣さんの四名を迎える。

月間賞は堺市の和田つづや氏に輝く。

(司会)遠野(記名)朝子・澄子
 (受付)たず子・房子(清記)義

席題「誘う」 坊農柳弘選

セクハラにならないように誘います
 極楽はこちらと誘う仁王様

英子 洋

誰の誘いかポケットベルが鳴っている
 カラオケに誘われている半次郎

利武 風云児

誘われて迷う女の絵が解ける
 年下に誘われバラ色が狂う

愛論 弥生

チャミングなあの娘みんなに誘われる
 酔ったふりして甘い言葉を使っている

達子 大輪

声の掛けたら大きなイヌがつかけてきた
 オールシーズンお誘いがあるうちの猫

美代子 義

大声で誘う借りなし貸しもなし
 ボツンと離れてる人に声かける

しげお 扶美代

ちゃん付けで誘ってくれる友が居る
 核ゼロの世界へ誘う熱いベン

弘一 ダン吉

雲海の上で賢治に誘われる
 堅物に黒い誘いのEメール

アキ 恭昌

誘ってもよいが飲まずと困る人
 夢誘うそんな言葉を使っている

武庫坊 ダン吉

誘われてひととき甘い夢をみる
 ジェットコースター誘ったあなた恨みます

いわゑ 義子

誘蛾灯 虫になりたい時もある
 フェロモンで誘うところりまいる虫

典子 朝子

揺れながらお誘い待つ秋桜
 誘われて誘って笑みの吞み仲間

欣子 笛生

どちらからとも無く誘う花と蝶
 女ごころがそつと誘いを待っている

倫子 吐来

プロポーズ荷を分けようと誘われる
 佳

靖巳

手の鳴る方へ鬼の誘惑とも知らず
 夕茜誰も私を誘わない

いゑゑ 重人

ひらひらと枯野へついて来た蝶よ
 手枕がおときの国へ誘い込む

森子 風云児

誘われて女の面につけ変える
 人

たず子

鈴虫に誘われ熱いお茶にする
 地

月子

肥えて出して誘ってくれぬビヤホール
 天

天笑

誘われて花のうねりの中で逢う
 軸

雅文

虫の音が誘う夜長のシンフォニー
 兼題「噂」

稲葉冬葉選

ベストセラー高い噂で買ってみる
 噂の種は待ち合い室で育てられ

照子 満津子

噂聞き気遣う友がいてくれる
 赤とんぼうれしい噂もつてくる

庸佑 いわゑ

成り行きにまかせて噂に逆らわず
 やきもちもちよつと入っている噂

愛論 吐来

青春の不始末噂まだ消えぬ
 噂好き魔物が住んでいる杜宅

弥生 セツ子

むらさきの噂を蒔いた夏帽子
 噂では小野小町と言われている
 生きていた証だ噂してくれる
 悠々と噂の中で満たす愛
 死んだふりしよ七十五日間
 お噂は聞いていますと如才ない
 ある噂尾緒を付けて返される
 噂する人の噂も聞いて来た
 私も噂も太る秋です
 七十五日太って戻って来た噂
 信じてませんと信じている噂
 女三人噂話に目鼻つく
 一瞬の沈黙噂の人が来る
 ハクションと二回出たからいい噂
 心ない噂に輪切りされる僕
 とときは風の噂もきくことだ
 甘栗の皮散らかっている噂
 蓋をした噂が独り歩きする
 風にごころ転げ着ぶくれる噂
 ひとつ消せばひとつ生まれてくる噂
 噂聞く耳の穴から風邪をひく
 噂にもならずばちばち生きている
 佳

アキ 三男 雅文 楓楽 靖巳 房子 瑠美子 希久子 睦子 固哲 利武 女 女 セツ子 夕花 しげお 千秀 寿美 大輪 度 大輪 風云児 千代 とし子 岳人 ますみ

人
 噂からこぼれて落ちたのはジェラシー
 地
 タンポポといっしょに飛んできた噂
 天
 青よりも青く噂は寄せつけぬ
 軸
 秋まつり一期一会を噂され
 兼題「つなぐ」 八十田 洞庵 選

森子 天笑 森子 螢 満津子 女 女 アキ 天笑 惠子 利武 しげお たず子 朝子 正雄 萬的 千代 瑠美子 美代子 夕花 月子 武庫坊

携帯につながれている美人妻
 影と影つないで夜のランデブー
 淋しくて昨日の敵と手をつなぐ
 味噌汁が家族の愛をつなぎとめ
 もどかしい話が続く糸電話
 つなぐ絆ローテーションを組む介護
 萩の道女の温い手とつなぐ
 ついて来いその一言につながれる
 アドリブでつなぐ如才のない男
 離れ住む家族をつなぐEメール
 芸をする猿もやっぱりつながれる
 俵せをつないでくれる膝の孫
 国境を越えてつないだ血の絆
 つながれていたのをころっと忘れてた
 情という太い鎖につながれる
 ゆったりとつないでいきたい好奇心
 佳

ますみ 紫香 昭子 千里 靖巳 雅文 冬葉 寿美 萬的 正坊 三男 一風 英子 義 扶美代 ふりこ 楓楽 勇太 泰子 寿美 房子 泰子 隆盛 森子

佳

お風呂場で孫と比べるのはよそ
お尻まで色艶のよいおびんずる
はけるまで働くつもり靴の艶
この人にまだ欲がある顔の艶
艶のない石だ丸くあたたかい

人

定年の日まではあった靴の艶

地

ワックスをかけたら私まだ売れる

天

声の艶母も元気でやっている

軸

艶の良いおさつで秋の服買いに

兼題「裁く」

橘高薫風選

延長戦女神の裁きまだつかぬ
証人は私で私に裁かれる
自己主張過ぎて己を裁いてる
子供とは親とは何か裁かれる
大家族をてきばき裁く肝っ玉
家の中裁判長はママだろう
一刀両断ケーキ上手に裁く母
孫がきて爺ちゃん負けと裁かれる
鮎食のツケに何時かは裁かれる
じわじわと人科地球に裁かれる
裁くのが苦手でジャンケンで決める
官僚の賄賂を裁くトップ記事
裁判に勝って人生やり直す

かすみ

(北)哲男

弥生

勇太

一風

大輪

美代子

しげお

庸佑

満津子

照子

三郎

倫子

柳宏子

睦子

一風

寿美

洋

重人

吐来

扶美代

身の内で理非を問いつつ生きて行く

わたくしを裁こうとする妻がいる

妻からは無言の刑を受けました

沈黙が一番きつい裁きなり

六法は知らぬが人情が裁く

ノック裁いて更衣室花ざかり

あやふやな裁き痛みを感じない

優柔不断私を裁くコンパクト

数え唄そのうち僕も裁かれる

魂の抜け殻裁く神やある

秋の風男を裁く女郎花

彼岸花咲いて水子に裁かれる

嘘一つ蠟燭の灯に裁かれる

人ひとり裁いて幸福遠くする

人が人裁く話に身構える

裁くものいつかはきつと裁かれる

人が人裁いて神を悲しめます

お遍路の笠が重たい罪と罰

ちよつと向き変えていたなら裁かれず

物言いはついたが軍配通りなり

神よりも妻の裁きが恐ろしい

人裁く神に許しを乞いながら

佳

エンマ様私を地獄へやらないで

放蕩の男を裁く紙おむつ

勝訴の幟はやてのごとく現われる

裁かれる方に立派な髭がある

裁くのも裁かれるのも母の子よ

文

義太

金子

典子

しげお

久峰

柳弘

大輪

(北)哲男

冬葉

朝子

たす子

弥生

シマ子

正坊

弥生

恭昌

単衣

伽羅

諷云児

靖巳

寿美子

朝子

隆盛

澄子

かすみ

人

裁判所に一度も行ったことがない

地

許せない自分を裁けない私

天

越前の裁きに少年は居ない

軸

麻原に裁かれ長い裁判だ

義

希久子

和田つづや

川柳ますだ五十号記念

誌上川柳大会

課題(各3句)

「大」

但見石花菜選
八木千代選

「台」

新家完司選
長谷川博子選

「題」

原章峰選
金築雨学選

投句料

八十円切手10枚
◎用紙 自由

締切り

投句先

十月十五日必着
〒698-0000
益田市久城町八〇二二一

田中美柗子方

益田川柳会



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

女房には新手の口実考える
お断りする口実に苦勞する
傘忘れ逢える口実出来ました
見え見えの口実女将笑てはる
伝統の老舗支える三代目
父ちゃんの腕が支える三世代
支え合う政官財の深い仲
家族四人僕が支えて平和です

三幸川柳教室

桜井

千秀報

東吉 甚一 さよ子 萬的 昭二 盛之 蛙城 呂万

ネクタイに無縁な父の感謝状
ネクタイが言いたいことを塞ぎ止める
片時も惜しんでミシン踏む仕事
長い目で見ていいと少しあるわたし
ライバルの背中が少し見えて来た
音程が少しずれてるこ愛嬌
耳掻きで掏うほどでも毒は毒
自画自賛しただけなさいですか
欠点が少ないから温かい
かけ慣れて眼鏡おわたしの顔になる
投票日眼鏡の曇り拭いて行く

堺川柳会

河内

月子報

回転ドアーいちにのさんではいます
亡妻からのシグナルだろう赤く咲き
失脚をしたライバルが返り咲く
本心が見えてくるまで掘ってみる
留守番の猫にもラジオ聞かせとく
母の耳いい事はかり聞いている
夫より先に逝くのは違反らしい
うちの明星二歳が囁く張り切って
月食へ月下美人はうろたえる
玉手箱に期待のかから入れている
ふる里は未だ玄関に鍵がない
年でんなルール忘れたふりをする
八月の星と命を語り合う
丹精に込めるように咲いてくれ
草書体の手紙にきつく叱られる
田舎者だったあなたが好きでした

上機嫌ハハア阪神勝ってるな
恵みの湯も時に不機嫌噴くマクマ
病院のおみやげ食後の五色豆
くすりだと言って晩酌やめぬ父
ふる里の水屋に眠る置き薬
胃薬はもう要りません定年後
ノスタルジー置き薬屋の紙風船
総スカンも薬になってない総理
十歳は若く見せたく化粧する
お化粧に元気をもらう病み上がり
嬉しい日悲しい日にもまた化粧
化粧より恋が女を磨きます
逢えるかも少し濃い目に紅を引く
顔よりも化粧まわしに眼を見張る
化粧品より祖母一徹な嫌袋
回覧を隣へ回すにも化粧
やさしさを秘めている母の薄化粧
口実にあつらえ向きのにわか雨
口実が出来て自信の靴をはく

美智子 辰郎 笑司 穰一 松風 俣子 ダン吉 房枝 弘子 仁緑 みつ江 苑子 路子 白光子 柳宏子 理村 洋 鹿太郎

豊太郎 正一 マリ子 かず子 正葡 桂香 千秀 登美代 町子 義雄 哲平 朋月 玄也 冬虹 日の出 舞夢 伽羅 春文 りつえ つづや なぎさ 小雪 半銭 楓 五月

期待していないが薬のんでいる
珈琲館こだけで逢う人がある
ドア越しに小言言つたら聞こえてた
喧嘩にもルールがあったがき仲間
仏様の声で睡蓮がひらく
ホームレスに降る星屑よバンになれ
和泉ナンバーやはりルールに無頓着
バラバラのルールで暮らす三代
聞いてない振りして父の耳動く
鳥になりふるりの空回りたい
自惚れて昂を歌いまくってる
待つ人へ真つすぐに飛ぶ流れ星
校則を破く奴ほど大物に
ルール違反をしたら蜚のいない川

川柳高知

川竹

松風報

泰子 アキ 美波 美子 勇太 深雪 梓 東雲 紫 かりん 八千代 みつこ

失敗へ他人は陰で手をたたき
人前は他人行儀をする二人
他人事のように思っていた老後
出棺が済むと他人はもういない
他人事なのに喋くちばし入れたがり
高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報
淋しくて約束ばかりする手帳
公約を忘れ達磨に叱られる
約束を必ず守る味噌醬油
オーイお茶仏壇からの声がする
艶のある声に引かれて北新地
することが何にも無いという悩み
消しても消しても煩惱の灯はゆれる
悩ましいすそがちらちら京の舞
七十歳まだ煩惱に明け暮れる
人間をずっと続けている悩み
しっかりと躡られてる白い足袋
お茶席の清楚際立つ足袋の裏
白足袋が幾度泣いたか芸の道
喪主の座に小さくすわる白い足袋
でたためめの昔話が面白い
でたためめに生きていませんホームレス
でたためめのようで味あるピカソの絵
議事堂がでたため色に光ってる
でたためめの男に受けた疵がある
定刻に来たことがない村のバス
貰わんと損するようにティッシュ取る
据え膳が楽しめという妻の旅

松風 孝雄 暖 佳風 功 スミ子 波留吉 和子 五月 秀夫 泰雄 活恵 義一 惠美子 しげお 吉之助 満寿蔵 靖巳 あやめ 紫香 高栄 澄子 求芽 礫 正坊 治三郎 尚士

父の地図子の地図すこし違う距離
八月の悪夢が巡る夾竹桃
飲む話呼ばんでも来る嫌な奴
花火師の闇の動作を誰も見ず
古傷のかけらがたまに出て困る
定位置にこだわりの無い父の椅子
初恋は小指に巻いた赤い糸
真実の声に表も裏もない
はびきの市民川柳会 徳山みつこ報
本棚に病が増やす専門書
栄転の椅子へ笑いの幅が出来
遠回りするには手綱短すぎ
禁酒令出た夕飯の味気なさ
やる瀬ない溜息を聞くイヤリング
この儘でいいから母さん生きていて
音楽は天才という不精罷
エスプレッソ私の午後が満ちてくる
盛り上がる海に男の竿躍る
雨風はいつとき明日はきつと晴れ
せかくの相合傘に雨が止む
人恋しおんなハッピーに凝っている
敗因はやっぱり汗の量だらう
故郷が見えるラムネの泡の中
めぐる忌の殊更沁みて雨季に入る

佳句地十選 (9月号から)

早川盛夫

重人 百合子 柳宏子 光穂 晴美 節子 一笛 諷云児 一知 敦子 りつえ かつみ 志洋 寿々女 与根一 直子 典子 諷云児 良子 ダン吉 町子 寿恵子

溜息がリズムになつて古稀夫婦
ばあちゃんも歌姫になる発表会
婚約発表入籍も赤ちゃんも
お命を頂戴リストラ社内報

発表の景気に嘘がまじつて

発表を余儀なくさせるフライデー

バリコレのモデルに惚れた二日酔

発表へ絵馬をそわそわと揺れ動き

居酒屋のレギュラー今日もトラ談義

レギュラーも一つ違えば二軍落ち

レギュラーの貫禄見せたホームラン

姑がレギュラーの位置動かない

レギュラーになつて自由を奪われる

レギュラーもリズムが狂う風の音

保安帽脱いでやれやれ昼にする

やれやれと入浴剤の香に浸る

やれやれとのんびり出来ぬ父の貨車

やれやれと弁当にする岩清水

完走の汗をしっかりと抱いている

野良犬にやれやれ思う時はない

ひたすらに歩きつづけてまだ麓

一日がゆっくり暮れていい寝息

川柳藤井寺

高田美代子報

大金業ばかりへ国のえこひいき

えこひいきされそこなつた百貨店

なんとなく臭ってくるなえこひいき

若い人なら助けに行こう海開き

紹介状のせいか就職できました

吐来 桂子 美喜 忠宏 敏 久仁子 満寿蔵 重人 昭平 昇 四三郎 絢子 一壺 たけし 洞庵 猿杓 庸佑 みつこ ダン吉 泰子 専平 美代子 六点 利武 かつみ 昌子 恒雄

金持ちの子には優しい保育園
妹ばかり愛した母を姉が看る
遺言の中にひいきの見え隠れ
袖の下がほどよく効いたえこひいき

えこひいきされた悔しさバネにする

えこひいき見つけたボスが覗んでる

えこひいきバネに勝ち取るトンの位置

先生はべっぴんさんだけ褒めすぎる

付けまつ毛とって私にもどる今日

つけまつ毛悲しい話避けている

退屈な話まつ毛もねむそうだい

いい人と言われてまつ毛伏せている

まつ毛落ちてなかったかと番台で聞いている

気晴らしになるかも知れぬつけまつ毛

親不孝してないつもり逆まつ毛

罪と罰十七歳の濡れまつ毛

二枚舌冴えて人間軽くなる

ベレー帽だいぶん丸くなった舌

妻の舌うわさの花を五分咲きに

舌足らずな二歳の子にもある頑固

毒舌はちよいちよい吐くがいい男

よく回る舌でみんなを鎮めろ

花散つてひとりになった毒舌家

おだてると女の舌はよく喋る

すべらせた舌が困った後始末

大原川柳社

矢内寿恵子報

三枚目だから気楽に世が渡れ

三枚目恋には縁がないらしい

志洋 婦美枝 一簡 悦子 昭子 瑠美子 修六 龍一 マサ子 重人 和樹 アキ 公輔 花梢 喜代子 美代子 春蘭 敦子 栄一 よしえ 正一 桂子 絹歌 扶美代 鐘造 みづえ あやこ

火花だって抱いているんだ三枚目
三枚目少しの酒で泣き上戸
三枚目今日は主役の化粧する
三枚目でいいの好きになった人

仲良しが寄れば笑わす三枚目

お金などない好い人で三枚目

父さんが上手く演じる三枚目

三枚目丸く納めて幕閉じる

二枚目と思つた筈が三枚目

ぶらぶらと三日坊主の三枚目

親の腰かじりとんでる三枚目

三枚目通して闇魔笑わせる

三枚目の父で笑いの渦にいます

三枚目上手に主役引き立てる

三丁目劇場ももての三枚目

頼られて鉢巻しめる三枚目

聞き上手話上手な三枚目

三枚目どう振りつける地芸家居

三枚目今日も笑いをさげてる

身についた仕種とことん三枚目

三枚目涙を拭いた舞台裏

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

ワルツなら踊れそうだな月の夜

いい汗をかいて踊りの輪の中に

一度だけ踊つてみたい蝸牛

踊り疲れて月とプランコしています

好きな娘の視線気になる盆踊り

ふるさとの訛のなかにいて踊る

さちこ 玉恵 地佳平 辰江 しず 妻子 巴子 悦子 喜美子 敏子 敏子 南花 みさえ たづ子 ひでの はるみ 絹子 昭子 静子 あすなろ 寿恵子 知恵子 静恵 すみこ 紫晃 桂子

風船がはじけて泣いた夏祭り
 夏祭り空一杯に散る火花
 原爆の名簿書き足す慰霊祭
 あとの祭りが礼儀正しくたたまる
 気がつけばいつも祭りの中にいる
 夏祭り浴衣姿の娘にみとれ
 提灯が花嫁さんの道つくる
 盆提灯親を泣かせた娘が贈る
 初盆の提灯揺れて夜が深む
 先輩の持つ提灯について行く
 思い出を追う提灯がまわり出す
 提灯の心残りが揺れている
 恋をした河童が星と泣いている
 浄土まで行ってくれるか流れ星
 平凡なぐらし星屑美しい
 生きざまを綴る窓辺に星が降る
 星影のワルツ踊って別れよう
 その中に疵を求めて盆の星
 七色の火花に酔って心浮く
 肩車思い出させた遠火花
 町の子は火花で遊ぶ場所もない
 地藏尊火花にバツと輝いて
 花火師の魂花を轟かす
 もやもやが吹き飛ぶような花火音

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

昭二 智恵子 茂美 章峰 日出子 秀子 注湖 多賀子 義良 博子 小鹿 満江 米子 久枝 房子 螢 煩悩児 保子 たけし 政子 登美子 昌枝 叮紅

おもてなし最後は熱いお茶で締め
 百円の寄付へ三度も通わされ
 ほろ酔いの錯覚背筋伸びている
 表彰状八〇二〇函で笑い
 骨肉の恨み果てなしエルサレム
 三十七度に名古屋の鯉は良く耐えて
 高額の保険も貯蓄もない保身

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

晴翠 高明 勝明 幸夫 水笑 虹汀 正剣 和重 よしこ 豊太 射月芳 優子 紀美女 さち子 英子 美子 正博 吞天 裕美 利治 克子 佐一 三喜夫 健三郎 三男

華奢な娘がダンス運転する笑顔
 華奢な妻に一生紐を握られる
 母さんの昔は何処柳腰
 両膝に孫の鼓動を抱きしめる
 どきどきと仮面を付けて行く敵地
 指もなお胸もどきどき封を切る
 どきどきと誘い待ってるコンパクト
 どきどきが満ちてあなたと結ばれた
 ドキドキとアバンチュールへ計を練る
 受験番号どきどき探すあのスリル

川柳大坂

坊農

柳弘報

信子 千寿子 紀久子 精子 和子 寿子 稚代 紀久子 泰子 あつむ 民子 照月 雅巢 信醉 川童 聴一 美花 芳香 青道 希久志 鉄心 洛醉 いづみ 秋雄 柳昌久

血税で経営不振の尻を拭き
意地張った女の棘が悔いている
暴言に効目の薬おまへんか
眼の動きだけで用足す老いふたり
酒注いで次の言葉待つ女
輝かしい生命動く父となる
父ゆずりカミナリ落とすタイミング
健康に効く水ばくも飲んでます
蚊取器を点けているのに蚊の羽音
神様の効目しっかり鈴を振る
ばろかすに叱る仲間輪が温い
嘘泣きをして確かめている効き目
年棒の効目で強いジャイアンツ

川柳塔なら

坊農

柳弘報

本蔭棒 朝子
ダン吉 一風
一步 比呂志
まつお 敏
金太 笑風
柳宏子 重人
柳弘

二度童子老母は自分の国つくり
七夕に西瓜供えて僕は酒
子や孫に鉄砲弾はつくらせぬ
筆無精も孫にさそれれ笹かざり
うたた寝をしても怪しい肘枕
裏表紙まできっちり整える
体裁がいつも気になる鬼瓦
笹竹へ園児素直な願いごと
納得がゆくまで肘を張る一途
体裁よく転ばせている美辞麗句
激辛のカレーをつくる倦怠期
七夕へ商魂かける夏祭り
七夕の祈りもつすぐ母になる
句集つくる思案に葉文館ニュース
つくること止めたペンだこ疼き出す
井の中の蛙が肘を張っている

うぶみ川柳会

上田

宣子報

真理子 秋泉 茂雄 絹子 良一 美代子 重人 聰一 惠美子 洋子 秋雄 眞生夫 道子 卓 國治 千梢 登美枝 雄人 一枝 也恵 良男 孝男 天人 華子 芳江

七半でアバンチュールが出たまんま
少年の蛇追いかけて夏の午後
へそくりをはたき冒険株を買う
風紋を間合いの風が模倣する
いいことは真似て自分の味にする
この歳でアバンチュールを仄めかす
人間はやおらうつらと死ねばよい
仕合わせの余生やおらに孫の守り
また冒険をしたが折れた翼

川柳塔鹿野みか月

土橋

静生 天雀 ユリ子 葉士人 健一 あづま 洋 黙光 宣子 螢報 喜与志 幸枝 武子 弘子 実満 節子 諷人 久枝 てるゑ 小鹿 盛桜 保子 みどり 茶乃 菊乃 富久江 かつ乃 公子

5. 5. 5. 5. 5.

リゾートの夕日哀愁多すぎる

リゾートに来て夢ばかり追うやせ蛙

霧に抱かれるリゾートの朝が好き

リゾートに暮らして世事にうとくなり

親も子も苦しんでます登校拒否

問題にならんと相手してくれず

問題のひとつが解けぬもどかしさ

問題児きびしすぎるよ世間の目

問題に揺れが止まらぬヤジロベ

我が家ではいつも夫が問題児

サミットも問題点は先送り

体重計に問題はない娘の肥満

問題はないよとばれるまで強気

先送りした問題に囲まれる

かわはら川柳会

上田 俊路報

豊作も一夜の嵐なめてゆく

孫台風去って余いんのふとん干し

台風よ不況をつれて飛んで行け

世直しの台風となれこの瞳

切れぬよう皆の情について行く

亡夫とは切れない縁でぐちこぼす

切れる人つなぎ留める縄がない

澄み切った空一杯がおらのもの

切った糸つないで上げる迷い風

しがらみを切れば活路が見えてくる

城北川柳会

川久保睦子報

戦時中叩き込まれた神の国

輝 美

吉之助

磔

正 坊

高 栄

紫 香

美智子

勝 子

ただし

益 子

幸 代

百合子

柳宏子

葉 子

余吏子

寿 子

ふじ子

正 子

一 薫

登 生

静 子

悦 子

泰 良

俊 路

東 雲

ベツタでも何とかなった九十九折リ

夢見るようにこの世忘れて水芭蕉

信用はしたいが大樹揺れている

あれから二年やっぱりカイワレがうまい

王様とピエロの夫婦仲がよい

横波を受けた子舟が揺れ止まぬ

老醜を笑顔でおしゃれして生きる

紫陽花においてきばりにされちゃった

今世紀あと半年の陽が昇る

笹舟に夢が大きい二〇〇〇年

野良猫の人も勝る母性愛

皇太后昭和の母も星になり

梅雨ぐもり猫も見ている空模様

行く先は風にまかせたちぎれ雲

自信ないポーズに油断して負ける

くだらない事に挑んでいるギネス

桐の木よ孫もボツボツ適齢期

聞く耳は持たず笑ってやりすごす

入退院何度もこなし生き上手

妻の愚痴補聴器なしで良く聞こえ

美しいバラに何故あるきついとけ

寝たきりを見ている妻も要介護

目が合えば何も言えないレモンティー

父に似た羅漢に悩み打ち明ける

まだ欲があるから明日も生きられる

焼肉の添え物でよし豆もやし

乱世に神も仏も匙を投げ

和を保つ嘘が上手になりました

乾杯のグラス嫉妬と羨望と

ただし

寿美子

あき子

求 芽

和歌子

藤 子

朝 子

達 子

博 遊

トヨ子

久留美

高 栄

とし子

一 枝

道 子

昭 子

政 子

あやめ

順 三

はじめ

あい子

白 峰

春 蘭

睦 子

志華子

典 子

倫 子

千 里

公 一

倉吉川柳会

松本よしえ報

なるほどと軽く押せないのは判こ

動揺へなるほど振り子止まらない

サミットはなるほど米のきげんとり

なるほどと煮物でわかる母の味

核廃止なるほど空が晴れて来た

なる程と聞いてやんわり意見言う

霧の中でもっとと素敵な彼に見え

なるほどと先祖の知恵に育まれ

少年へ欠けたか母の子守歌

おばーちゃん霧のむこうに孫の声

甘酸っぱい汗のにおいだ勝戦戦

少年のポケットにある明日の種子

冷や汗を笑いとばした腋の下

汗なめる私の元気をなめる

少年が走る走れと犬に言う

少年が栗毛にピラス光らせる

金持ちだなるほどケチな事を言う

霧深く踏み込んでいたけもの道

霧の中ビーナスを見た航海士

丸焼きの仔豚なるほどいける味

野球少年肘にはまれのカットバン

霧の町捨てて都会で夢みたい

なるほどなる筈だよあの練習

背伸びしたぶんだけ汗をかいている

嘘ついて霧の中から出てこない

咽喉科霧吹きかけておだいじに

お手伝い口だけ出して汗出さず

きみ子

雄々

小 生

智 子

次 男

みち子

喜美子

喜美子

和 枝

都 子

紀美子

よしえ

まさこ

和歌子

一 夫

玲 子

かつみ

ゆり子

石花菜

季 芳

重 忠

久 子

志 郎

睦 子

蜚 蜚

日出子

十三男

霧の中ナイトが来るを待っている
霧吹いて下さしいわが増えてきた
高級なワインも同じ汗になる

はまゆう川柳会 中後 清史報

預金しているのにカメラ睨んでる
なけなしの預金を笑うゼロ金利
切りつめて貯めた預金のこれが利子
にらめつこ残高淋し預金帳

酔うほどに過去へ過去へと逆上る
酔い醒めて数える机に手が震う
意気地なし酔うたふりして本音言う
片頬で酔い片頬で泣く酒もある

いつも酔ったような生き方で過こし
酔うほどに周りが小さく見えてくる
偏見が怖い障害かも知れぬ
白い手の青い道すじ触れてみる

振り出しに戻れと夜が明けてくる
やる事はやった夜明けを待つばかり
夜明けまで話のつきぬ里帰り
夜明けまで踊った若さなつかしい

雌鶏が夜明けを告げる世になった
夜明けまで恋だ愛だと青春譜
さあ夜明け今日のプランは立ててある
利ぼん

川柳塔みぞくち 小西 雄々報

夕立がしばしの涼を持ってきた
夕立へほとと一息小豆の芽
夕立へ傘おき忘れ陽が射した

天雀 康子 芳光
太一 慶一 サト美
恵美子 修也 生米子
清史 優子 純子
大輪 佳子 すみれ
さだ代 雄造 平和
利ぼん

夕立の後の涼しさもらう風
花回廊夕立呼んで潤った
葉を揺らす夕立来そう蛙鳴く
夕立も大刀打ちできぬ猛暑です
大地割るような雷雨に身をすくめ
夕立が待ち遠しいと花語る
空梅雨も明けて夕立待つ緑
夕立の後はさわやか蟬しぐれ
夕立へ辛いことなど忘れよう

南大阪川柳会

吉川

寿美報

脇役に慣らされている紅しょうが
ボーカイフェイスで都会に住み慣れる
慣れ過ぎた仕事油断が落し穴
茶髪でも田植に慣れたお嫁さん
ときめいた余韻が荷物になる夜更け
神の国みんな背負って戦った
手荷物とパパは後から来る帰省
抜きをされて重荷を背負わされ
肩の荷の重さが励みになることも
傷心を縫い合せてる酒二合
森を縫う風はおときの匂いする
過疎を縫う赤字のバスがありがたい
單身赴任上手に針も使います
人間のホコロビを縫う思いやり
縫代をたつぷりとつて身構える
ねた尽きてふたりでつく柿の種
勘どころ十八番のねたが心得る
ベテランは巧みにねたを拾い上げ

静江 和代 信敬 久子 康女 弘子 正光 智恵子 雄々
信治 楓楽 文秋 日出子 萬的 東雲 遠野 庸佑 度 洋子 朝子 幸子 ばっは 直子 寿美 道子 重人 たもつ

老母ひとり軒場すずめを友にして
信じてた味方に軒を盗まれる
門前町軒を列ねるお蔭さま
軒のつらら零ドレミファソと落ちる
軒並に同じ物売る温泉街
公園に軒を連ねてホームレス
軒下につるす未来の種袋
想像も出来ないネタの出るニュース
許されて父かない温い荷が届き
賞味期限の娘荷物になっている
原発が今重い荷になっている
人波を縫うて酔わせるコンチキチン

富柳会(前月分) 池 森子報

お偉方身内かばうて仁王立ち
たまごならよかつたうちの育児論
泣けるだけ泣いて悲しみはね返す
傘のしずく黒髪ぬらす待ち合せ
しあわせのしずくを受ける小さな手
身だしなみ凛と百歳紅をさす
独身主義増えて出雲も不況風
身を反らしあなたの愛を問うてみる
身支度を早くしすぎて独り旅
ことわる気になった午後から雨になる
青春を返してほしい戦中派
雑草と戦闘開始蝶が舞う
のんびりと寄せては返す春の風
淋しさを洗う夕陽とプランコと
黒い血を吐いて死んでる黄金虫

志華子 千里 憲太郎 雅文 柳伸 柳宏子 章久 ひさ乃 太郎 ガン吉 とみを 久則 かなこ 花梢 けい子 和子 冬虹 三和子 夕子 文子 義清 深雪 勇夫 紅紫朗 浩二

削って削って裸のいろになる

菜畑の彩の主張へふり返り

こわいのは口出ししないあの男

父の忌がめぐる麦畑はどこへやら

ユーモアが乾かないよう水をやる

ふり向けどもう両親の影がない

バラが好き垣根に這ったうつくしき

笑われよ涙もろさと春の風邪

火吹き竹火種を見つめ直して

夕ざくら愛も情けも地へかえる

再会は昔のままのビヤホール

蝶々を追つかけている縄電車

叩き返した溜飲と挫折感

古い日記の空白にあるモニュメント

授かった命を返すまで磨く

富柳会

池

森子報

昼顔は真夏の汗を笑ってる

出て行った影が私をはなさない

懺悔する私を笑っている遺影

おとなしい人に内気が間違われ

遊んだあとの風呂の広さが寂しいな

梅雨晴れ間煩悩流す句読点

背を向けて手負いの猪のワンカップ

耐えている心の雨は語れない

場の空気変える勇気もないわたし

手術直前神も仏もみんな呼ぶ

口笛を吹いてくるりと夏を裏返す

せせらぎに心安らぐ恋童

アキ
信子

千歩

あき子

喜代子

東雲

春蘭

登子

夕花

昭水

富美子

満秋

夢成

欣之

久則

かなこ

高栄

満秋

春蘭

信子

富美子

喜代子

あき子

宏

夢成

文子

試験場未だ手放せぬ参考書

その直前仏の笑みを見せ給う

花描き欲と怒りを忘れたり

安心と心配置いて子等帰る

憔悴の顔には言えぬ恨み言

愛憎を括って海へ捨てに行く

裏切りは出来ないいつたりの指輪

縁乱の果てが内気にあつた声

直前になって崩れた血の絆

いつ死んでも安心ですと言える幸

内気でずっと貰った妻が強すぎる

たいていは時が解決してくれる

次世紀の辞書に内気が見当らぬ

ゴーイングマイウエイ嘘の無いカルテ

鬼か蛇かそれでも渡る熱い河

にんげんのドラマを仕舞う沙羅双樹

子供部屋安心出来ぬ鍵がある

直前で鬼一匹が笛を吹く

いずも川柳会

佐藤

治代報

八月の海は哀しい詩がある

母の海ナイフバットも包む愛

海鳴りに男の唄が溶けてゆく

人生の哀愁海女のもがり笛

残照の海が約束する明日

大海に夢のハードル高くする

人は皆虹に向かって旅をする

一枚の下着を持って旅に出る

過去捨てて男は無から旅立ちに

一夫

夕子

昭水

一慧

三和子

けい子

アキ

登子

紅紫朗

勇

たかし

深雪

和子

潤子

冬虹

年人

花梢

森子

房子

蘭水

昭二

多輝子

寿美

美江子

すみこ

忠義

青湖

若かった日の思い出をたむ旅

旅半ば靴紐きつく締め直す

いつ旅に出たのだろつか蟬の殻

ブライドが自惚れている肩の骨

自惚れか熱い視線が頬を射る

自惚れとおく様まだまだ気付かない

うぬばれを内ポケットに入れている

自惚れかにはかみですすか謎の笑み

とび魚は鳥のかたちに自惚れる

新風になじめず平のまま終り

新風を入れると右脳回り出す

新風に変わると携帯電話鳴る

新風が吹いて明るくなった群れ

新風に誘われてから軽い眩暈

新風はどうあれ古い服を着る

お雛子の汗も見事な熱帯夜

夏祭りカラコロ広場に星が降る

父ちゃんの背が恋しい夏まつり

祭りの晩は裏口が開いている

八月の祭り平和な笛を吹く

焼き鯖で作る自慢の祭り寿司

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

補聴器を外し聞いているグチ話

敗戦記話れば想うキノコ雲

食わせろと空の財布にせつかれる

冷凍した愚痴が溶けだすティータム

足痛の女房のアゴが指図する

向こう脛生傷絶えぬ竹トンボ

治代

多喜

彬

義良

カツ子

英佐子

久子

ちえ

章峰

草丘

昌枝

叮紅

あきら

多賀子

満江

まこと

きみえ

茂美

畔

篤子

れいじ

ひかり

八重子

吟笑

マツエ

坊太郎

まさる

我が国も若い地雷に悩まされ
読み書きの苦手な父の太い指
乾坤の違いライバル競い合い
ベランダが満艦飾の好天気
年金を目当に電話で物を売る
菜園に初物一つ千切りかね
深い穴あるとも知らず手を噛まれ
旅立ちに無事をお願い神仏
雑布が乾いて妻の骨ソ症
手の中に蛍灯乗せて夢一ツ
螢の灯程の金利に夢託す
金剛杖迷える衆生導かれ

竹原川柳会

時広

一路報

今世紀最後の夏に賭けてみる
ひとりで生きる目覚まし時計一つして
鳩時計夫婦のドラマ見て飽かず
ゆっくりと柱時計のネジを巻く
歩きつづけて時に道草したくなる
還暦後時計のねじが緩みがち
逝く時は俺より後と言っておく
燃えつきて日誌読む夜は眠れない
御米光拝んだ幸よ喜びよ
その時になつたら下りて来る二階
お星さまとって泣いた子も二十
きらきらと輝く七夕の星よ
少女のようにキラメク星に酔っている
星空が綺麗で邪心持てぬまま
小心を髭が補佐してくれている

輝夫 勝 放任 あきら 文仙 寿々女 いさむ 治延 かおり 正雪 くに子 貞月 大千枝 蘭幸 喜美子 房子 栄恵 節生 節生 孝枝 汎美 笑子 一枝 夏喜 正宏 菁居 笹舟

初出社髭の守衛に御辞儀する
なかなかの髭だこの猫男前
ゴキブリの髭が伸びてるキッチンで
職安で髭が思案にくれている
いばらせておくライオンの髭妻のヒゲ
髭まではよう映すまい影法師

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

アンテナの先には深い謎がある
子育ての積木くずしにあった謎
謎ひとつ解けぬが夫を信じねば
謎の男が居るから妻が美しい
時計鳴る明治を今に残す街
集団の強い匂いのする街よ
街灯りの役目を自販機が果たし
夜の街馬鹿な男の馬鹿な酒
財布には金よりカード多くなり
子供には打出の小槌にカード見え
ポケモンのカード地獄に落ちた孫
したたかな打算文句をつけたがる
子の文句鋭いとこを突いてくる
待ちぼうけ文句たらたら電話口
雨上がりの軒の雫と数え歌
千葉すずの怒りの雫乾くまで
俄か雨髪の雫も匂いたつ
一滴の雫に蛙向きを変え

千里 朝子 美弥子 一志 度 雅文 文秋 晋吾 東雲 柳宏子 和代 萬的 みどり 庸佑 くに子 としを 湖風 愛論

はたる川柳同好会

田中正三郎報

三陸でマンボウ食った宿タオル

馬洗

湯上がりのチビ追っかけるバスタオル
初挑戦タオルが入るにがい過去
熱帯夜タオルケットの置きどころ
束の間の昼寝にタオルかけてあり
ずばり医師老化現象ですと言っ
結末をずばりと当ててこわくなる
幼子がずばり核心について言っ
核心をずばりについて疎まれる
手相見もずばりと言った泣きばくろ
炭坑節おどれて街は老いている
入選を知らせてる友の字が踊る
踊りが名作を生む伊豆の宿
阿波おどり踊る阿呆がひとりふえ
下駄預けられて眠れぬ夜が続き
宿の下駄忍ぶ蛇の目に添った影
下駄脱いだ白い素足の鼻緒あと
ガングロに浴衣と下駄はミスマツチ

雪子 柳童 実 長一 直次 久子 正三郎 蜜柳 まみ子 保子 祥風 正安 千里志 敬子 よしろう 見清 緑骨

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

グルメには縁ない暮らし茄子漬ける
宴会の挨拶長く喉が鳴る
花束より私は欲しい愛一語
首すじを軽く叩いてくれる夫
樽酒の栓が弾んで喉が鳴る
つり書には料理得意とあったけど
七夕で恋という字を知りました
七夕の前夜の雨に気が揉める
子が巣立ち女の顔を取り戻す
七夕にたった一つの願い事

春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏至 剛治 ミツ子 道子

一言に背いて嫁が角をだす

七夕のイメーじで盛る冷やそうめん

矢印に背いて若さとりもどす

真剣に駆けてくる顔再会す

ささの葉に母に習った観世経り

七夕を孫とけんかで飾る笹

いちばんに頼りになった背いた子

七夕のロマンを孫に語りつき

出来たのかあの娘近頃眼をそらし

生ビール涸れた心にしみわたる

主婦の顔脱いで温泉パラダイス

短冊の願いとどけよ星まつり

七夕へ星の数ほどある祈り

七夕の笹に揺れてる淡い恋

七夕の路地にぎやかな願いごと

たなばたの笹に履歴書つてある

小児科医叩かれながら打つ注射

横浜あおば川柳会

清水 潮華報

教理とは別神様も金が必要

秘湯にもボディシャンプー置いてある

もつといいと諷めてくれるコンパクト

棲む鬼が冒険しようそそのかす

神前の誓い忘れず共白髪

山容を二倍楽しむ湖の端

太陽を時々神にして拝む

楊貴妃を入れたいお湯のなめらかさ

かがみよ鏡ニキロ瘦せるのむずかしい

迷ってるわたしを鬼がそそのかす

君江

春子

一風

幸枝

隆盛

美千子

恭一

奈良司

友甫

正純

朝子

一道

賢子

ますみ

トシエ

まさと

いづみ

街湖

かず枝

和可

道子

純子

亜希子

ふみ

雅子

良子

不況風貧乏神をかりたてる

露天風呂真ん中だけが空いている

御神体知らないままに願ひ事

大自然独り占めして居る秘湯

温泉がトラック便でやって来る

かくれんぼ鬼の孤独にじっと耐え

靖国の神が踏み絵にされる夏

ふるさとの民話の鬼はもう居ない

混合に惹かれはるる山の宿

本もののわたし鏡の中にいる

近所では亭主の鑑と言われている

露天風呂熟女の声に追い出され

ああ言えはこう言う鬼と丸く生き

家中の鏡みがいてうさ晴らす

日々平穏神様ご無沙汰しています

姿見に映った僕に影がない

病癒え神に預ける余命表

幸運もやっぱり神の所為にされ

西宮北口川柳会

亀岡

すぐ涙ぐむ八月の白い雲

雲海へ汚れた愚痴はすてられぬ

雲つかむ話にしばしうさ忘れ

鯛雲 男は男らしく行く

ふところに湧く雲がありまだ迷う

出稼ぎのとんで行きたい雲疾る

雨雲の行方気になる盆踊り

いい夢を下さい真つ白い枕

草枕空の広さがうれしゅうて

嘉信

笑子

八重子

広和

鈴美

サト子

徳三

早智

あらた

省子

政勝

敏

句多留

かづ子

為佐子

宏虫

潮華

満秋

哲子報

孝一

義子

てる

しげお

求芽

嘉代子

哲嗣

民宿の枕の下で海が鳴る

盆なればご先祖立つや夢枕

震災の怖さ枕は忘れない

草枕星は降るもの祈るもの

取り上げたベンから不満こぼれ出す

少しずつ角取れて出た人間味

取り柄などないが楽しく暮してる

夢と空っぽになるインク壺

サングラス取るとやさしい顔だった

年を取る何て素敵なことだろう

女ツ気の少ない息子が揉める

残り少ない余生塗る色選っている

数少ない中でビタリの靴みつけ

知ったかぶり少し嫌味にも聞こえ

昂ぶりが少なくなつた老いの坂

薄給を支えた妻の座ゆるぎなし

野良猫が定時間に来て食べてゆく

美しい富士も登ればゴミの山

握手の手洗えば愛が逃げて行く

人生のボーナス僕の余命表

病床へ元気届いた一筆箋

ローズ川柳会

山崎 君子報

日記帳この幸せを逃さない

孫からの盆の約束糸電話

勝つて涙流けて涙の甲子園

鹿太

無禄

美智子

哲子

靖巳

澄子

能子

比ろ志

トミエ

ルイ子

哲男

武庫坊

静子

萬的

メ女

曙蝶

江美

五月

春蘭

正坊

奮水

てる

ミサヲ

キク子

藍

哲子

学徒兵の心を慰ぶ流れ雲

鳩車はすんだ声が帰らない

特攻の友かお盆に星が飛ぶ

送り火にご先祖さまのお発ちなり

亡父母の笑顔がゆれるお盆の灯

あかいスカーフはすんだあの目アルバムに

生き下手だがはずむ心はすててない

盆踊り弾む若さがうらやましい

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

掟には背く私の旗がある

背くとは知らずに赤い実を食べる

矢印に背いて若さととりもどす

背く気はないがレールが錆びている

ふる里に背いて乗った終電車

好きな酒俺に背いて狂わせる

無表情激しい意志をこめている

空想がとぎれて母の顔になる

遊ぶだけあそんだ顔があなたかい

おかめひょっとこそんなお顔にある平和

ハイハイがようやく出来た子の笑顔

離婚届亭主ようやく印を押し

ようやくに許してくれた御両親

職退いてようやく人間らしいめし

父に盾突きようやく自立できました

ようやくと危機を脱した千羽鶴

千羽鶴ようやく千の顔を折る

叩かれる度に脱皮の芸の幅

泡のないビールになってゆく別れ

まさお

澄子

武庫坊

年代

はつ絵

君子

義子

雅子

ダン吉

森子

一風

アキ

とみ

弘宏

弘一

度

のぼる

勝美

弘直

祥一

三郎

弥生

剛治

千里

太郎

三男

朝子

素通りはできぬジョッキで哭いた街

祝勝のビール妬心がぶきこぼれ

大ジョッキ絆ひとつを守り抜く

花束に仕掛けられたか熱くなる

十字路に花束絶えぬ悲しみも

花束の中で謀反が首もたげ

花束がよれよれになる三次会

キュービッドバラ百本のプロポーズ

うなだれて事故を悲しむ花の束

満面の笑みで花束渡す悪

花束の豪華な方へ気が動き

川柳塔おとり

原みさを報

子も帰り仏も送りもつ残暑

母さんの声が尖った夏休み

夏休み九人家族が振りまわす

夏祭り市民がもえた傘踊り

冷房に汗を知らない判を押す

汗も出ぬ暮しに馴れた弱い足

ありがとつひのひとことが汗忘れさせ

火の恋に汗拭きな女神像

バット少年涙と汗の北紀行

甲子園涙と汗の二重奏

約束を守り一生棒にふり

携帯で軽い約束してしまふ

約束の中味は知らぬ花時計

酒の席軽い約束してしまふ

子沢山母は約束よく忘れ

指切りの恋を消してるタムの底

年人

和夫

秋雄

加津子

宏子

柳宏子

柳伸

柳弘

ますみ

欣之

シマ子

道子

孝子

風花

清子

舎人

艶子

宏章

雄々

義弘

小生

一弘

由多香

幸次郎

せつ子

仁子

邦昭

ダイエット決めたはずだよお母さん

契約はやっぱり妻が上だった

僕は僕やっぱり他人とは違ふ

ファッションもやはり気になるクラス会

次の世もやっぱり母の娘でいたい

辛抱の背ながやっぱり丸くなる

やっぱりと言われたくない老いの意地

盆踊りやはり故郷へ足が向く

老いてなお五欲やっぱり捨てきれぬ

次の世もやっぱり君と歩きたい

一日の始めはやはりおはようから

い事が何かやっぱり起りそつ

宇宙旅行伴はやっぱり妻にする

自販機の裏側にある謀

川柳ねやがわ

江口

炎天にめげぬ選手の汗光る

炎天下ラプコールするカキ氷

氷屋の旗もとけそつ炎天下

炎天下蟬も鳴き止む昼休み

炎天にも八十路元気に野良仕事

炎天へ喪服の列が駅を降り

炎天に盲導犬の瞳がやさし

足腰に比べ脳にはまだパワー

バイアグラなんか要らぬと豪語する

パワー全開生きて年金とり戻す

アメリカのパワーが地球儀をまわす

いのち産むおんなパワーをふり絞る

子想図を描いてしまった我が余生

敦子

千秋

真一

紀子

ゆきの

登美

伝住

和子

彰雄

雅通

富貴子

庸二

黙光

みさを

度報

亜也子

時弘

とし子

三郎

波留吉

波留吉

冬葉

博泉

弘一

たもつ

度

朝子

利昭

取り巻きの予想を越える七光り
泡はじけその赤字予想越え
予想屋が教えた穴に目を回す
風にこぼれるように予想ははずれます

俺よりももてているのが予想外
夜回りで団地の地図に慣れてくる
三十八度線地図の上から何時消える
緯度経度熟知している渡り鳥

明日への旅私なりの地図を抱く
まなうらの地図リハビリで一步二歩
いつまでも奇麗で居てねと別れ
孫の絵はひまわりどれも笑い顔

ハモの値もワツジョイされる夏祭
女房も天下国家を論じます
口下手をうまくしゃべらす聞き上手
写真一枚長い話になる老母

夏休み朝から母の叱る声
岩美川柳会
石谷美恵子報

情熱で人の心を説き伏せる
トラブルは秘書の鞆に押し込める
淑女にも都合があつてアデランス
熱冷めてボタン一つがずれている

恋の熱体温計ではかれない
生と死のトラブルお茶を点てている
トラブルを上手に裁く店のママ
主義主張捨てて海月のように生き

劇薬の味だ淑女の白い指
トラブルもあつて夫婦の仲が良い
主一 郎

忠 恵
央 子
高 栄
磔 磔
亜 成
英 王 子
勇 太 朗
仁 清
光 子
ル イ 子
文 秋
日 出 子
修 修
あやめ
一 風
洋 洋
庸 佑

静 生
孝 男
季 芳
主 一 郎

大 漁
蟹 郎
忠 良
單 車
車 車
忠 良
蟹 郎
大 漁
徹 徹
螢 螢
季 芳
主 一 郎

つつましく淑女のまねをしています
老骨の財布色気で狙われる
走攻守揃いドラフト狙われる
拜啓八月の穴に狙われています

熱中するものがあり見る鏡
トラブルがあちこち起きて老い進む
狙われてバラはしつかり刺を抱き
嫁さんは淑女がいいと限らない

生返事いつも海月のような人
熱中にするが成果はいまひとつ
反論を淑女と言われ押し殺す
ブライドはブランド並と言う淑女

熱い涙も口惜し涙ももう湧かぬ
川柳ふうもん
杉本 孝男報

達筆の督促状がそつと来た
保険金目当てわが子に手をかける
首賭けて男は次の波を待つ
ダイエット烏賊がスルメになっただけ

嫁さんの尻に敷かれて情けない
情けなや顔見るたびに銭のこと
玄関をそつと開ける朝帰り
パソコンに情けない程あやつられ

情けないことバネにして樹は伸びる
天真爛漫ダイエットなど止めとこう
ダイエット元気な食い気邪魔をする
いい話母のうしろでそつと聞く

情けない男だ逃げてばかりいる
ダイエット出来ない妻も憎めない
一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

一 夫
喬 水
かつみ
洋 洋
きみ子
睦 子
一 京
一 瑶
節 子
裕 子
た ぬ
公 乃
美 恵 子

それ以上やせて赤ちゃん産めますか
長生きを邪魔にされてる情けない
アルツハイマー親が夜な夜な徘徊す
サミットへご馳走食べに行ってくる

イライラに心が欠ける情けなき
枢の母にそつと最後の紅を引く
情けないプロポーションが崩れた
不況風老舗はそつと幕閉める

困りごとそつと話して知恵を借り
そつとした火種がえらいことになる
何げない仕草でそつとふれてみる
ダイエット体重計が憎く見え

ダイエットする程バンドゆるまない
ダイエットする娘羨む病み上がり
傷ついたブライドそつと捨てに行く
虹を追う男小石に蹟く

川柳塔打吹
米田 幸子報

鉛筆を鼻に差しては思案顔
たたき売り値下げするまで首を振る
ときめきが伝わる沈黙が続く
めらめらと燃えた日もあるホームレス

鉛筆を耳に挟んでいるロダン
駅伝の常連校でマークされ
伝わらぬ真意が胸でもがいてる
私も地球中では真つ赤な火

めらめらと私も燃えた超美人
川柳と選挙に使う鉛筆だ
陰口でめらめらもえてきた瞳
玲 泉

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

玲 泉
松 盛
勝 見
克 枝
孝 恵
か つ み
石 花 菜
よしえ
芳 光
龍 枝
しろう

私の映画ノート

閑人閑話

田中正坊

私は、定年後の趣味（道楽）を讀書・映画と旅行の三つにしばっている。讀書については、五月号のこの欄に書いたので、今回は映画を取り上げることにする。見たがり知たがりの私は、讀書と映画鑑賞をほぼ同じレベルの知的作業だと信じている。これは私だけの考え方だと思っていれば、はからずも有力な同志がいた。『ローマ人の物語』など、イタリアの歴史に関する著作で知られる塩野七生さんである。

この人の著書『人びとのかたち』は、扉に「映画鑑賞を讀書と同列において私を育ててくれた今は亡き父と母に捧げる」という言葉を掲げ、全編を映画に関するエッセーで埋めている。映画と言っても、アメリカとフランス、イタリア、ロシアなどの洋画ばかりだが、解説や鑑賞にとどまらず、映画の表現や内容から人生論をみちびき出している。文庫版で

も出版されているので、一読をお勧めする。彼女と違って私の場合は、両親からそのような高尚な教育を受けた記憶はないが、縁あって子どもの頃から内外の映画を観る機会が多く、今も映画には目がない。したがって、映画鑑賞に関しては、質的にはともかく、量的にはこの人とあまり変わりはなく、同書に登場する映画のほとんどを観ている。

そこで前回の「讀書ノート」に準じて、数年前から書きとめている「映画ノート」を繰ってみたい。ここでは邦画と洋画に分けて、その題名と製作国名、監督または主演俳優名を記録しているが、試みに一九九九年について見ると、邦画三十二本、洋画七十八本、計百十本となっている。後で分ったことだが、これはたまたま、この年の讀書冊数とほぼ一致する。ただしこのうち、映画館へ足を運んで観たのは十四本に過ぎず、その他はテレビとビデオである。

新作の映画を観るときには、できるだけ事前に新聞や雑誌の映画評を読み、価値のある作品かどうかを確かめるが、テレビやビデオでは、前年度にベスト・テンになったものや定評のある往年の名作を中心に選んでいる。テレビはやはりNHKは、新旧を問わず精選した秀作を放映しており、特に教育放送のア

ジア映画祭では、あまり観る機会がない中国や韓国、インド、イランなどの話題作を取り上げている。また、民間放送は駄作が少なくないが、気を付けていると思わぬ佳作にめぐり逢うこともあり、衛星放送やハイビジョン放送では、主として特集的にすぐれた洋画を放映している。

ビデオのレンタルは、日数が限られるのでごくたまにしか利用しないが、最近の大作は映画館における観客数にビデオの販売数をブラスした数字を基礎に製作費を計上すると言われていた。したがって、新刊書が日をおかずに文庫版となるように、映画も上映がヤマを越した時点でビデオ化されているようだ。蔵書と同じように、ビデオを数百本も持つている映画ファンを知っている。

終わりに、私が昨年从今年にかけて観た映画の中で、特に見ごたえのあった作品をいくつか紹介してこのノートを閉じたい。邦画では、「鉄道員（ぽっぽや）」と「カンゾー先生」が傑作で、地味な作品だが、時代物の「雨あがる」がさわやかだった。洋画では、「宋家の三姉妹」「ダロウエイ夫人」「グリーンマイル」が好かったが、ごく最近に観た中国映画「あの子を探して」には、ひさしぶりに心を洗われた。

★「第八回風のまち川柳大賞」各入賞作品が決定した。

〈大賞〉

カンナ屑風に吹かれて父
帰る 舟辺 隆雄

★紫波二百号記念第十回野

村胡堂全国誌上川柳大会

◎ジュニアの部(小学生・

中学生)題「手」▽選者

瀧尻善英・北村泰章・宇

部功・高橋力◎高校生

の部題「飛ぶ」▽選者

熊谷岳朗・照井始◎一般の部

題「鍵」▽選者

藤沢岳豊・佐藤岳俊・佐藤美枝子

「雑詠」▽選者

大野風柳齋藤大雄・森中恵美子◎投

句要項「ジュニアおよび高

校生の部」ハガキ使用

2句以内・団体は用紙自由

学校名または団体名・学年

住所・氏名を明記の上、ま

とめて投句のこと。無料

「一般の部」便箋大用紙

(B5)使用・各題2句(二

題計4句)を一口とする。

住所・氏名・性別・年齢・
電話番号を明記。投句料

1口1000円(小為替)

締切〓10月31日(消印有効)

投句先〓〒028-1330

6岩手県紫波町日詰西3-

2-2葛岡ヒデ子方野村胡

堂川柳大会係〓019-6

76-4731

▽日川協役員人事△

★社団法人全日本川柳協会

の新役員が決まった。川柳

塔関係では、常務理事に橘

高薫風氏、地区選出の常任

幹事には次の各氏が決定。

河内天笑・田中正坊・西

出楓楽・波多野五葉庵・野

村太茂津・小林由多香・濱

野奇童

▽人事往來△

★薫風主幹は8月13日、平

成14年国民文化祭とつとり

2002の会場下見のため

鳥取行。9月3日は西日本

川柳大会出席のため弓削行

楓楽副理事長は選者。

▼計報▲

■石垣花子さん(参与・米

子市)は8月16日、病気の

ため死去87歳。8月18日

瑞仙寺で行われた告別式に

は、板尾岳人副理事長はじ

め柳友多数がお見送りした。

▽御芳志御礼△

■石垣武志氏、政岡日枝子

さん(理事・米子市)から、

母堂石垣花子さんの供養と

して金一封を拝受。

▽お願い△

■8月配布の同人名簿に訂

正があれば申し出て下さい。

■10月は各地で文化祭が行

われますが、川柳塔社同人

の秀句受賞者を、すみやか

に本社事務所へお知らせ下

さい。24日着分までは2カ

月先の掲載になります。

荒介さんを偲ぶ会

と き 平成12年11月12日(日)午前11時開場

ところ 米子天満屋5Fてんまやホール

TEL 0859-35-1111(内線1516)

(米子駅より皆生行きバスにて天満屋入口下車)

出句締め切り 12時半 開会 13時10分 閉会 15時半

兼題と選者(各題2句 席題ナシ 欠席投句拝辞)

「大山(だいせん)」 橘 高 薫 風 選(大阪)

「違 う」 小松原 爽 介 選(神戸)

「たばこ」 森 中 恵美子 選(大阪)

「礼(れい)」 金 築 雨 学 選(平田)

「菜」 八 木 千 代 選(米子)

会 費 4000円(作品発表誌・秀句賞呈、懇親宴共)

昼食は各自でお済ませ下さい

当会場に於て16時から小宴

宿泊についてはお問い合わせ下さい

0859-22-4213 林 瑞枝

主 催 川柳塔きやらぼく

○平成13年からは風薫る5月に川柳塔きやらぼく大会を
行う予定ですので、よろしく御支援の程お願い申し上
げます。

岸和田市文化祭参加

第50回 岸和田市民川柳大会

と き 10月21日(土) 正午開場

ところ 岸和田市立春木市民センター3階
(南海電車春木駅下車100m)

おはなし 西田 柳宏子 氏
兼 題 (各題2句 出席者に限る)
「気配り」 池 森 子 選
「意 地」 垂井 千寿子 選
「ふところ」 中田 たつお 選
「約 束」 河 内 月 子 選
「決 心」 阿 萬 萬 的 選
「善 意」 橘 高 薫 風 選

締 切 1時30分

会 費 1500円(記念品・大会誌呈・軽食付)
賞 文化祭賞・文化祭奨励賞・文化
協会賞・操子賞・きしせん賞

連絡先 芳地理村(0724-27-5029)

主 催 岸和田市・岸和田市教育委員会

共 催 岸和田市文化祭実行委員会

参加団体 岸和田川柳会

市制75周年記念

第51回 西宮市民文化祭参加川柳大会

と き 10月15日(日)正午より受付・1時半締切

ところ 西宮市民会館4階中会議室
(阪神西宮駅北出口・JR西宮駅南下車役所南隣)

宿題と選者(各題2句 席題なし)

「外 す」 長 島 敏 子 選
「ほのぼの」 山 本 義 子 選
「ベツト」 佐野 美知子 選
「荒れる」 住田 英比古 選
「毒」 石 井 冬 魚 選
「リモコン」 福 島 直 球 選

会 費 1000円(作品集郵送・各天地人賞呈)

投 句 10月7日までに投句料(80円切手
×8枚)同封の上、便箋1枚に6題各
2句、計12句連記して下記へ。

〒662-0023

西宮市城山12-8 水無瀬富久恵宛
T E L 0798-73-4666

懇親宴 会費4000円(当日受付)

共 催 西宮川柳同好会・西宮北口川柳会
学文川柳・西宮川柳会 ほか

第50回 富田林市民文化祭
川 柳 大 会

と き 10月28日(土) 12時30分開場

13時30分締切

(昼食は済ませてお越し下さい)

ところ 富田林市中央公民館2階ホール
T E L 0721-24-3333
(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ約200m)

お 話 墨作二郎氏「冬二の言いたかったこと」

宿 題 (各題2句 席題なし)

「邪 魔」(じゃま) 廣 島 英 子 選
「不細工」(ふさいく) 杉 森 節 子 選
「だから」 海 堀 酔 月 選
「削 る」 西 出 楓 楽 選
「冬」 前 田 芙 己 代 選
「ピエロ」 池 森 子 選

会 費 1500円(作品集・参加賞呈)

賞 秀句呈

懇親宴 4000円(当日受付)

主 催 富田林市・富田林市教育委員会
(財)富田林市文化振興事業団
富田林文化連盟

後 援 富柳会

連絡先 〒584-0043 富柳会事務局 池 森 子
T E L 0721-25-0603

文化祭吹田市民川柳大会

と き 10月22日(日) 午前11時開場

ところ 吹田市文化会館メシアター3階
梅田より北千里行て約15分(阪急吹田駅西口前)

お 話 森中 恵美子 氏

宿 題 連想吟 川島 諷云児 選

語 る 西 美和子 選

台 詞 前 田 咲 二 選

一 度 山 本 礫 選

旦 那 西 出 楓 楽 選

いのち 梶川 雄次郎 選

各題2句 出句締切1時(多忙者9時受付)

会 費 1000円 秀吟賞・参加賞呈

懇親会 4000円(10月15日までに事務局へ)

見学について どなたでも結構です。

作品集が入用の方のみ「住所・氏名」

を受付へ提出下さい。

事務局 早崎和子(06-6381-2431)

吹田市教育委員会

主 催 文化団体協議会

吹 田 川 柳 会

第10回 枚方市民川柳大会

と き 10月29日(日) 午後1時半開場
 ところ 枚方公園青少年センター 3F
 (京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分)
 お 話 「北河内の民話」 桜井 敬夫氏
 (地域文化誌まんだ代表)
 宿 題 「トリック」 安井英華選
 「癒す」 竹森雀舎選
 「こだま」 辻 葉選
 「鎖」 中林酔虎選
 「天使」 西美和子選
 「磨く」 前 たもつ選
 席題なし 各題2句 締切午後2時半
 参加費 500円(発表誌呈)欠席投句拝辞
 賞 市長賞・市教育委員長賞
 市議会議長賞
 主 催 枚方くらわんか川柳会
 後 援 枚方市・枚方市教育委員会
 午前中はひらかたパークでお楽しみ下さい。
 会場近くです
 連絡先 足立 淑子(072-853-8153)

第34回 東大阪市文化祭参加 第28回 市民川柳大会

と き 10月29日(日)
 正午開場・出句締切1時
 ところ 東大阪市立社会教育センター3階
 (近鉄布施駅北へ5分)
 ビデオ放映「まちかど探訪」他
 宿 題 (各題2句・出席者のみ)
 「然り」 竹内良伸選
 「挑戦」 高田博泉選
 「砂」 横田マリ子選
 「意地」 吉村一風選
 「ほのぼの」 長江時子選
 「包む」 藤原一志選
 「酒」 土田欣之選
 各題秀吟・佳吟賞・記念日・発表誌呈
 会 費 1000円
 懇親会 3000円(当日申込み)
 お問い合わせ 片岡湖風(0729-65-1341)
 主 催 東大阪市文化連盟
 東大阪市川柳同好会・わか葉川柳会
 後 援 東大阪市・東大阪市教育委員会

第42回 豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午開場
 1時締切
 ところ 豊中市中央公民館1階ホール
 (阪急宝塚線曽根駅東100m)
 お 話 杉岡東丘氏
 宿 題 (各題1句 披露50音順)
 「心」 牧浦完次選
 「青」 桑田砂輝守選
 「自由吟」 田中正坊選
 (カタカナ語を入れて)
 「男」 田中新一選
 「愛」 中田たつお選
 「恥」 久保田半蔵門選
 「夢」 木野由紀子選
 会 費 1500円(軽食・記念品・発表誌呈)
 賞 豊中市市長賞ほか各題に賞進呈
 主 催 豊中川柳会・豊中市立公民館
 連絡先 〒560-0015 豊中市赤阪1-6-9
 石川 勝
 TEL 06-6854-1990

第47回 文化芸術・芸能祭 八尾市川柳大会

と き 11月5日(日) 正午
 ところ 八尾市文化会館4F第一会議室
 (ブリズムホール)(近鉄八尾駅下車)
 宿 題 「ピンク」 西出楓楽選
 「器」 久保田半蔵門選
 「梯子」 坂本晴美選
 「炎」 入口とみを選
 「流れ」 中川一選
 「星」 森中恵美子選
 「哲学」 土田欣之選
 締 切 午後1時(各題2句)
 懇親宴 3500円(希望者のみ当日受付)
 主 催 八尾市・八尾市教育委員会
 八尾市文化芸術・芸能祭
 実行委員会
 後 援 八尾市民川柳会
 川柳クラブ「わたの花」

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 思い切り・待望・仕事	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	17日(火)午後1時から よもや・ポンプ・絵・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市烏江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木)正午から 筋・痛む・影法師・そっくり 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
岸 和 田 川 柳 会	21日(土)正午から 第50回市民川柳大会 (10月号P.132掲載)	岸和田市立春木市民センター3階 南海春木駅下車すぐラパーク岸和田内 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
城 北 川 柳 会	21日(土)午後1時から アイデア・人間・余る・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	21日(土)午後1時から 説明・飛行機・クロスワード・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮本方 坂田和歌子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	22日(日)午後1時から エール・鍵っ子・みっちり・「差別」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から 菊・夜・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	25日(水)午後6時から 焼石・依存・勇気・エレキ	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から ピンク・炎・哲学	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	29日(日)正午から 第28回市民川柳大会 (10月号P.133掲載)	東大阪市立社会教育センター3F 近鉄布施駅北へ5分 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 ふうもん 吟 社	29日(日)午後1時から 野暮・ページ・こっそり	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	30日(月)午後1時から 倍・クッション・平野	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

10 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	第27回堺まつり川柳誌上大会 9月30日締切 (9月号P.47掲載)	投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 唐津支部	1日(日)午後1時半から 音・責任・漬ける	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	5日(木)午後1時から 弁当・毒・探す	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	6日(金)午後1時から どんぐり・肌・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	7日(土)午後1時から 詳しい・二の足・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	7日(土)午後4時から 狙う・早熟・儂い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	8日(日)午後1時から 午後・ちらほら・コピー (冠句「おっと」と中7と下5を考えて下さい)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	9日(月)午後1時から 糸・打つ・違い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	10日(火)午後1時から 嫌い・凝る・スリル	豊中市立荻池公民館 阪急・モノレール荻池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10日(火)午後1時半から 活気・さわやか・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
八尾市民 川 柳 会	11日(水)午後6時から わがまま・折る・肩・頑固	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 打 吹	14日(土)午後1時から ハンサム・濁る・割る	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	14日(土)午後1時半から ロボット・棚・案内	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 ねやがわ	15日(日)正午から 手帳・痛い・美味しい・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉

編集後記

★平成十二年度六賞受賞者の皆さん、おめでと〜ございます。

★先月の編集後記に書いてある事で、とりあえず編集を希久子さんと私が引継ぐことになった。みつ子さんから八月始め関係書類がダンボールで届いた。

★これまでから編集長の仕事の大変さは、理解をしているつもりだったが、改めて驚いている。今迄手伝っていたのは、ほんの枝葉の先だったと、つくづく思い知らされた。以後、大変な状況に居られるみつ子さんの指示を仰ぎながら、一つ一つ作業を進めている。

★悪いことには、各地柳壇を担当して下さっていた周信さんが、体調を悪くされ七月から入院中。希久子さん

んはお母さんの介護に懸命な日々の中、時間を遣り繰って協力して下さい。

★こんな事情の中、今日十月号がお届け出来たのは、ひとえに先輩の正坊さんと金太さんという強力な助っ人のお陰である。ご両人共各々の事情で、ごく短期間に限ると釘をさされてはいるが、本当に有り難い。八月から義子さんが手伝って下さっている事も心強い。

★最初に「とりあえず」と書いた理由だが、私自身七月中旬頃から眼に異常が出て、検査を受けたところ酷使を禁じられた。治療法はなく他の眼の病気が高い確率で出るという。そんな訳で早急に後任に引継いでもらわざるを得ない。

★それまで同人・誌友の皆さんに迷惑をかけないよう努力しますのでよろしくお願ひします。

(ふ)

ひとこと

葉文館倒産に思う

『オール川柳』を発行していた葉文館出版が倒産した。過去に数号でギブ・アップした川柳専門誌の例もあり、いつまで続くかと思っていたが、五年ともたなかった。

私もかつて出版社に勤めたことがあり、全く他人事とは思えないし、専門誌の灯が消えたのは残念ではあるが、やはり今にして思いあたるのが少なくない。

出版は、読者と筆者があつてはじめて成り立つ仕事で、何よりもそれを大事にすべきである。そして文化的事業であるからには、信義と志を持たねばならない。

それがこの出版社には欠け、営利本位に走って大風呂敷を広げすぎたきらいがある。今からでもよい。多大な迷惑をかけた読者をはじめ関係者に対して、心から謝罪すべきである。(田中正坊)

☆ケアマネジャーという耳慣れぬ肩書を持つ人にお会いした。母92歳がお世話になる在宅介護のケアプランを作成して下さいといううら若い女性であった。

☆四月から実施されたばかりの介護保険は、まだまだ手さぐりで、現場の方でさえ、まごついていてのですよと言われる。退院をしたばかりの母の日常について自分で出来ること、出来ぬ

事、家族の目から見た状態い、ベッド、車椅子等福祉などを詳しく聞かれ、申請書を作成、医師の意見書も付けて役所で審査の結果、一ヶ月程して認定がおりるしくみになっている。

☆一時は命も危ぶまれた母は奇跡的に回復、百日振りに退院をした。ベッドの周りを歩きたい歩く程度の回復はしたが、一人暮らしなので人手を借りなければならぬ。要介護2の認定をもら

☆介護を必要とする高齢者を社会全体で支援しようと言う結構な制度ではあるが、まだまだ不安材料一杯の船出であることは確か。(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（12月号）

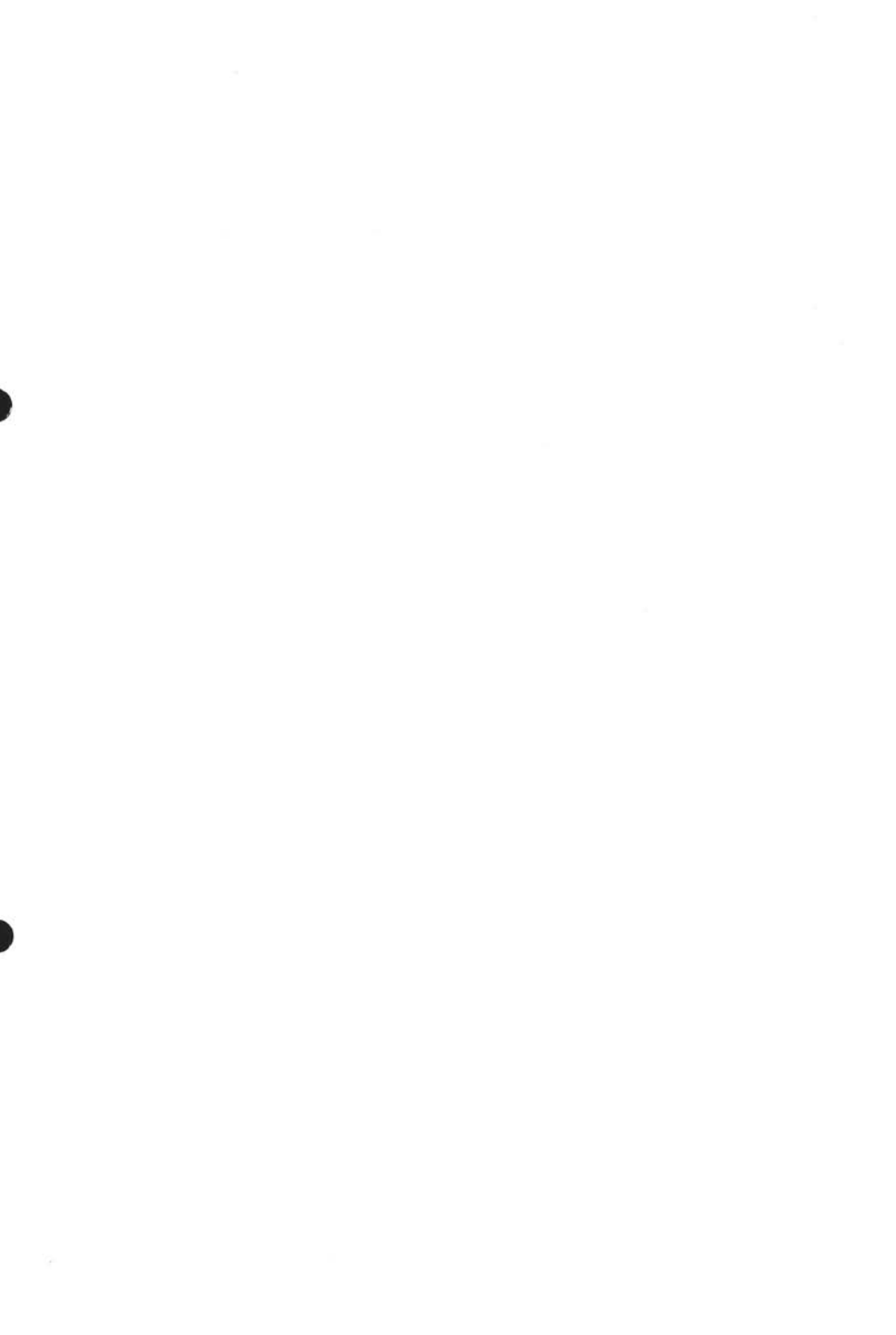
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

川柳塔 (8句)	橘高薰風選
水煙抄 (8句)	河内天笑選
愛染帖 (3句)	波多野五樂庵選
茴香の花 (3句)	西出楓樂選
吟 (3句)	中後清史選
責任	板東倫子選
漬ける	今愁女選
吐田公一担当	

12月号発表
(10月15日締切)

1月号 課題吟「年」「客」
「絵馬」
初歩教室「世」

平成12年度 大阪文化祭

第52回 川柳大会

と き 11月25日(土) 午前11時開場
ところ 大阪市立北区民センター
(地下鉄堺筋線「扇町」駅、またはJR
環状線「天満」駅から5分)
宿題 (各題2句・1時締切・出席者に限る)
「橋」 北川 アキラ 選
「おいしい」 森 中 恵美子 選
「ジレンマ」 久保田 元 紀 選
「揺 れ」 金 山 佐保子 選
「時事雑詠」 柏 原 幻四郎 選
「顔」 西 口 いわゑ 選
席 題 当日2題発表します
会 費 1000円(作品集後日郵送)
賞 各題秀句に各主催者名「川柳賞」
主 催 大阪府・大阪府教育委員会
大阪市・大阪市教育委員会

本社11月句会 7日(火) 予定

兼題 「選ぶ」「音」「着る」
「思案」「計る」

夜市川柳募集

第5回「震える」 舟 渡 杏 花 選
ハガキに3句 10月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟) および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。

(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く
平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 六百元 (送料84円)

半年分 四 千 円 (送料共)

一年分 七千九百円（同）

二〇〇〇年(平成十二年)十月一日発行

橘 高 蕉

印刷所 美研
ア
ー
ト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

發行所
川柳塔社

電話 (06) 691-6914番

振替〇〇九八〇―五―三三三六八番



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 6941-9631

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX (06) 6372-1178